

2010年9月 第27号

人環フォーラム NO.27

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

鼎談：京の町づくり

中嶋節子 / 高田光雄 / 間宮陽介

特集：虚と実

戸田剛文 / 船橋新太郎 / 廣野由美子 / 森谷敏夫 / 元木泰雄 / 立木秀樹 / 山梨正明

人環フォーラム

2010 第27号

●特集—虚と実

京都大学大学院人間・環境学研究科



HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

巻頭言	1
色は匂へと咲きぬるを	宮崎興二
鼎談	2
京の町づくり	中嶋節子／高田光雄／間宮陽介
特集：虚と実	
学問から見る虚と実／戸田剛文	12
脳はしばしば間違える—視覚における虚と実—／船橋新太郎	16
異界の「私」——一人称小説における虚と実／廣野由美子	22
運動・医科学の虚と実／森谷敏夫	26
源平合戦をめぐる虚実—歴史学と史料批判／元木泰雄	30
イマジナリーキューブ／立木秀樹	34
レトリックと虚・実の世界／山梨正明	38
リレー連載：環境を考える	
失われた「感じ方」をめぐる／大倉得史	44
サイエンティストの眼	
自転車科学する／高石鉄雄	50
社会を斬る	
加藤被告の手紙から考えたこと／高橋由典	52
フロンティア	
高齢者はなぜフルマラソンを完走できるのか？その秘密に筋肉から迫る／増田慎也	56
日本近代文学における西欧文学性の追求／林 信蔵	57
世界の街角	
陰鬱の地、陰鬱の学／久山雄甫	58
国際交流セミナーから	
歴史学が人類学と出会うとき／グラヴァツカヤ	60
フィールド便り	
ファッションと芸術／蘆田裕史	64
月経前に訪れる心とからだの不協和音／松本珠希	66
書評	
岡田敬司『人間形成にとって共同体とは何か』／佐藤公治	68
宮崎理枝ほか『イタリアの社会保障—ユニバーサルズムを超えて』／松本勝明	69
篠原資明『空うみのあいだ』／松井 茂	70
中森蒼之『学びのための英語学習理論』／佐野正之	72
加藤幹郎『表象と批評』／山本佳樹	73
人環図書	74
サラ・ロイ著、岡真理ほか編訳『ホロコーストからガザへ』	
新宮一成ほか著『こころの病理学』	
瓦版	75

研究科ホームページ

<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/jinkan/>

『人環フォーラム』ホームページ

http://www.h.kyoto-u.ac.jp/publication/jinkan_forum/index.php

『人環フォーラム』リポジトリ (WEB公開ページ)

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/93000>

『人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。

「自然と人間との共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科(略称「人環」)は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかわりを模索してゆくため、『人環フォーラム』を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけてゆきたいと考えています。



人環フォーラム

第28号予告 HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM NO.28

巻頭言 上田正昭

対談 生きるための経済学
安富 歩／阪上雅昭 司会 間宮陽介

特集 境界を科学する
立木秀樹／戸田剛文／三谷恵子／岡 真理他



表紙写真 一世紀に及ぶ雄削の軌跡—ヒンガムキヤニオン銅山 ソルトレーク
シテイの南西にあるこの露天掘銅山は世界最大・最深の人造穴。直径
は四キロ強、深さは一七キロ。今も地下に向かって掘り進められて
いる。玩具のように見える鉱石運搬車のその積載量は二四〇トンと三
二〇トン(撮影 金坂清則 二〇〇九年八月)

裏表紙写真 ユタ州議事堂 一九一六年に完成し、二〇〇八年に改装された
美しい建物は、周囲の自然・歴史・文化景観と見事に調和している。
ドームを覆うのはユタ州産の銅(撮影 金坂清則 モルモン教教会本
部ビルより 二〇〇九年八月)

カット 中国・漢時代の石刻画(張鴻修編著「陝西漢畫」三秦出版社、一九九
四より)

裏表紙背景 宮崎興(右)著教授提供

編集委員会

委員長
副委員長
委員

林宮道 水中立多瀬 阪勝岡 鶏石安小間
下坂野 嶋木賀口上又 銅川部 倉宮
達英昭 眞節秀 浩雅直真大尚 紀陽
也明 廣理子 樹茂 彰昭也 理介人 浩蔵介

人環フォーラム 第27号
平成二二年九月三〇日発行

編集 『人環フォーラム』編集委員会

発行 京都大学大学院人間・環境学研究科
〒六〇六-八五〇一 京都市左京区吉田一本松町
FAX 〇七五-七五三-六六九四
印刷製本 藤原製本株式会社印刷事業部

編集後記

この夏は、幸運にも、とても印象深くすつ
ところに残るであろう二つのイベントに出
会うことができました。奇しくもその二つに
共通するキーワードが「広場」でした。みん
なが集い、何かが起こり、それが記憶の片隅
に残っていく……そのような広場の機能を
実感させられる鮮烈な経験でした。

この人環フォーラムも多様な分野が混在す
る人間・環境学研究科の広場の役割を果たし
たいという思いを強くした出来事でした。

(M・S)

色は匂へと咲きぬるを

宮崎興二 | KOJI MIYAZAKI [京都大学名誉教授]

日本人は、昔から、形のことを色といつて「色は匂へど散りぬるを」とか「色即是空」と教えてきた。つまり形などすぐ散って消えてしまふはかないものだ、ないようなものだ、そんなものにうつつを抜かしてはいけない、という。今の入試センター試験で受験生に向かって、コンパスと定規は使つてはいけない、とまっ先に注意するのも、器械道具を使つてはいけない、というよりはむしろ、形で物ごとを考へてはいけない、と教えているのではないだろうか。

○△□といった派手な形をした家具や建物をコンパスと定規で作図するのが専門の筆者は、この教えに疑問を持つている。

だいたいこの世は形で埋め尽くされていようえ、人間は、野原を走り回る粗野な馬や鹿とは違って、しっかりとした形のある衣食住がないと生きていけない。精神一到何ごとかならざらん、形のある物などいらん、とうそぶいた昔の武士も、○△□だらけの家紋や魔除けには助けを求めた。そのあげく半畳の真四角の畳の上で切腹して短い人生を終えたあとは何千年も消えることのない○△□だらけの墓石の下に葬られている。その武士たちの心の拠り所だった天皇も、死後は、大昔なら前方後円墳や八角形墳、今では十六角の菊の紋に飾られた上下下方墳、という派手な形を見せる陵墓に眠る。天皇に並ぶ日本の象徴日章旗は四角の中の完全な円一つを誇るものであり、通貨は円とよぶ。神社仏閣には、八角や六角の堂が並び立ち、その奥深くでは絢爛豪華な形を厳格なしきたりにしたがって飾る神事や仏事が執り行われる。武道や茶道などでも、大切なのは、勝敗や茶菓の味でなく格式張った礼儀作法が見せる形ではないか。管理社会の日本では中身よりも形や形式が物をいう。日本語の漢字や仮名自身、形を象つてできている。そ

れでも色即是空だろうか。

こうした矛盾に気がついたに違いないアメリカのベネディクトは、第二次大戦をしかけた日本人について、平和な菊と戦争用の刀を左右の手に同時に持つて自在に使い分ける世にも奇妙な人種であると分析した。この見方が、なぜか今の中国や韓国で大評判になっていると聞く。良心的に考えると、日本人の奇妙な気質の原点に、古代中国で八卦を考案しながら天円地方の宇宙を設計したとされた伏羲と女媧の夫婦の神の伝説がちらつくからかも知れない。

伏羲はふつう向かつて右にいて、天つまり陽としての菊のような円を見せるコンパスを自慢し、女媧は左にいて、大地つまり陰としての直線あるいは正方形を見せる刀のような定規を自慢する。筆者にとつてはうれしいこの夫婦が、コンパスと定規こそ失いながらも陽と陰の象徴としてのイザナギとイザナミになってわが国に伝わった。とする

と円と直線あるいは正方形が、中国と同じく陰陽八卦を基盤にするわが国の文化を根底で支えることになるのは当然である。神社内陣の左右に飾られる円形の鏡と直線状の剣、ひな飾りの男びなが持つ直線状の笏と女びなが持つ丸い扇、社寺の左右を守る、口を丸く開けたア形と直線状に閉じたン形の仁王や狛犬などはその名残ではないだろうか。

物や形を重視して左右対称を好む西洋美に対して、わびさび幽玄の日本美は左右非対称で形に無関心かつ精神的といわれるが、じつはその左右非対称美は陽と陰を見せる正反対の円と正方形の対比から生まれるのであり、そこには形の中の形が匂うばかりに咲き誇っている。

色は匂へと咲きぬるを我が世誰ぞ夢ならむ

仰ぐ酔ひ山けふ越えて有為の常見し散りもせず。興きょう。

京の町づくり



間宮陽介
Yousuke MAMIYA



高田光雄
Mitsuo TAKADA



中嶋節子
Setsuko NAKAJIMA

新幹線もまだなく、いわんや飛行機で旅するのめずらしかった時代、京都を初めて訪れるのは修学旅行で、というのが一般的だったのではないだろうか。汽車を乗り継いで足を踏み入れた京都は歴史の中の京都であった。日本史や古文や梶井基次郎の「檸檬」でしか知らなかった京都——御所の清涼殿、竜安寺、寺町通り、二条城などを目の当たりにした時の感激をいまの子供たちも味わうのだろうか。

有形無形の膨大な歴史的遺産を抱えてはいるが、資産の食いつぶしだけでは生きていくことができない。かといって新しさを過度に追求すれば資産そのものを喪う。他の地方都市に比べれば圧倒的に有利な地位にあるとはいえ、「町づくり」の必要に迫られているのは京都も同じである。いったい京都らしさとは何か。「町づくり」を行うには自己自身を知ることが必要であり、今回の対談もおのずとこの点をめぐるものになった。

●中嶋節子（なかじま せつこ）

一九六九年彦根市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門は都市史、建築史。近代化のプロセスにおいて、人間と都市はどのような関係にあったのか、そして、そうした関係がどのような都市空間と都市文化を生み出したのかを、現在の都市を射程に入れつつ分析している。主な著書に、『近代日本の郊外住宅地』共著・鹿島出版会、『東山／京都風景論』共著・昭和堂、『近代とは何か』共著・東京大学出版会 など。

●高田光雄（たかだ みつお）

一九五一年京都市生まれ。京都大学大学院工学研究科教授（居住空間学）。一九九六年日本建築学会賞、二〇〇一年日本建築士会連合会賞、二〇〇三年都市住宅学会賞など受賞。居住文化の継承・発展を可能とする持続可能な住まい・まちづくり、スケルトン・インフィル方式を活用した集合住宅団地再生などに取り組んでいる。主な著書は『日本における集合住宅計画の変遷』編著・放送大学教育振興会、『少子高齢時代の都市住宅学』共編著・ミネルヴァ書房、『京の町家考』共著・京都新聞社、『町家型集合住宅』共著・学芸出版社 など。

●間宮陽介（まみや ようすけ）

一九四八年長崎市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。コモンズをはじめとして、都市政治領域の諸問題などを空間論の視点から構成しようとしている。主な著書に『モラル・サイエンスとしての経済学』ミネルヴァ書房、一九九六年、『ケインズをハイエク』中央公論社、一九八九年、『法人企業と現代資本主義』岩波書店、一九九三年 など。

京都とヨーロッパは似ている？

問宮 今回は「京の町づくり」です。私は京都の人間ではありませんが、住んでみると、奥が深いというか、いろいろな発見があります。東京とちがって、町を歩くことがちつとも苦痛ではない。沿道の色んな店を眺めながら歩くとむしろ楽しくなります。

ヨーロッパを旅行して成田に帰ってくるのと、なにか夢が現実に引き戻されたようで、がっかりするんですけども、京都に戻ると違和感がない。ヨーロッパにいるような気がするんです。雰囲気が非常によく似ていて、これは京都の町にヨーロッパと共通するような特性があるんじゃないかと思うんです。ヨーロッパの歴史的な町みために建物が密に詰まっている。大路から毛細血管のような路地にいたるまで、大小様々な街路があちこちに張りめぐらされていて、町のつくりが重層的になっている。京都はみやびな純和風の都市ですけれども、根底ではどこかヨーロッパと似ていると思いますね。

高田 歴史都市と言われているところは共通性があるかもしれないですね。京都は、古代から現代まで、色んな時代のものが重なっている重層的な町だと言えらると思います。異なる時代のものは、当然異なる価値観を表出しています。歴史っていうのは前の価値観がある意味では否定されて次の価値観が出てくるんですけど、町の中では、それが重なったり繋がったりしていくんですけどね。それが建物にも町の構造にも反映されていきます。そういう町の作られ方というのはある時代に一齐にできた町とは全く違う。前の時代のしがらみと付き合ひながら次の時代を作っていくかざるをえない。そんなことがヨーロッパの町にもあるのかなと思います。

それから、京都の町家なんか典型的ですが、道に面した敷地いっぱいの際のところには家の壁がある。これは日本の歴史的な建築に共通な特徴ではなくて、都市の建築の特徴です。

そういう所では、家と道の関係、家と町の関係に緊張感があり、連続性もある。外部空間と内部空間の間に建築的な工夫の蓄積が表れている。全く違った環境にある都市でも歴史的な都市の場合はそうなんじゃないかなという気がします。

問宮 グーグルの航空写真を見るとよくわかりますが、家と家は

びっしりつまっているし、家のすぐ前は道になっている、そういう意味で間がないわけですが、見方を変えれば、住宅の私的な部分が道の方に溢れ出て行って、公的な空間を私的な性格の空間に変えていくということではないか。そういう風にして公と私を和解させようとしているんじゃないか。

中嶋 町家は専用住宅ではなく、店舗を兼ねた住宅であることが前提です。通りで面している部分でいきなり私的な生活がさらけ出されているわけではないですね。そこに緩衝帯としての格子や店の間があって、通りから敷地の奥に向かって空間のヒエラルキーが公的なものから私的なものに徐々に代わっていく。表から裏への緩やかな空間が物理的にも視覚的にも明確に分けられるヨーロッパとは、空間分節の考え方や作法が違うかなという気がします。

高田 お商売をやっているところは商業的な活動が通りに溢れていきますよ。

中嶋 お商売を私的と言うか半公的と言うかです。それを私的な活動だとすると私的な空間が道の方に溢れるということですが。

高田 一方で、私的な領域に不特定多数の町の人が入ってくるという意味では、そこで重なった領域ができてみると見ることができるとそれはヨーロッパと共通といえれば共通ですよ。

中嶋 それは共通ですね。

問宮 住居のすぐ外には私的な領域がせり出している。家の内部を見ると、道に面したところから奥に行くに従って公的から私的に変化していく。パブリックとプライベートが対峙し



祇園の町並み 京極寛撮影 ©京極寛
情緒あるお茶屋が軒を連ねる。



ストラスブールの町なみ（フランス） 関川華撮影



ミュンヘン（ドイツ）の市庁舎から市場を見下ろす。関川華撮影

ているのではなく、両者の間にグラデーションがあるんですね。

高田 農家だと、縁側が間口方向にあつて、人の出入りを間口方向で制御できるけど、都市住宅だと間口が狭いので、それを通り庭で縦方向に処理しているという事だと思います。通りがかりの一般客、取引先の重要な客、主人の家族、出入りの大工や職人などの動線が通り庭でうまく整理されていくんですね。

中嶋 ヨーロッパの場合は、垂直方向に展開しているという言い方もできるかな。日本の場合はパブリックな通りに直交する形で、奥に向かって徐々に水平方向に私的空間が展開していきますが、それに対してヨーロッパは、都市住宅の上層階がプライベートでいい部屋だとされているように、立体的に私的な空間が展開していく。そういう垂直性・水平性という違いはあると思います。

間宮 それは町に何か違いを与えますか。町の雰囲気の違いはどのようなところに現れるのでしょうか。

中嶋 ヨーロッパにも奥はあるので、日本では表通りの軸線と敷

だと思っています。

スケール感や雰囲気が違っていても、ヨーロッパの歴史都市と京都が似ていると感じるのは、都市の構えをしっかりと維持しているからではないでしょうか。建物が通りに面してきちんと軒を連ねている。そうしたそれぞれの都市の空間構成の骨格が受け継がれていることが、心地よさや安心感につながっているのでは。

間宮 古い都市は大体そうですね。

中嶋 たいいていの都市はそうですね。

高田 ただ現在の日本の大都市の建物の建て方がそうでないだけですね。かつてはそういう都市は京都以外にもたくさんあったはずですね。具体的な作り方は違うと思いますが、大阪だって東京だってそれぞれの町の構えが継承されていたはずですよ。

中嶋 都市は基本的にはお商売をする場所なので、物を売るには通りに面している方が有利ですし、それがひとつの造形の規範にもなっています。あと、ヨーロッパのパロッタ都市などは、都市の壮

地の表から奥への軸線の二軸で都市空間が構成されているのに対し、ヨーロッパではさらに垂直方向の軸線が加わって三軸で都市が立ちづくられている。都市に建つ建物は通りに沿って壁面をそろえるのが基本的な構えですが、建物の高さを通りの幅との関係が作り出す、都市空間のスケール感や雰囲気は、水平に展開するまちと、垂直に展開するまちでは違ってきます。こうした建物と通りがつくるスケール感や雰囲気が、そのまちの「らしさ」を生み出しているのでしょう。京都の町中に、高層の建物が通りからセットバックして建つとなぜか非常に居心地が悪い。通りに面して二階建ての町家が並ぶのが京都の町並みのサイズなの



パリ（フランス）ノートルダム・ド・ナザレス通りの様子 関川華撮影

保する役割を果たしていたり……。

高田 この都市でも何らかの町のルールがあり、それがおおむね守られていたことだと思えます。逆に、町のルールなしに敷地ごとに建物ができ始めたのが近代だと言ってもいいんじゃないかなと思います。

あと、京都は都心部にたくさんの方が住み続けてきたという特徴がある。こういう都市は日本中探してもなかなかないんですよ。そして、生産都市としての歴史ももっているので生業の場が都市の中にある。都心部の土地利用で見ると、商業だけでなくものづくりとしての工業や住居が複合し続けてきたという特徴があるんです。

店がつくる多様性

問宮 京都は店がじつに多様ですね。三条大橋のたもとにほうき屋があるのをご存知ですか。ああいった店は東京じゃ絶対やっていけないですね。神田とか神保町にはまだ昔ながらの万年筆屋とか金物屋があるけれど、多摩などの郊外には大規模店舗が集積していて、車

麗さを演出する目的も大きいですね。ただ、表通り

からは高密度に見えるのですが、街区の中には意外なほどの大きな空間が抱え込まれていて、それが生活を快適にする重要な場所となっているのも共通しています。たとえば、同じ街区の住民同士のコミュニティの場であったり、通風や採光などを確

に乗って買い物に出かける。天井まで棚が伸びている倉庫ふうの店とか、いろいろ工夫はしていても、売っている物は画一的です。

京都は違いますね。楽しい店がいくつもある。でも客はあまり見かけません。不思議に思っ

て、ある人にこの話をしたら、「インターネット販売をやっているんだらう」という返事が返ってきましたが、ほうき屋がオンラインショッピングをやっているとも思われません。おそらく固定客がいるわけですね。扇子屋とか炭屋なんかもそうです。そういった固定客は一般庶民ではないかもしれないけれども、それを必要とする職業の人がいるんですね。町の多様性というのは生活の多様性と密接な関係があるんじゃないか、そういう気がします。

高田 東京と京都では市場の規模が比較できないくらい違います。市場の規模から言うと東京の方が遥かに大きいはずなので、そういう個人商店が成り立つ条件はあるんだけど、京都のようなブランド化が行われてはいない。京都はコンパクトなので集積しやすく、歩いていけるとところに色んな店がある。それを一つの観光資源と見て、観光業者なんかPRすることがあって、今まで廃れていた店がもう一度復活してくるっていうこともありますよね。

中嶋 京都は経済規模が大きくないので、大きく商売をしないっていうのもあるかと。新しい店舗を出すにもすごく慎重ですよね。一見さんを相手にしていないというのがどこかあって、先ほどおつ



京都市下京区の街区

建て詰まったビルが敷地に対し、町家の奥には庭の緑や空地が見られる。
©2010 Google-画像©2010 Google, GeoEye, Digital, Earth Technology

しゃったように、固定客がある程度あって、その上で店舗を持つているので、店舗で売れようが売れまいが生活は出来るくらいの基盤がある。その規模で皆さんお商売をされているような気がします。

持家と借家

問宮 小さなお店がやっていけるのは持家っていうのもあるんですよ。家賃も地代もかからないから固定費が高くない。

高田 歴史的には、実はそうでもなかったように思います。例えば、戦前の室町通りでは、呉服問屋などで、京都で一番勢いのあるお店が集積していた。ちょっと商売の具合が悪くなると室町から下がって、具合がよくなるともう一回出てくるんです。そういうことを繰り返してやっていたので、室町通りに並んでいるお店は常に勢いがあった。それを支えていたのが借家のシステムです。お店の約二割が持家で地域のマネジメントを担当する。残りの約八割は借家で動いているわけです。それらが、しのぎを削ってお商売をしているので都心部は活性化した状態が続いた。一つ一つのお店は潰れたり新しくなったりするんだけど、町の持続性は担保されていた。ところが戦後、お店がみんな持家化して固定化してしまっただけで、町の持続性が無くなってしまいました。



姉小路界限町式目 中嶋節子撮影
近世の町式目にならって定められた平成の町式目。

中嶋 近世は基本的に商売が成功したら大きい店に移って、失敗したら小さい店に引越す。そうした入れ替わりで、常に力のある商人が町の一番良い場所を占めて、活気が維持されていたと思われまします。ところが、それが持家化したことで、出て行くにも出て行

けない。で、お店を閉めてしまっただけで町が暗くなっていく。都市は常に動いてなくてはいけないのに動きが鈍くなる。ある意味では、落ち着いたと言えるのかもしれませんが、エネルギーがなくなっています。

問宮 テナント制のマイナス面はどうですか。動きが鈍くなって収益が下がると、地主は、一〇〇円パーキングの方が儲かるからと、駐車場をつくる。祇園あたりでは景観破壊が問題になっているようです。

高田 本来、地域のマネジメントを担って、地域の最大利益を確保するのが持家層で、借家層は権利もない代わりに義務もなかった。近代になって持家の意味が変質し、敷地が町から切り離されて個人が何をしてもいいっていう所有権となった。その敷地から利益を得る権利を持った人が持家層ということになって、持家層が地域全体のマネジメントを考えるとということではなくってしまいましたね。一〇〇円パーキングがいつも悪いわけはありませんが、先ほどの例は、所有者の勝手な行動が地域の利益に反するということじゃないでしょうか。

問宮 借家の場合、次に住む人を決める人がいたのですか。似た商売をやっている人とか。

中嶋 近世は町式目で町ごとの約束が決められていて、引越してくる人についても、その商売を含め町の中で承認されないと入れない仕組みがありました。町によって違いますが、例えば飲食はダメだとか、糸編の職業でなければいけないとか、それは自分達の経済的利益の確保のためでもあるんですが、町と一緒に住んで、商う人がある程度町がコントロールしていたことになりました。例えば、空き家があっても、そこに入るのに適当な人がいない場合は、町が一且預かって、いい人が見つかったら町から売ったり貸したりということもあったようで、緩やかなコントロールシステムが町単位で出来ていました。今もそうした不動産のコントロールがあるのは、京都では祇園南くらいです。現在のように敷地単位で売り買いで隣に誰が引越してきたのかわからない、自分の物になったら好き勝手するという状況になったのは、明治以降のことで、それが目に見えるかたちで町を変えたのは戦後だと思います。



三条油小路東側の町並み絵図
近世末における浴中の整った町並みが描かれる。

問宮 京都もこのままだと、表はよいんだけど裏に行くところ、どん京都らしさがなくなっていくってことになるかもしれない。京都がこれから活性化していくにはどうしたら良いと思われませんか。高田 そうですね、私的領域と公的領域との関係だけでなく、私的領域同士の関係が壊れてしまっていると私は危機感を感じています。お商売をしている家同士はしのぎを削って競争をしているんだけど、一方で、町のルールを守って、町全体を維持していく仕組みがかつてはあったわけですね。それが公的領域と私的領域の関係だけに整理されてしまったことで町の力が弱くなってきたように思っていますね。個人と個人の関係は、必ずしも仲良くしましょうというだけじゃなくて、商売がダメになったら出て行ってという厳しさもある関係なんだけど、町式目のような町のルールを守ってその町の繁栄に対して協調するところは協調するっていう協同的な関係がかつてはあった。



京町家の主座敷と庭
町家の敷地奥には最も格式の高い私的空間が置かれる。

現在起こっているまちづくりの活動は、そういうものを再生しようとする活動のように私には見えるんですよね。景観の話もそうだし、商店街の活性化もそうで、単に商業的な利益の追求というのではなく、それも含めて地域社会をどういう風にマネジメントしないといけない

かというレベルの高い議論が現実に行なわれている所もあるわけです。私的領域同士の関係の再構築に向けた次のステップとして少しは光が見えるところかなと思いますね。

問宮 人と人との関係がだんだん希薄になっていくっていうのは、他の都市から入ってきて根を張っていない人が増えてきているという事なんでしょうか。それとも代が下っていくにつれてそういうことをしなくなったという事なんでしょうか。

中嶋 私的権利の主張は当然だという意識が非常に強くなって、自分達はある時期ある都市空間を占有しているけれども、自分の所有物ではないんだという意識がなくなってしまったことが大きいと思います。江戸時代でも平均二〇年から三〇年しか同じ場所に住んでいません。それをまた次の人に譲っていく。あくまで生活の容れ物として町家があり、町を単位とする人のつながりがあったはずです。都市は、所有するものではなくて商売や生活といったさまざまな営みの容れ物と考えると、今、起こっている問題のかなりの部分が解決できるのでは。自分のことだけを主張するのではなく、メンバーとして参加しているという意識の再構築が求められていると感じます。建物についても、一代限りという考えではなくて生活の容れ物だという感覚で住み継いでいくというのが重要では。

問宮 持家制が都市にとって必ずしもプラスに働かないというのは考えてもみませんでした。一時期借家に住むということは決してそれを粗末に住むんじゃないかと、後に残していくという意識に裏打ちされていたわけですね。誰でも借り物は丁寧に扱いますよね。自分の所有権の範囲に色んな物を入れると逆にマイナスになるのかな。

高田 そうですね、私的な権利だけに集中してしまうのかもしれないですね。京都では「どこにお住まいですか?」と尋ねると、「明倫です」とか「本能です」とか、元学区を答えることがある。それは家だけではなく町に住んでいるという意識がまだ残っているということなのかも知れません。それが、区分所有のマンションの専有部分の範囲だけが自分が住む場所なんだという感覚に移ってきているところがあるように思いますね。

問宮 日本とヨーロッパを比べて見ますと、ヨーロッパの方がまだ借りて住むという感覚があるんじゃないですか。イギリスでは一〇〇年単位で借りたりしますよ。



(近江屋吉左衛門家文書
京都府立総合資料館蔵)

高田 イギリスではリースホールドと呼ばれる権利が発達しているし、大陸だって、所有権型のシステムの中でそれを借りるしくみが発達しています。日本でも第二次世界大戦前は都市では借家を中心で、大阪や神戸では約九〇%、京都では約八〇%、東京では約七五%が借家だった。

ただ、集合住宅ではヨーロッパと日本では少し感覚が違うように思います。例えば、パリの古いアパートマンを借りて住む場合、日本の賃貸アパートのように一人の大家さんが建物全体を持っているのではなく、住戸ごとに所有者が違うのが一般的です。いわゆる分譲貸しのような形態ですが、さまざまなタイプの住戸が一つの建物の中にあるんですね。歴史的な経緯の中でそのような形態が生まれたわけです。一方、日本のワンルームマンションみたいな形態は他の国から見ればかなり奇妙なもので、あまりサステナブルじゃないような気がしますけどね。

間宮 京都で町家に住みたいと思う人には芸術家の卵とか、色んな人がいますね。さきほどの話のように、人間同士の関係がちょっとおかしくなってきたのが現代だとしたら、果たしていい方向に持っていけるかどうか。どういう風な近所付き合いになるのかな。
高田 町として魅力的な環境が保たれていなかったら、その中の町家とか長屋に住む意味はなくなってしまうのではないのでしょうか。町の魅力は、公的領域と私的領域の関係だけじゃなくて、私的領域間の関係がうまくつくられていないと生まれません。町の運営に関していくという意識がないと、結局は私的領域も維持できなくなるのではないかと思うんですね。

間宮 政治学で公共性の問題が論じられて、そのさい私的領域は非常にネガティブに捉えられる傾向にある。古代ギリシアでは私的領域は家の領域。家はオイコスと言って、奴隷が担当する領域で、市民達は広場や街角で政治的議論をする。H・アーレントによれば、古代ギリシアのprivateとはdeprived、すなわちなにかを奪われている状態のことです。私的領域は人間の本質を奪われた領域なのです。確かに、私的領域の「私的」を掘り下げていくと、私的利害とか欲望とか、そういう方面に行くけれども、別の面もあると思います。家の前に水をまいたり、植木鉢を置いたり。隣近所に配慮するのも私的個人のものなせるわざなんです。公共性の問題を考える

場合には私的領域を無視したり軽視したりしてはいけません。私的領域を掘り下げる事によって公的領域の本質が見えてくることもあるのではないですか。

高田 町家は家と庭から成り立っていて、それらが連担しているの、一戸一戸の庭は小さくても街区としての環境は維持されてきた。京都みたいに高密度な都市でも各敷地の家や庭の取り方にルールがあれば、公的領域としての公園なんかなくても一定の環境条件は保ててきたんです。庭の配置はプライベートな領域に個人が穴を開けているだけですが、連担しているということが非常に重要だと思っ

中嶋 京都の場合は、表の通りだけがパブリックというのではなくて、私的な裏の空間が集積したところに公的な意味や重要性がある。公と私が対立概念ではなく、私の集まるところに公が現れるということに意識的であることが、都市の持続や再生において重要だと思

います。ただ、日本の法律や京都の条例などでは、裏の空間をコン

トロールする基準はないので、建て替えなど行われると奥の空間が

どんどん建て詰まっています。あれは最悪な土地利用です。奥の

空間を再考する

必要があると思

いますね。

高田 景観政策

を公的な規制だ

けでなく、地域

のまちづくりと

しても考えない

ればならないの

はそのためです

ね。

中嶋 町並み

や景観の保全

は、道路から見

えるところだけ



昭和初期の室町通り・祇園祭の後の様子
祭提灯と幔幕が飾られた街路で祭りを迎える。



カサ・バトリヨ ラボモン撮影

いのが現状です。裏には公的な規制はかけられなくて裏がどんどん詰まって、窓を開けても風が通らなかつたり、窓を開けたら隣の壁だったとか。

問宮 京都は文化的歴史的遺産を持つてるから安泰だというわけには行かないというのが今日の話でよくわかりました。京都は満開の桜みたいところがあって、ちよつとでも手を入れたらハラハラと花びらが散っていくような際どい極相にあるように思うんですね。崩れだしたらどこまで行くかわからないところがあって、我々も意識的に再生をしていかないといけませんね。

ル・コルビュジエ

問宮 ところで、バルセロナのガウディが設計したマンション、あそこは持家ですか？

中嶋 カサ・ミラ、カサ・バトリヨを含め世界遺産ですが。カサ・ミラは、施主の家族といくつかの家族が現在も住んでいると聞いています。そんなに大規模なものではないのでどうでしょう？

問宮 日本だったら投機の対象になって何億もするんじゃないかと思うんですけど、わりあい普通の人が住んでいるようですね。ル・コ

ルビュジエのユニテ・ダビタシオンもそうなんでしょ？

高田 ル・コルビュジエに対する評価はここ何十年か上がったり下がったりしてしまっていて、今はル・コルビュジエの家に住みたいという人が増えて再評価されているということでしょうね。あそこの上の方に商業施設が入ってますが、敷地の真ん中に建物を建てて、その高層部に商業施設を作るということは立地上はおかしいんだけど、しかし、これを守ろうと思ったら、そこで売ってる物はそこで買ってあげようという消費行動も現れてくる。

ペサックにあるル・コルビュジエの低層住宅は、もともとル・コルビュジエの作品として価値を持っていたんですが、その後、居住者が様々な増改築を行ったんですね。横長の窓を縦に変えたりして、ファサードも全く変わってしまったんですが、それを住まい手が近代建築を主体的に作りかえたとして高く評価する研究や論文が現れました。でも、またそれを元に戻そうという動きが起こり、次々に復元されている。復元された住宅の不動産価値は高くなっている。たぶんきちつと作られているからそういうことが出来たのだらうと思えますが。

中嶋 ル・コルビュ

ジエの建物は思想が非常にはっきりしているもので、そういうものは共鳴されて残っていきまますよね。京都の町家は、ル・コルビュジエといった個人へのオマージュではなく、日本の伝統や風土、住まい方がリスペクトされるという場面で生き延びるんですね。あらゆる人に支持されるというより、そういう価値観の物



ル・コルビュジエによるペサック(フランス)の住宅群 榎谷美恵子撮影



三条通の近代建築と近代町家 中嶋節子撮影
ヒューマンスケールの近代の建築がやさしい町並みをつくっている。

が存在するということを別の価値観の人が認めるといいう、多様性の中で受け継がれていく。

京都の産業と町づくり

間宮 京都は一物一価じゃない、そこが大阪と違うところだ、と言っている人がいました。隣で似通った物売っている店があっても、うちのは伝統も味もひと味違う、と言って値下げしなかったりね。物は似ていてもそれにまわりついたイメージの差っていうのは大きいですね。

中嶋 京都の人はイメージを作るのが非常に上手で、物売るといいうよりイメージを売るといふことに昔から長けていたように思えます。ここでしか買えないみたいな価値付けが非常に上手ですよ。

高田 伝統産業は、例えば着物を着る人が少なくなると、高級なところだけが残って、中や下の方は残らないという問題もあります。中級品がなくなると、本当にそれが高い水準なのかどうかかわからなくなってくるし、たぶんレベルも下がってくる。単にブランドだけが形骸化して残っているんじゃないかと、きちつと地道な活動があつて水準を上げていくっていうしくみが、生き残るには必要だと思ふんですね。それは、まちづくりにも言えると思います。

間宮 まちづくりというのと、頂上の非日常の部分に着目しがちです

が、町は生活空間でもあるわけですね。毎日寝たり起きたりするわけだから、この生活空間には持続性がある。まちづくりは生活空間の持続性に支えられるべきで、非日常的空間に依存しすぎると、空間は脆弱でもろくなりやすい。まちづくりを日常空間とどう噛み合わせていくか、この点は大きな問題だと思うのですが。

近代化遺産

中嶋 京都は明治期の建物が日本の中でも数多く残っている都市です。震災が直接的には少なかったことと、他の大都市と比較すると開発のスピードが緩いので多く残っているんだと思います。特に集中しているのは三条通りと御所の周りですね。京都の近代建築は、町家が建っていた敷地に建つのでヒューマンスケールなものが多くて、大きな建物にある威圧感みたいなものがなくて非常に優しい感じがします。あと、デザインのバリエーションが豊かですね。

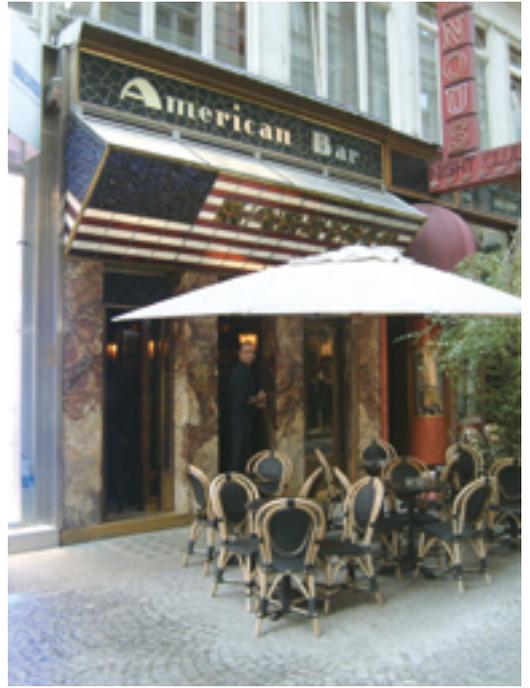
間宮 建築といえば、ウィーンでアドルフ・ロースの建築をたくさん見ました。アメリカンバーもその一つです。写真で見ると、立派な建物で、さすがロースだと思っただけですけども、行ってみるとびっくり。入場料を払って見物する記念館かと思いきや、いまでもちゃんとバーとして使われているのです。マスターがカウンター越しに近所の女将さんと世間話をしている。ああいう文化財は博物館で残すんじゃないかと、使いながら残っていかないと。マンツ書店だっていまでも本屋をやっていますよ。それはもう豪勢な本屋ですが、「使う」っていうことは「大事に使う」ってことを含んでいるのであつて、むちゃくちゃに扱うことではありません。考え方が日本と違うなと思つて。

中嶋 それは、もともとの建物が愛される要素を持つてるかどうかだと思います。近代建築は思想がはっきりしていたり、デザインや材料が一点物であったり、ちよつとかわいらしかったり、何か人の心を惹きつけるものがあつて、大事にされるのではないのでしょうか。戦後の建物は、質はともかく愛される要素が少ないのでは。ちよつと古くなると薄汚れた箱としか見られなくなって、そう長くない寿命で壊されていく。難しいですが、愛される建物を作るのが大事かなど。

問宮 京都はもとの建築がいろいろあるんじゃないですか？

中嶋 そうですね。町家は都市住宅の完成形ですし、長い年月をかけて培われた美意識と技術の集大成です。

高田 それは建築の問題だけではないんですね。住まい手との関係がたいへん深いわけです。例えば、京都の近代建築で堀川団地というのがあります。堀川通り沿いに六〇年近く前に建てられた六棟の店舗併存アパートです。それを建替えてしまおうという話があったんですが、使い続けられる建物は積極的に改修して活用する考え方が強まり、現在その可能性を探っています。構造的な検討もさることながら、建具や左官の仕事が住戸内も含めてしっかりしています。何よりも驚いたのは、住戸内の造り付けの家具が当初のまま残っているところがある。それはいい職人さんがおられたことだけではなく、住んでる人が丁寧に使ってこられたからで、どちらかが欠けたら現在見ることはできなかつたわけです。六〇年前の家具の開け閉めがきちっとできるっていうのはすごいことなんです。住み手が一生懸命手入れをした結果そういうものが残っているのだということをもものすごく強く感じるんですね。一方で、同じときにできて内部が朽ち果てた住戸もあって、そこに入ると、よく調べてみるまですぐにでも建替えるべきだって気分になりますよね。職人の



アドルフ・ロースのアメリカンバー
クリスチャン・リース撮影

誇りが住まい手の誇りになり、次の住まい手の誇りにもなる。そういうことではないかとも思います。いずれにせよ、住まいと住まい手の関係は重要で、いい関係が出来てくると住み継ぎも上手くいく。既存住宅や借家の住まいと住まい手の関係づくりを支援して、住み継ぎを応援する仕組みが必要だと思いますね。

中嶋 あと、経年して良いものになるっていうのが非常に重要ではないかと思っています。たとえば町家も新品よりも何年か住んだ方が美しく、深みが出てきます。近代以前の材料っていうのは経年すると非常に味わいが出てくる物が多くて、傷がついても結構その傷が良かったりするのですが、近代以降の化学的な材料は経年すると汚くなるだけで味がでない。経年変化を視野に入れながら作っていないと。建てた時が一番きれいっていうのはよくないと思いますね。

問宮 これまで色んなお話を伺ってきて、町家にしろ歴史的建造物にしる商業にしる、私的領域の中の生活から切り離して町があるわけじゃないし、まちづくりというのは建物を作ればよいというわけでもない、生活そのものを立て直すことがまちづくりに繋がっていないということですね。興味深いお話、ありがとうございました。

学問から見る虚と実

戸田剛文 | TAKEHUMI TODA



戸田 剛文（とだ たけふみ）
一九七三年、奈良県生まれ。一九九三年京都大学総合人間学部入学、
二〇〇五年京都大学大学院人間・環境学研究科修士（人間・環境
学博士）。専門は哲学。主要著作は「パルクリ―観念論・科学・常識
識」（法政大学出版局、二〇〇七年）、「知を愛する者と疑う心」（佐藤
義之、安部浩と共編著、見洋書房、二〇〇八年）、（翻訳）「パルクリ
」ハイルスとフロアナスの三つの対話」（岩波文庫、二〇〇八年）。

今号の『人環フォーラム』の特集「虚と実」は、二〇〇九年二月に、本研究科で開催された公開講座がもとになっている。私は講師としてではなく、企画の一人、および司会としてそれに携わったが、今回、本誌のほうにも寄稿させていただくことになったので、その公開講座にかなり関係させつつ（その紹介もかねて）、全体的に学問と虚・実について書くことにしたい。

「虚実」という言葉を聞けば、人によっていろいろな印象を持たれるだろうが、たとえば、現実と虚構、ほんとうと嘘、などと言いかえると、まずそれほど大きく逸脱することもないだろう。公開講座で、このテーマを選んだ大きな理由は、学問のひとつの面白みが、この虚実をめぐる探求にあると考えたからだ。

学問の目的と言えば、それぞれによってさまざまだろうし、同じ学問であっても人によってその目的とするものはさまざまだろう。だが、一般的に言えば、学問とは真実や真理、もう少し柔らかく言えば事実を明らかにしようとすることが多い。しかし、ここで問題になるのは、では、そういった事実とはいったいなんだろうかということだ。二〇〇九年二月の講義の多くが、奇しくも（というのは、それほど入念に打ち合

わせが行われているわけではないので）その問題にかかわることになった。

事実という言葉も、あまりにもありふれていて、誰もがわかりきった言葉のように使われている。たとえば、Aという出来事を私たちが事実と呼ぶとき、私たちがAをどのようなものだと考えているのだろうか。おそらく、そのAという出来事について、いろいろな感想や意見を言う人があるだろうが、Aという事実はひとつしかなく、Aについて何らかの考えを持っている人がいるならば、その人の考えは、もしAと一致するならば正しいものであって、一致しなければ間違いとなるようなものだと考えているかもしれない。そして、私たちは、よく手を抜いたり、怠けたりすることで間違いを犯してしまうけれども、もしちゃんと誠実にAを捉えようとするならば、捉えることができるかと考えているかもしれない。「人に聞いてすぐに納得するのではなく、ちゃんと自分で事実を見なさい」とか、「あいつは事実から目をそらしている」という言葉は、そういったことを少しは含んでいるように思える。事実から目をそらしていると言って相手を非難するのは、ちゃんと見たり、聞いたり、触ったりして、十分に考えれば、私たちは事実に――私たち

の考えとか思い込みとかとは違って――到達できるはずだと、その言葉を言う人が考えているからだろう。

しかし、この公開講座での多くの講義が、その私たちに身近な「事実」というものが、なかなかやつかいなものであることをときに明らかに、ときにひそやかに示すものとなった。そしてそのことを比喩的に言うならば、実だと思っているものに虚があり、虚だと思っているものが実を生み出していることを、この講座は投げかけているのである。これから、いくつかの講義のテーマを少し紹介しつつ、事実というものの不確かさについて書いていきたい。ただし、ここで私が書くことは、講義の内容そのままの紹介ではなく、各講義での話に関係するようなものを自分なりに書いているので、もし間違いなどがあれば、それは私の責任である。

まず、脳科学の分野からは、「見る」という行為が実に複雑なものであることが解説された。「見る」という行為は、通常、私たちが外界の情報を得る重要な行為なので、昔から、多くの人々の注意を集めてきた。特に光学が盛んになった一七世紀から一八世紀には、視覚によってどのように私たちが対象や、対象と私たちの距離を認識

するようになるのが研究された。このときも私たちが生まれつきもっているメカニズムが視覚による認識を成立させるという考えもあつたが、一方で、視覚の成立に私たちの経験が影響を与えているという考えもでてきている。当時は、視覚器官と心という関係で視覚の問題が研究されていたが、現代では、脳科学の急速な発展によって視覚器官だけでなく脳が重要な研究対象となつている。このことは、「見る」ということが、非常に高度な認知行為であることを示している。視覚器官（比較的外界に近い器官という意味で。現代では、もはや目だけが視覚器官だと言うことはそれほど意味がないかもしれないので）に同じ情報が与えられていても、脳の状態によって私たちが実際に「見る」ものは異なる。映像がそもそも断片的でまともでないこともあれば、まとまりをもった映像が見えていてもそれが何かかわかないこともある。こういった脳に疾患がある場合は別にして、特に視覚能力に問題がないとされる人々でも、その関心や注意によって、あるものが見えたり見えなかったりする。また、さらには、実際に情報としては与えられていないものさえ、場合によっては脳がそれを補ったり、情報を変換してしまつたりすることもある。テレビ番組などでも、最近はこういったことを体験させてくれるものがあるという放送されることがあるので、思い当たる人も多いかもしれない。

もうひとつ、違う本で読んだ話を書こう。昨年からはじめた裁判員制度のためか、日本の裁判が自白に偏重しているという問

題がよく、メディアなどで識者から指摘されている。私は門外漢なのでそれが適切な指摘なのかどうかはわからないが、確かに、自白よりもほかの目撃証言があるとか、いろいろな証拠が総合的に誰かを犯人だと示している場合のほうが、冤罪を生み出しにくいような印象がある。ただしアメリカの脳科学者マイケル・S・ガザニガ（『脳の倫理―脳倫理学序説』）がこの問題について興味深い指摘をしている。それは、目撃証言もまた、なかなか疑わしいものがあるということだ。

そこでは、この現代社会にみちあふれている情報によって、私たちの認識がどれほど影響を受けるかということが書かれている。ある事件が起こったときに、その現場から白い車が走り去つたというようなことがワイドショーやニュースなどで報道されたとする。そしてそういったことは、事件によっては自然と私たちの耳に届く。私たちが意識的にその番組を見ているときもあれば、そうではないときがあるかもしれない。そして、いく人かの目撃者を警察が突き止め、やはり彼らから、現場を走り去つたのは白い車だったという証言を得る。このような証言はもちろん、私たちが信頼できる証言だと考えるようなものだろう。しかし、ここからがミソなのだが、これらの目撃証言が間違っていたということがありうるということなのだ。目撃者たちは、明らかに、その現場に居合わせた人々であつて、彼らは、私たちが事実と呼ぶものに最も近い位置にいる人々だろう。普通、私たちは、彼らの目撃証言は、彼らが直面した

事実をそのまま言葉にしたものだと考えたくなる。それなのに、彼らの証言が間違っていることがあるというのはどういうことなのか。もちろん、この段落で最初に書いたことから予想できるだろう。目撃者は、報道からその情報を聞いていたのだ。そして、その情報を脳がその現場についての物語の中に埋め込んだのだ。私たちが、ある出来事を見たと言つても、テスト前に単語帳を必死に見るといふのとはわけが違う。その細部まで必ず覚えていくわけではないだろう。また事件が夜ならば、その場の照明や車の塗料などによつても印象が変わるかもしれない。しかし、外から「車は白色だ」という情報が取り入れられるとき、私たちはそれにつじつまが合うように記憶を整える。そして、自分が見たのも白い車だとまじめに思うようになるのだ。こういった話は、私たちの「事実」の認識には、広い意味で解釈とでも言えるようなプロセスが含まれていることを示唆している。

少し違う方向に話を移そう。私たちは、社会的な生き物であつて、そのおかげで自分一人では利用できなかったであろう多くのものを利用して生きていく。世の中のことにしてもそう。私たちは、自分の目で見ただけで信頼を置くことは当然だが、実際に、それだけで得られることなどほとんどわずかなものだ。私たちの知識の大部分は、人から聞いたり、教えられたりして得たものだ。そこには、直接誰かほかの人から聞いたものもあれば、テレビやインターネット、あるいは本で読んだことも含まれる。今行われていることがテレビでラ

イブ中継されることもあれば（そのデータの送信のために生じるタイムラグは無視するとして）、過去のこと、昨日の出来事から、はるか昔の歴史上のことなどの場合もあるだろう。これらの多くのものを、私たちは事実として学んだりする。そして、この公開講座では文学や歴史の分野から、そういった事実の認識にまつわる興味深い側面が紹介されている。さきほど、誰かが事実を認識するいうときに、その認識の時点で解釈とでも言えるようなプロセスが介在すると書いたが、それが一種のフィルターのようになって、それを通して私たちは事実を認識することになる。そうすると、私たち自身にもそういったフィルターはあるわけだから、私たちが事実として学ぶ知識の大部分は、無数のフィルターを通じてきたものだと言えるだろう。

また、ある事実を別の媒体（人も含めて）を通して把握する際には、必ずしもひとつの媒体を通して把握するとは限らない。むしろ、いくつかの媒体を利用して情報を得て、それによって、その情報への信頼度を高めていくということがなされる。その場合には、入ってくる情報が、同じようなものとして認識されれば、その信頼性は高まるだろう。また、違うものであったとしても、それらのあいだに強い整合性が認められるならば、同じ事実がいくつもの側面から把握されたものとして、やはりその事実についての信頼度は高まるだろう。しかし、そういった場合でも、私たちが得られる情報が現実にはかなり限られている場合もあり、整合的だと思える情報に、知覚に

よる事実認識以上に、強いバイアスがかけられている可能性も否定できない。ある事実を記録し、それをほかへと伝える役割を果たす人がどのような信念のネットワークをもっているのかということが大きな影響を及ぼすだろう。そこにもいろいろなレベルを考えることができる。例えば、ある政治的な立場がかなり意識的な偏向を情報に加えるかもしれない（この講座での歴史学からの講義は、まさにそこにかかわる事柄を、実に興味深く描き出している）。また、そういったかなり意識的なものだと見えるものだけではなく、その人の信仰やそれまで受けてきた教育、家系なども影響しうる。例えばそういったものが好悪などの感情となつて、事実認識や記録に影響を及ぼすかもしれない。また今あげたようなものは、たんに個人的なものとは言えないようなものであつて、その人が所属する国や文化圏の中で機能し、社会的な広がりをもっている。当然そういったものを明らかにしようとする私たち自身もそれと同じようなさまざまなものを背負っていて、その中で、過去の出来事に向き合うわけである。

いろいろな情報の中から自分たちの知っているものをもとにして、なるべく整合的なストーリーを描こうとすることこそが、事実の把握ということになるかもしれない。事実というものがもつこういつた側面は、私たちに身近な文学にも見事に描き出されている。こういったことを書いていくとぴんとくる方も多いかもしれない。芥川龍之介の『藪の中』などは、まさに伝聞による事実がときとして確定できないもので

あることを示している。この小説はかなり有名なもので、いちいちその内容を紹介することはこの文を読んでいただいている方に失礼になるのかもしれないが、一応紹介しておく。この小説は、ある男の死の真相についての、その場にいた三人の当事者の証言、および事件の当事者ではないが、その当事者についてのいくつもの証言が語られるという形式で進む。そして、この話の一番の面白みは、事件の当事者たちの証言が、それぞれが排他的なものになつていくということである。つまり、それぞれの証言は、事件のあつた現場の状況とは一致するのだが、それにもかかわらず、そのどれか一人が正しければ、ほかの二人の証言は間違つているということになるのだ。現実にはなかなかこういつたことはないかもしれないが、それをあえて描き出すことによって問題点が際立つのである。もちろん、当事者の三人のうち二人が、意識的に嘘をついていたということがわかるならば、あるいはそうであるとするれば、そうではない人の証言が事実だということになるかもしれない。しかし、もしそういった意識的な嘘というものがないければ、つまり、それぞれの証言が誠実になされたものとしたら、私たちはどのようにして事実というものを作成すればいいのだろうか。さらに、もしも私たちが、その事件が起こっている場面に居合わせたならば、誰が何と証言しようとも事実と直面できたのだろうか。そういったときに、なぜ自分だけが、ほかの三人の当事者と違って特権的な立場にいることができると言えるのだろうか。その場



に（自分をも含めて）ほかの誰が居合わせようとも、三人と同じ立場の人がもう一人増えたということになるだけではないのか。そうすると、その場に居合わせた「私」の証言が正しいと言われることがあるとしても、それは、その場面を自分で見たという特権性によるものではなく、三人の中の誰か一人と一致しているというような、単純に言ってしまうえば数の論理による信頼性の向上によるのではないのか。しかし、私たちは、多数者の意見が必ずしも正しいわけではないということもまた理解

しているのではないだろうか。

ここで、哲学について少し触れると、やはり、他者の証言がどの程度まで私たちの信念の根拠となるのかということが問題となってきた。近代のスコットランド常識学派のトマス・リードのような少数派は別としても、自分自身の知覚経験こそが基本的な根拠となるものだと考える人々が多かった。それは、認識論の問題が、個人レベルでの信念の正当化に限定されることが多かったためである。しかし、二〇世紀の後半以降、知識の問題を社会的な枠組みの中で捉えようという試みが広がり、その中で他者の証言の重要性が注目

を受けている。

この公開講座では、今までにあげたもの以外にも、言語や健康科学、数学から非常に興味深い講義がなされた。私たちは社会的な生物なので、言葉を用いて知を伝達するが、私たちの言葉づかいは、そのまま物事を表現しようとしたものもあれば、比的にイメージを伝えようとするものもある。比喩はときに正確なものではないと考えられるかもしれないが、はたしてそうなのだろうか。ここに言葉の虚実と言えるものがある。

また、はるか昔から私たちが関心を（一番といっても良いほど）持ち続けているものに、私たち自身の健康の問題があるのだが、これには実に多くの情報があふれていて、私たちには実際の研究成果がどういったものかがわかりにくいこともある。情報の多さが、私たちを混乱させていると言えるだろう。そういつた中で、専門家の最新の研究が紹介されている。もちろん、これもまた事実に関する、そして私たちに一番身近な問題である。

これまで事実というものについて書いてきた。事実というものには、私たちがそのまま直面していると考えているもの、つまり「実」が揺らぎ、「虚」との境界線が見えにくくなる瞬間がある。そしていつけん「虚」と見えるものに「実」とも言えるものがあるということもまたしかり。

最後に、このような現象が図形の世界にもあるということ、この講座では数学からとても興味深い講義がなされ、会場がおおいに沸いたということをお付け加えておきたい。

脳はしばしば間違える

— 視覚における虚と実 —

船橋新太郎

SHINTARO FUNAHASHI



船橋新太郎（ふなはし しんたろう）
一九五〇年、滋賀県生まれ。京都大学大学院理学研究科動物学専攻（霊長類分科）博士後期課程中途退学。京都大学理学博士。奈良県立医科大学助手、米国エール大学医学部神経生物学研究員、同研究科教授、京都大学総合人間学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授を経て、現在、京都大学「こころの未来研究センター」教授。専門は神経科学・認知神経科学。大学院の頃から一貫して前頭連合野の働きに関する神経生理学的な研究を行ってきた。主要著書に、『前頭葉の謎を解く』（京都大学学術出版会、二〇〇五年）ほかがある。

人は実物が見えるか？

日高敏隆さんの随筆集『セミたちと温暖化』（新潮文庫）の中に、はっとさせられた一章がある。「人は実物が見えるか？」と題された一章である。ある年の正月に、知り合いの小学校の先生が日高さんの家を訪れ、小学生が描いたアリの絵を見せたという。アリの絵は三種類あった。最初の絵は、全員の生徒に画用紙を配布し、アリの絵を描くように指示して描かせたものだった。描かれた絵には、頭と胴体があり、胴体から四本あるいは八本の脚が出、頭には後ろの方に向いた触角のようなものをもつ生き物の絵が描かれていた。それは実際のアリの姿とは全く異なるものだった。次に、シャーレの中にアリのを一匹入れ、それをそれぞれ別のグループに配布し、中にいるのがアリだと言ったあとで、もう一度アリの絵を描くよう生徒に指示した。こうして描かれたアリの絵を見せられて、日高さんは大変驚いたという。なぜなら、生徒は実際にシャーレの中で動くアリの目を見たはずなのに、絵に描かれていたアリは、見る前に描いた生き物の姿とほとんど違いがなかったからだ。先生はそこで、シャーレの中

のアリを詳しく見るように生徒に指示した。そして、アリの体はいくつの部分からできているか、脚は体のどこから出ているか、脚は何本あるか、触角はどこから出て、どの方向をむいているかなどの質問をし、生徒にひとつひとつ確認させた。そして、もう一度生徒全員にアリの絵を描くように指示した。その結果、集まった絵は、最初の二枚の絵とは異なり、アリの体の基本的な構造がちゃんと再現された正しいものになっていったという。「人間は実物を見たからといって、おいそれとその実物が見えるものではないということが、しみじみよくわかった」とその章の最後に書かれている。次は自身の経験である。私は東京教育大学（筑波大学の前身）理学部動物学の出身である。私が学部生だった時は（今でもそうかも知れないが）、二年生から形態学、発生学、生理学などの実習が同時並行に進む。実習とは言うもののその実態は、午後一時から五時頃まで、ケント紙に向かって延々と見たもののスケッチをすることだった。生理学の実習ですら、実験状況やオシロスコープ上の波形を正確に描き取ることだった。夏休みになると野外実習があり、伊豆下田の臨海実験所や、長野の菅平高原生物実験所に行く。その実習たる

や、朝から晩まで、顕微鏡で観察した細胞や生物、採集してきた生物のスケッチばかり。絵どころなど全くなく、高校では音楽を率先して選択した私には、このような実習は苦痛以外の何物でもなかった。それでついに、指導していた教員に、「なぜ明けも暮れてもスケッチばかりしなければならぬのか。記録のためであれば、写真を撮って残しておけばいいのではないか」と言ってしまった。私のこの言葉に、担当していた教員から、「ばか者。これは記録に残すためにしているのではない。実物を見る訓練をしているのだ。見たものを精確に確認し、把握するための訓練をしているのだ。絵画実習ではないので、上手・下手は関係ない。目で見た対象をどれだけ精確に把握できているかが重要なのだ」という返事が返ってきて、なるほど、そうだったのかと納得したことがある。大学卒業の時、卒業記念として実習で描いてきたスケッチがまとめて返却されてきた。その時はもうどんなスケッチをしたかの記憶はなかったが、自分が描いたたくさんさんの図を見て、その精密さに感動したことがあった。前置きが長くなったが、日高さんが挙げている話も、私の経験も、目で見ても把握し理解したと思っているものが、いかに不十

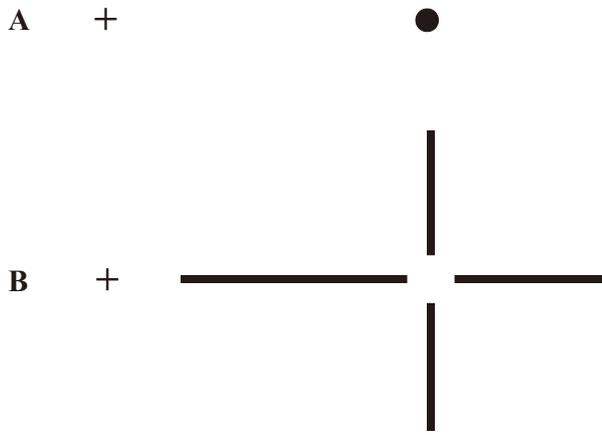


図1 盲点での充填現象の体験。方法は本文参照。

分な情報しか持たないものなのかを示している。私たちは、眼前にあるものを細大漏らさず見ていると考えているが、実際にはかなりの部分が勝手な思い込みである可能性がある。では私たちはどんなものを見ているのか、それを少し考えてみよう。

盲点での充填現象

私たちの目には盲点と呼ばれる場所がある。網膜では、光刺激を受容する視細胞が一番外側にあり、そこで受容された情報は内側にある双極細胞、神経節細胞に送られ、最終的には一番内側の神経節細胞から出た視神経により上位の中枢に送られる。網膜で受容した情報を上位の中枢に送る細胞が一番内側にあるため、この細胞から出た軸

索はどこかで網膜を横切って外に出なくてはならない。私たちの目では、神経節細胞の軸索がまとまって一か所で網膜を横断する。この場所が盲点である。

盲点は神経節細胞の軸索が集合して網膜を横断する所だから、ここには視細胞はない。視細胞がないから、この部分に光刺激が当たったとしても、それを受容することはできない。左右の目それぞれに盲点があることから、私たちがもし片目で周りの風景を見たとなると、風景のどこかが盲点に投影することになり、その部分は認知できないはずである。しかし不思議なことに、右目だけで見ても、左目だけで見ても、風景の一部を認知できないという感覚はない。しかし、図1Aの十字を右目の前に置き、これを右目でずっと見続けながら図全体を近づけたり、遠ざけたりしてみよう。動かしているとき、ある所で右側に見えていた黒丸が見えなくなる。ちょうどその時に黒丸が投影される網膜の場所に盲点がある。このようにして盲点の存在を体感することができる。

ところで、この時不思議なことが起こる。つまり、図1Aのように十字と黒丸が白い紙に描かれている場合、黒丸が盲点の部分に投影されて見えなくなってしまうと、その部分全体が背景と同じ白になる。同じことを赤色の背景ですると、黒丸の見えていた部分全体が背景と同じ赤色になる。あるいは、黒丸の代わりに、図1Bのような交差点の部分のない十字形の交差点部分を盲点に入れると、交差点をもつ十字形を見ることができる。

このように、盲点に投影される視野部分には実際には刺激として受容されないから知覚されることはないはずであるが、私たちには何らかの形態や模様として知覚される。しかも、知覚される形態や模様は、盲点の周辺に存在する形態や模様と矛盾がないのはもちろん、先の図1Bのように、「合理的」に解釈されたものが知覚される。このような現象は「充填」と呼ばれ、文字通り受容されない部分を受容されている周辺部分が充たし、全体として矛盾のない、合理的な解釈のできるものにするようなくみが存在する。

充填現象に見られる視知覚のこのような操作や修飾は、網膜で行われているのではなく、もちろん、脳の中で行われている。充填現象からわかることは、私たちの脳は目で見たものをそのまま知覚するのではなく、目から入ってきた情報を、どうやら記憶や知識や経験をもとに解釈し、操作し、修飾し、それによって得られたものを知覚しているようである。

視覚情報はどのように処理されるか

目で見たものがどのように処理され、知覚されるようになるかを少し詳しく見てみよう。視覚情報処理は、私たちの周囲にあるものが視覚刺激として網膜にある視細胞によって受容されるところから始まる。視細胞には外節と呼ばれる部分があり、ここには膜内に光感受性色素を多数持った円盤状の構造が、縦にたくさん並んでいる。視細胞に光刺激が当たると、視細胞の外節に

ある光感受性色素が光化学反応を起こし、色素が分解される。色素の分解を引き金に、視細胞内で複雑な酵素反応が生じ、その結果、視細胞に興奮性の変化（減少）が生じる。視細胞に生じた興奮性の変化によって、視細胞が双極細胞に作っているシナプスから放出される神経伝達物質の量が変化（減少）する。そのため、双極細胞の興奮性が変動し（増加する場合と減少する場合がある）、これによって双極細胞が神経節細胞上に作っているシナプスから放出される神経伝達物質の量が変動する（増加する場

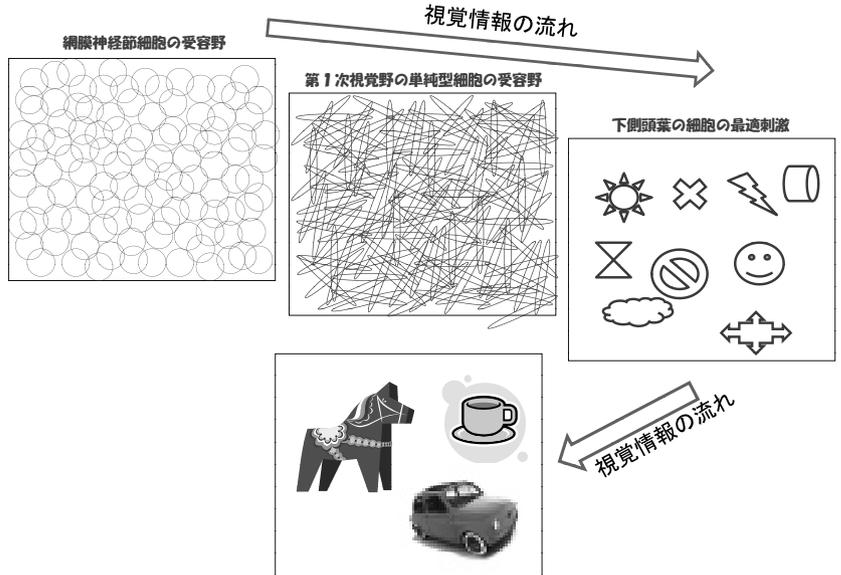


図2 視覚情報処理系での情報処理の様子。図中の小円や楕円は細胞の受容野の形を表わしている。下位中枢では要素的な情報の抽出が行われるが、上位の中核になるとそれらが統合され、要素的な図形に対する選択性（最適図形）が生じる。

が神経情報として視神経を介して脳に伝えられる。このように網膜では、視野全体の情報を小さな部分（神経節細胞の受容野の大きさ程度の小さな点状の部分）に分解し、各部分にどんな情報（色や明暗など）があるかを検出し、その情報を脳に送っている（図2参照）。
網膜から出た視覚情報は、視神経を介して間脳にある外側膝状体とよばれる構造に送られ、そこから後頭部にある大脳視覚野に送られる（図3）。大脳の第一次視覚野には単純型細胞、複雑型細胞という名前の

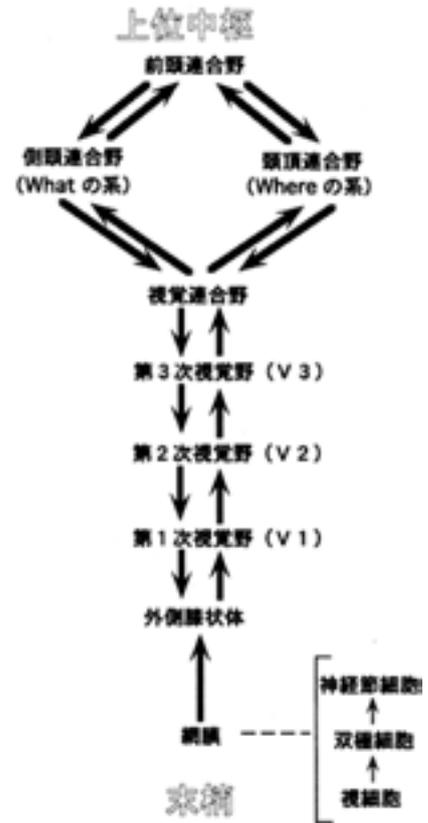


図3 視覚情報の脳内での流れ。

合と減少する場合がある）。その結果、神経節細胞の興奮性が変化することになる。このように、視細胞で受容した視覚情報は、双極細胞を経て神経節細胞に送られ、神経節細胞で生じる活動電位の頻度の変化（増加または減少）に変換されることになる。そして、この変化
つけられた神経細胞が存在し、網膜から送られてきた小さな部分の情報を、ある長さや幅をもち、同時にある傾きをもつ棒状の刺激に統合したり（単純型細胞）、棒状の刺激や明暗のエッジがどの方向に動いているかなどの情報を抽出する（複雑型細胞）。また、第一次視覚野にはブロッツと呼ばれる構造があり、ここには波長選択性のある細胞が集まっていることが知られている。第一次視覚野の個々の神経細胞が受け取る情報は、視野内の小さな領域に限られている。第一次視覚野の細胞は、小さな視野領域内での刺激の特徴（棒状の刺激の特徴、明るさや色の境界の長さや傾きや動き、光の波長選択性など）を抽出している。したがって、図4の左側に見られるような動物園のゾウを見たとき、それは第一次視覚野では図4の右図に見られるような情報に分解されると考えられる。このように、視覚情報はまず細かな部分に分解され、その中に含まれる視覚の特徴が抽出される。第一次視覚野で処理された視覚情報は、

(1) 具体的には、色素の分解によりいくつかの酵素の連鎖的な活性化が生じ、結果としてcGMPという物質を分解する酵素が活性化される。その結果、cGMPの細胞内濃度が低下し、膜に存在するcGMP依存性のナトリウム・チャンネルが閉じてしまうため、ナトリウム・イオンの細胞内への流入が低下する。
(2) 細胞のシナプス終末からは伝達物質としてグルタミン酸が放出されるが、これを受け取る双極細胞には二種類あり、一方は興奮性伝達物質として受け取るのに対して、他方は抑制性伝達物質として受け取る。
(3) 神経線維を通して神経終末にあるシナプスまで伝導していく神経信号のこと。

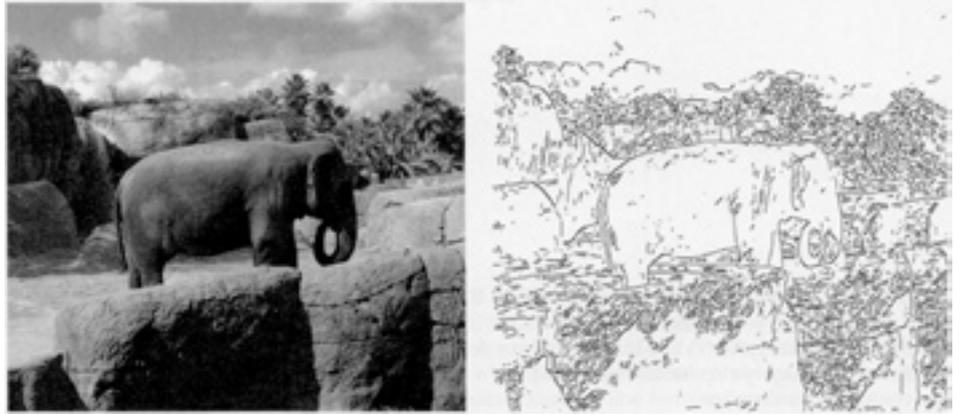


図4 動物園のゾウ（左図）を見たとき、第1次視覚野ではこれがどのように表象されているか（右図）を模式的に示したもの。

その前方の第二次視覚野、さらにその前方の第三次視覚野というように大脳の前の方に送られていくと同時に、背側へ行く経路と腹側へ行く経路に分かれる。背側経路の情報は頭頂葉へ、腹側経路の情報は側頭葉へと送られていく（図3）。背側経路では、視覚情報の中でも、動きに関する情報や、視覚刺激の位置などの空間的な情報が主として処理される。一方腹側経路では、視覚

刺激の形態や色などの情報が主として処理されることが明らかにされている。

背側・腹側経路に見られるような高次の視覚野に行くにしたがって、個々の神経細胞が情報を受け取る視野の範囲は拡大し、側頭葉や頭頂葉の細胞では、視野の四分の一、あるいは半分を占めるような大きな受容野をもつ細胞も現れる。個々の神経細胞が情報を受ける視野の範囲が大きくなると、当然そこで処理される情報もより総合的で統合されたものになる。側頭葉の細胞では、図2に示したように、いくつかの要素的な形の組み合わせられた刺激によく応答するようになる。このような細胞では、視野のどこに刺激が呈示されるかや、呈示される刺激が大きい小さいかは問題ではなく、どんな形をしているかが賦活の重要な要因になることが明らかにされている。

このように、網膜の視細胞で受容された刺激は、小さな領域に分割され、そこに含まれている要素情報が抽出される。その後、大脳の低次視覚野から高次視覚野へと情報が伝達されるにつれて、広い視野領域の情報が集められ、要素に分解された情報が再構成、統合されていくことが明らかにされている。視覚情報処理系の各段階で行われる緻密な情報処理の様子は、多くの神経科学者によって明らかにされている。視細胞で光刺激が受容される所からこの視覚情報処理プロセスが始まるように、この経路で操作・処理される情報は、あくまでも刺激として視細胞で受容された情報であり、刺激として受容されなかった情報は処理に供されることはない。したがって、刺激とし

て受容されなかった情報を、私たちは知覚することができないはずである。

しかしながら、先の盲点の所で説明したように、実際には存在しないものをはっきりと見ることがある。あるいは、周囲の刺激により、そこに存在する刺激を見誤ることがある。私たちの知覚は、神経科学の研究が明らかにするほど正確なものではないようである。私たちの視知覚は、私たちが思っているほど正確なものを見ているわけではないようである。

錯視、錯覚、change blindness、
そして、motion blindness

「私たちの視知覚は、私たちが思っているほど正確なものを見ているわけではない」ことが容易に理解できる現象として、有名な錯視現象を挙げることができる。たとえば、図5Aは「カニツアの三角形」と呼ばれる有名な錯視図形である。中央の部分に、三角形をした白い平面が、三つの黒い円や逆向きの三角形の上に重なっているのを「見る」ことができる。確かに白い三角形の面が見えるが、その輪郭があるわけではない。図5Bは「エビングハウス錯視」と呼ばれるもので、それぞれの図の中央に描かれた円の大きさは同じであるが、小さな円に囲まれた円の方が、大きな円に囲まれた円より大きく見える。図5Cの左側では、白い細長い棒状の刺激が三つの円の上に重なって見えるが、右側の図ではそのような棒状の刺激は全く見えない。また、図5Dに見られるように、直線を少しずらずらして表示すると、ずらした各直線の断

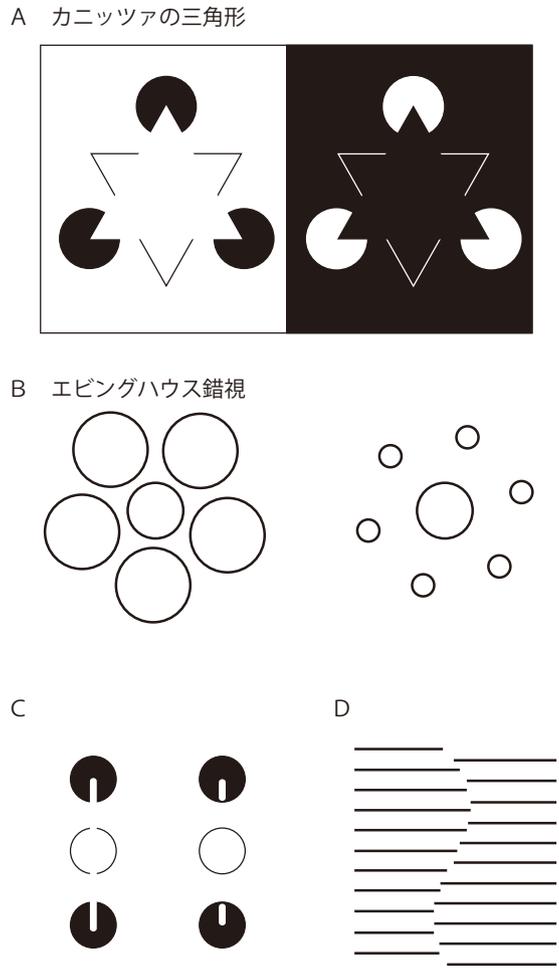


図5 錯視図形の例。

面を繋ぐ明確な境界が知覚される。

このように、刺激として存在しないにもかかわらず、周囲に配置された刺激に応じて、白い三角形の面が知覚されるとか、白い細長い面が知覚されるとか、あるいは、同じ大きさなのに一方では大きく、他方では小さく見えるとか、物理的には全く同じ明るさなのに、一方では明るく、他方では暗くみえるとかいったことが起こる。あるいは、全く動いていない図なのに、じっと見ていると回転運動が見えたり、ヘビの動きのような変化が見えたりする。このような図形は錯視図形とよばれ、様々なものが作成されている。立命館大学の北岡明佳さんのホームページ <http://www.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/> には、北岡さんが作成した錯視図形が多数掲載されている。不思議な見え方を体験すると面白^い。change blindness と呼ばれる現象もよく

知られている。よく使われる方法は、二枚の同じ情景の写真を交互に呈示し、二枚の写真に見られる違いを答えさせるものである。たとえば、兵士が大きな軍用機に乗り込んでいるシーンを撮った二枚の写真を交互に見せられ、二枚の写真の違いを見つけるように指示される。数秒おきに二枚の写真が交替するのをしばらくの間見ていても、どこに違いがあるのか全くわからない。主翼の下にとりつけられている大きなジェットエンジンが片方の写真ではなくなっている、と種明かしをされて初めて違いに気がつく、といったものである。かなり大きな変化が生じているにもかかわらず、全く知覚できないことに愕然とするかもしれない⁽⁴⁾。

変化の起こっているあたりに注意を向けていても、大きな変化を見逃すことがある。むしろ、motion blindness あるいは motion induced blindness と呼ばれる現象

も知られている。たとえば、画面の中央に点が一個呈示され、これを見続けるように指示される。その周辺に三つ点が呈示され、それは動かないで固定されているが、背景におかれた格子状の刺激が中央の点を中心に一方方向に回転する。中央の点を見ていると、最初は周辺の三つの点のはっきりと見えるが、そのうち、この三つの点のうち一つ、あるいは、二つが見えなくなってしまう。目を中央の点からそらすと、三点のあることが確かめられるが、中央の点を見るようにすると、再び周辺の点のいくつかが見えなくなってしまう。

あるいは、一〇人ほどの人たちが二組に分かれ、お互いに入り乱れてボールの投げ合いをしているビデオを見せられる。一組の人たちが何回ボールの投げ合いをしたかを数えるように指示されてこれを見る。見終わって回数を答えると、何か変なものを見なかったかと問われる。何を問われているのかわからない。そこで、もう一度同じビデオを見ると、ボールの投げ合いをしている人たちの間を、変なぬいぐるみを着た人が、右から左へゆっくりと横切っていくのが見える。こんなにはっきり見えるものをなぜ見落としたのかと不思議な気持ちになる⁽⁵⁾。

このような経験をする、自分自身の知覚がどんなに不十分なものがよく理解できる。すべてを見ているように思っているが、実はその中で起こっているいくつもの大きな変化を見逃していることがよく理解できる。私たちが注意を向けている所ですら変化を見逃すことから、注意

(4) change blindness に
 ついては、YouTube で
 “change blindness” で検索
 するといくつもの例が掲載
 されている。自分で確かめ
 ると面白^い。
 (5) これについては、
 YouTube で “motion
 blindness” で検索するとこ
 くつか例が掲載されている。
 自分で確かめてみると面白^い。

を向けていない所で起こっている様々な変化を、知覚しそこなっているだろう、ということがよくわかる。私たちは実物をしっかり見ていると思いついでいるが、実際はどうもそうではない。網膜の視細胞で受容されないものを見るがあると同時に、網膜の視細胞で受容され、視覚情報処理系で処理されているはずの情報を知覚できないことがあることがわかる。

なぜ実物が見えないのか

神経科学の研究は、私たちの神経系が、視覚情報を正確に受容し、受容した情報を細大漏らさず上位の中枢に送り、上位の中枢では送られてきた情報を再構成・統合して、ものの認知、動きや変化の知覚をいかに正確に行っているかを明らかにしてきた。しかしながら他方では、刺激として受容されていなくてもかかわらず、あるものとして知覚されたり、刺激として受容されているにも関わらず知覚されないことがあることが、現実に経験される。なぜこのような矛盾が生じるのだろうか。

その原因は、私たちの脳の働きにある。私たちは目でものを見ているのではなく、脳でものを見ているからである。図6に示したように、視覚情報は末梢の視細胞で受容され、その情報は脳の第一次視覚野などの下位中枢に送られて処理された後、さらに上位の中枢に送られ、そこで刺激が知覚される。このような末梢から中枢に向かう情報処理系を、ボトム・アップの情報処理系と呼んでいる。ボトム・アップの情報

処理系では、受容された情報の中に含まれるさまざまな特徴が下位中枢で抽出・分析され、さらに、これらの情報が上位中枢で再構成・統合され、知覚に至る。

一方、ボトム・アップ系とは逆に、上位中枢から下位中枢に向かう大きな情報の流れがあり、このような系をトップ・ダウンの情報処理系と呼んでいる。この系は、ボトム・アップ系を通して送られてきた情報を、知識・経験・記憶などに基づいて解釈することにより、その情報を修飾したり操作したりすると考えられている。目から入ってきた情報を、知識・経験・記憶によって修飾・操作することにより、周囲の状況と矛盾しない「合理的」な解釈をすることができるとは、トップ・ダウンの情報処理系があるからである。様々な錯視や錯覚で見えてきたように、私たちの知覚におけるトップ・ダウンの情報処理系の役割は非常に大きい。これが、「私たちは目でものを見ているのではなく、脳でものを見ている」と言われる理由である。

私たちの脳は目で見たものをそのまま知覚するのではなく、目から入ってきた情報を、記憶や知識や経験をもとに解釈し、操作し、修飾し、それによって得られたものを知覚している。したがって、脳は

しばしば誤った解釈をし、誤ったことを知覚させる。「人間は実物を見たからといって、おいそれとその実物が見えるものではない」ということを念頭に置いて、実物を見る訓練をする必要がある。また、見たものを見誤らないように、いろいろな知識や経験を積む必要があるかもしれない。

情報処理における階層性

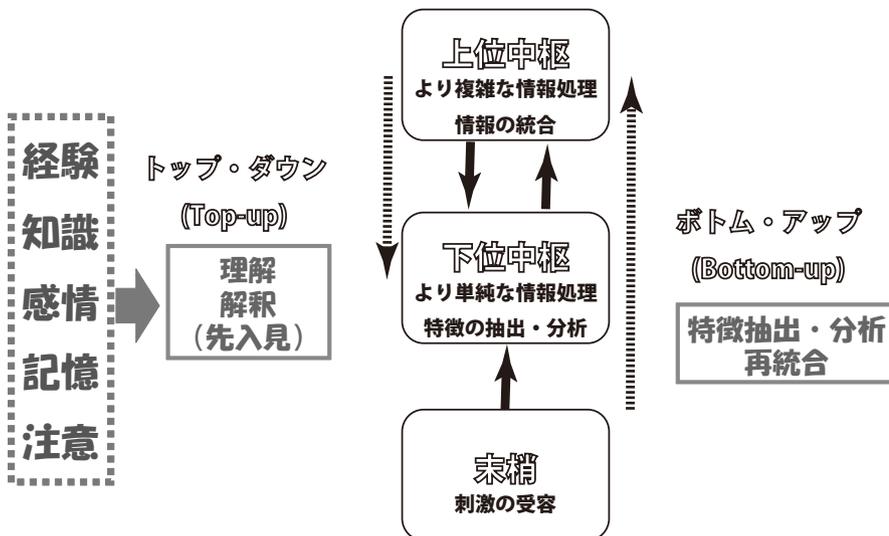


図6 視覚情報処理におけるボトム・アップ処理系とトップ・ダウン処理系の役割。

異界の「私」

— 一人称小説における虚と実

廣野由美子 — YUMIKO HIRONO



廣野由美子（ひろの ゆみこ）
一九五八年、大阪府生まれ。英文学、イギリス小説専攻。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。著書に、「十九世紀イギリス小説の技法」(福原賞受賞/英宝社)、「嵐が丘」の謎を解く(創元社)、「批評理論入門」(ランケン・シユタイン)「解剖講義」(中公新書)、「視線は人を殺すか」(小説論11講) (ミネルヴァ書房)、「ミステリーの人間学」(英国古典探偵小説を読む) (岩波新書) ほか。

1 小説を読むとはどういうことか
— 一人称と三人称の語り

小説の別名はフィクションである⁽¹⁾。つまり、小説とは作り話、絵空事であって、そもそも定義上、「虚」なる存在である。それゆえ、小説を読むことは、一見、現実からの逃避のように見られがちだが⁽²⁾、小説は本来、「虚構」という形式を借りて、現実以上の「真実」を見せるといふ特色を具えている。

私たちは現実世界に生きているが、その大部分は日常生活から成る。私たちはそういう日常にどっぷり浸かりながら、何気なく人や物を見て、何らかの印象を抱いたり判断を下したりしている。だが、いったん習慣になつてしまうと、表面しか見ず、その奥にあるものが見えなくなつてしまうということが、よく起こる。そこで、ふだん見慣れたものから日常性を剥ぎ取り、新たな光を当ててくることを、文学批評上、「異化」(defamiliarization)と呼ぶ。ヴィクトル・シクロフスキー⁽³⁾は、「習慣によつて蝕まれた生を、この異化作用によつて回復することこそ、芸術の目的である」と言う。このように考えると、芸術のひとつである文学のなかでも、とりわけ人間を描くことに力

を注ぐ「小説」は、「虚構」という器の中に、「人間とは何か」という問題を盛り込み、新たな光を当てる表現形式であると言えるだろう。

西洋近代の産物である小説は、詩や演劇に比べると、はるかに形式的な縛りの少ない自由なジャンルであるが、小説が逃られない形式上の約束事というものがひとつある。それは、「語り手」を設定しなければならぬことだ。作家は小説を書き始めるとき、まず、誰に物語る役割を担わせるかを決めなければならない。語り手の種類は無数にあるが、語り手が物語世界の内にいるか外にいるかによつて、二種類に大別できる。

物語世界の内側にいる語り手は、主人公であれ傍観者であれ、物語の中に生きる住人、つまり登場人物で、自分のことを「私」と呼ぶ。このような物語は、「一人称形式」に分類される。当然、語り手の個性は千差万別であり、それが作品に様々な色合いを与えることになる。それに対して、語り手が物語世界の外側にいる場合が、「二人称形式」である。この語り手は物語に登場せず、現実生きる作者とも区別されるが、物語中の出来事や人物たちについて熟知している神のごとき存在で、文学批

評上、「全知の語り手」と呼ばれる。

作家は何を書きたいかによつて、それに相応しい芸術上の形式を選択する。その結果、定められた語り手の見方を通して、読者は物語世界を見ることになる。三人称小説を読むとき、私たちは全知の語り手の視点を通して世界を見る。現実では私たちは、自分の目という「私」の視点からしか世界が見えない。ところが、もし全知の視点があれば、今この瞬間、はるか遠い場所に飛んで行つて見ることができると。そういう物理的な制限を超えるだけではなく、他人の心の内も見える。Aの心の中も見えるし、AとBの心中を比べてその違いもわかるし、Cの経歴、Dの人間関係……等々、すべてがわかる。つまり、全知の視点を持つことは、まさに超能力に似た視力を帯びることであり、三人称小説を読むことは、そういう現実世界ではありえない体験を可能にするのである。

他方、一人称小説も、三人称小説とはまた別の意味で、私たちに特殊な経験をさせてくれる。それは、他人の目を通して見たり感じたりすることである。よく「人の身になる」とか「人の立場に立つ」とか言うが、本当にそうすることは困難で、実際には不可能だ。ところが、一人称小説を読む

(1) 散文物語の長さを基準とする場合、長編小説をnovel、中編小説をnovella、短編小説をshort storyと呼ぶ。近年では、小説以外の文学形式も含めて、虚構の物語をfictionと呼ぶ場合がある。

(2) たとえばファンタジーやサイエンス・フィクションなどのように、現実からの遊離を主目的としたジャンルも、確かにある。

(3) Victor Shklovskii (1893-1984)。ロシア系ユダヤ人の作家、ロシア・フォルマリズムの批評家。

(4) 一般に、語り手のいる位置・見方を「視点(point of view)」と言う。しかし、小説の語り手がもたらす情報は、たんに見たことだけではなく、聞いたことや感じたことなど、あらゆるものを含む。また、語り手には、「述べる」ことほかに、「見た」り聞いたりする」という機能も含まれるため、近年、物語論ではこれら二つを区別し、後者の機能を「焦点化」(focalization)とこの概念で捉える。



1831年版 *Frankenstein* の口絵。フランケンシュタインが自分の創造物を置き去りにする場面が描かれている。

ことにより、私たちは他人の視点を共有する疑似体験ができる。たとえ語り手が、自分とはまったく違う境遇、タイプ、性格の人間であっても、読者はとにかく「私」の焦点に合わせて読むような仕組みに引きずり込まれる。したがって、一人称小説を読むことは、「他人を生きた」という、これも現実ではありえない経験をすることになるのだ。

以下、一人称形式の語りにつづいて、虚と実の問題について考察する。すでに述べたとおり、どのような一人称の語り手であっても、読者にとっては他者であるため、広い意味では「異界の住人」と言えるが、ここでは、人間の現実世界とは異次元に住む語り手の物語に限定することにした。

2 「私」は怪物

メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』(一八一八)は、三重の枠組み構造より成る一人称形式の小説である。いちばん外側の枠は、青年ウォルトンが北極探検に向かう途上、イギリスにいる姉に宛てて書いた手紙で、その中に、彼が航海中に

会った科学者フランケンシュタインの語りが含まれている。さらにその中に、フランケンシュタインが造った人造人間(怪物)が物語の箇所が教章にわたって挿入されている。ここでは、怪物が「私」と名乗っている部分に着目したい。

フランケンシュタインは、生命の神秘を探るといふ野望に駆られ、人造人間を造るが、その結果出来上がったものがおぞましい怪物であったため、実験室に置き去りにして逃げる。その後、フランケンシュタインに再会した怪物は、自分が生まれて以来どうしてきたのか、なぜ、また、どのようにして殺人を犯すに至ったのかという経緯を、長々と語って聞かせる。

怪物はまず、自分が生まれた直後のことを振り返り、「目が覚めたとき、辺りは暗かった。寒いし、自分がまったくひとりぼっちだと思うと、何か本能的に怖くなった」と言う。そして、戸外にさまよい出て、夜の暗闇の中を歩いていたときの状況について語る——「私は哀れで、寄る辺なく、みじめだった。何もわからず、何の区別もできなかった。ただ、痛みのような感じが、四方八方から襲ってくるので、私は座り込んで泣いた……私の心には、はつきりとした考えは何もなく、すべては混沌としていた。光と、空腹と、渇きと、闇を感じ、耳の中では無数の音が鳴り響いていた」と。死体を材料として造られた怪物の身体は大人であるが、ここで語られているのは、この世に産み落とされたばかりの者の意識という点で、赤ん坊の認識に近いものと言えるだろう。五感によって本能的に

察知される認識が並べられる一方で、まだそれぞれの感覚が未分化で混沌とした状態であることが示される。そのようななかでも、なんとなく見捨てられたという孤独な意識がある。生存の寂しさを身をもって感じ、惨めさのあまり座り込んで泣き出す怪物。映画等の翻案によって流布したイメージとは異なり、これが原作に描かれている怪物の本来の姿なのである。

たとえば怪物は、「木々の間から昇ってくる光った形のもの」を見つめるうちに「嬉しくなってきた」と素朴に表現している。このように個々のものが——そして後には人間やその営みが——初めてそれを見る者の目を通して、新鮮な感覚で捉えられることにより、異化効果が生じてくる。生まれた直後に歩行したり、それを記憶して言語表現したりするなど、ふつうの赤ん坊にはあり得ない属性を具えつつ、この世に誕生して間もない経験を語るということが、怪物という「異界の語り手」を設定することによって実現されているわけだ。そして、生来何ら悪の要素も具わっていなかった存在が、経験や認識を経るうちに、なぜ、また、いかにして殺人鬼へと変貌していったのかという問題が、このあとに続く怪物の語りを通して提示されることになる。

3 「私」は超能力者

ジョージ・エリオットの短編小説『引き揚げられたヴェール』(一八五九)は、彼女の他のリアリズム小説とはかなり趣の

(50) Mary Shelley (1797-1851) イギリスの女性小説家。父は思想家・小説家ウィリアム・ゴドウィン、母は女権拡張論者・小説家メアリ・ウルストンクラフト、夫はロマン派詩人パーシー・シェリー。

(6) この人造人間には名前がなく、小文字でmonsterとテキストに記されている。

(7) 作者はテキストの脚注に「the moon」と記している。

(80) George Eliot (1819-80) 本名はメアリーアン・エヴァンズ。イギリスの女性小説家。代表作は『アダム・ビード』(一八五九)、『ミドルマーチ』(一八七二)、『ダニエル・デロンダ』(一八七六)など。



H. É. Blancheon, *La Transfusion du sang* (1879年、パリで展示され、現在は写真がパリの国立図書館に所蔵されている)。輸血実験により生命を回復した女が、パーサ(左)を指し、彼女が夫ラティマ(右)の毒殺を謀ったことを告発する場面(*The Lifted Veil*より)。

異なる実験的な作品である。語り手である主人公ラティマは、透視力 (*Insight*) と予知能力 (*Fore-sight*) を具えている。作品の冒頭は、「私の終わりの時が近づいている」という一文から始まる。語り手は、自分がいつ、どこで、どのような状況のもとで死ぬかを予知していて、死ぬまでに残された一カ月間に自分の回想をまとめておこうとする。結末は、いよいよ最期の日となり、「死ぬ間際の苦しみの光景が私の目の前に……」という書きかけの文章で閉じられ、文字通り死によって語りが中絶したことを示している。

これは、見え過ぎるといふことの苦悩を綴った物語である。人の心が透視できるラティマには、人々の言動が「まるで顕微鏡を当てて見ているようにバラバラになり、その間にある軽薄なものや、抑えられたエゴイズム、幼稚さ、卑劣さ、ほんやりとした気紛れな記憶、怠惰な一時しのぎの考えなどが、せめぎ合いながら混沌たる状態のまま何もかも見える」。概して、人間の

心とはそういったものだが、表面しか見えない私たちには、自分の見方というフィルターを通して見る余地が残されている。他人を理解するには「Insight＝洞察力」が必要だとよく言われるが、この作品は、相手の心が見えることが、むしろ他者との共感を達成するうえで妨げともなりうるという警告を発しているようにも読める。

ラティマには、ただひとりの例外として、兄の婚約者パーサの心の中だけが見えない。その神秘の魅力ゆえにパーサに恋心を募らせたラティマは、いずれ兄が死ぬことを——そして自分とパーサの結婚生活が絶望的なものであることを——予知しつつ、誘惑に抗しきれずに彼女と結婚する。そのあと、パーサを覆っていた「ヴェール」が引き揚げられ、虚栄と策略と憎悪に満ちた彼女の心が見えるようになる。それまで愛していた人に幻滅することの苦悩をまざまざと語りつつも、他方で語り手は、死の瀬戸際まで生への執着を示す。このように物語は、超能力者という異界の語り手を設定することにより、他者との関係の問題を極限まで追究していると言えよう。

4 「私」は動物

語り手が動物に設定されている作品には、たとえばドイツのホフマンの『牡猫ムルの人生観』(一八一九—二二)や夏目漱石の『吾輩は猫である』(一九〇五—〇六)のように、猫の目を通して人間の世界を諷刺的に描いた作品もある。ここでは、イギリス小説のなかからアンナ・スーエルの『ブ

ラック・ビューティ』(一八七七)を例に挙げる。この作品は、ブラック・ビューティという名の牡馬を語り手とする自叙伝である。

ブラック・ビューティは快適な牧場で幸福な子馬として育ち、四歳のとき調教される。背に鞍を、口にハミをはめられ、手綱を付けられ、足に蹄鉄を打ちこまれ、人間のために働く生活がどのような苦難の経験であるかが、馬の内面描写を通して語られる。ブラック・ビューティは様々な主人に売られてゆくが、横暴な乗り手に怪我をさせられ見栄えが悪くなつてからは、貸し馬車屋、そして辻馬車屋で働く境遇へと格下げとなる。道端で客を待つ辻馬車として働いていたとき、ブラック・ビューティは、時としてひどい御者に酷使される。ある日、数人の遊覧客を乗せて、日に照りつけられ険しい坂を昇りながら長距離を走らされ、「働いている最中に倒れて死に、苦しみから逃れたいという私の願望が、もう少しでかないそうになつた」ときのことを、ブラック・ビューティは語る——「御者は、先に尖つたものが付いていて、打つと血が流れるようなむごい鞭を持っていて、それで私の下腹を打つたり、頭を殴つたりした。こんな辱めを受けて、心はずたずたになつたが、それでも私は精一杯のことをして、しりごみしなかつた。かわいそうなジンジャーが言っていたように、そんなことをしても無駄で、結局強いのは人間だとわかっていたからだ」と。ジンジャーとは、以前ブラック・ビューティが幸福な時代、いっしょに飼われ親しかった馬である

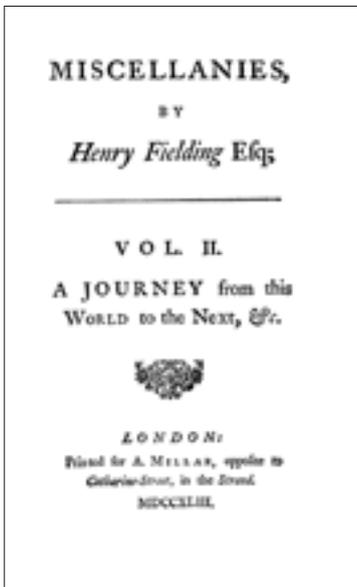
(6) Anna Sewall (1820-78). イギリスの女性小説家。子供のときに怪我をして歩行困難となり、一生病身のまま過ごす。馬車に頼る生活により、馬に精通していた経験をもとにして、晩年、生涯唯一の小説『ブラック・ビューティ』を六年かけて書き、出版して数カ月後に死去。

が、酷使されて衰弱し、死体となって荷馬車に載せられて通り過ぎてゆくところを、「私」は見かけたのだった。

人間がいかに愚かで残虐か、そして、人間の暖かさや品位とはどのようなものかということ、物語は、馬の目とその素朴で控え目な声を通して描き出す。確かにこの作品は、動物愛護運動のきっかけになるという側面もあったが、作者はたんに動物の気持ちを代弁しているだけではない。いったん手綱を握る立場に立つと、とことん支配しようとする人間の性情は、相手が動物の場合に留まらないことは、言うまでもないだろう。やはりここに描かれているのは、人間とは何かということにほかならないのである。

5 「私」は死者

幽霊が出現する小説は多いが、死者自身が語り手となった小説は稀である。そもそも霊的存在が現世の読者に語るというのは、不自然な設定であるため、かなり技巧を凝らさなければ難しい。たとえば、芥川龍之



『この世からあの世への旅』初版（1743）の表題頁。

介は短編小説『藪の中』（一九一八）で、殺人事件をめぐって複数の証言者を語り手に設定し、そのなかのひとりとして、殺された男自身に語らせている。そのさい芥川は、巫女の口を借りて死霊に語らせるという方法を用いて、不自然さを回避する。興味深いのは、事件の当事者たちの証言内容がまったく食い違っていて、結局真相がわからないこと——つまり、死者の言葉も生者たちの場合と同等に、真偽を疑われ判断されるべき材料として扱われていることである。言い換えれば、この作品では、生死の境を越えて、人間の情念や欺瞞の問題が追究されているわけだ。

ヘンリー・フィールディング⁽¹⁰⁾の小説『この世からあの世への旅』(二七四三)では、虚構の編者が序文で、「誰か敬虔な聖職者が見た夢か幻影か、あるいは本当にあの世で書かれてこの世に送られて来たものなのか」定かではない原稿が、ある屋根裏部屋で発見され編者の手に入った経緯を説明する。原稿は一部消失していて、編者が所々に注釈を補うというように、まことしやかな体裁がとられている。

物語の冒頭で、死んで霊となった語り手は、この世の肉体を離れるさいの体験を語る。自分の身体が冷たくなり硬直するとすぐ、「私は行動を開始したが、脱出が容易ではないことがわかる」。扉とも言うべき口は閉まっているし、目という窓も看護婦の手で閉じられているので、そこから

出られず、「ようやく家（私が閉じ込められていた肉体のこと）の天辺から、一筋の光がすすかに射し込んでくるのに気づいたので、私はそこへ昇ってゆき、煙突らしきものをそっと通り抜けると、鼻の孔から外へ出た」。階下で縁者たちが遺言をめぐって言い争っている声を聞きながら、窓から出た霊は、「驚いたことに、生前思い込んでいたように飛翔することはできなかったが」、無事地面に着地し、「一度に驚くほど跳躍できて」満足する。こうして語り手は、あの世行きの馬車に乗り、乗り合わせた他の霊たちと死因について語り合ったり、天国に到着するまでの道中、見聞したりしたことを物語る。死さえも笑いの対象とする強靱な諷刺の精神に貫かれたこの作品は、決して形而上学的な世界を描いたものではなく、あくまでも現実に密着しつつ、この世の人間の在り方をリアリステイックに描き出そうとした物語であると言えるだろう。

以上、「異界」の視点から語られた一人称小説を、いくつか例を挙げて見てきたが、はじめにも述べたとおり、そもそも作り話を内容とする小説は、広義にはすべて異界の物語であると解釈できる。それは、現実新たな光を当てて、「人間とは何か」という問題を問い直す試みでもある。小説とはまさに、虚構によって真相を照らし出すもののだと言い換えられるだろう。

(10) Henry Fielding (1705-54): イギリスの小説家。劇作家。代表作は小説『ジョウゼフ・アンドルーズ』(一七四二)、『トム・ジョンズ』(一七四九)など。『この世からあの世への旅』は、三巻本として出版された『雑文集』(一七四三)の第二巻に収録されている。
(11) 語り手が天国に到着してからは、天国で出会った背教者ユリアヌスの霊、続いてアン・プリン（ヘンリー八世の二番目の妃）の霊がそれぞれ物語るという形式になっている。

運動・医科学の虚と実

森谷敏夫 | TOSHIO MORITANI

肥満は食べ過ぎが原因か？

肥満の原因は何でしょう？ すぐに頭に浮かぶのは「飽食」「糖質の摂り過ぎ」という言葉でしょうか。わが国の一日あたりのエネルギー摂取量は、一九七五年頃の二二二六キロカロリーをピークとして減少に転じ、二〇〇四年には一九〇二キロカロリーと終戦直後（一九四六年）の一九〇三キロカロリーとほぼ同じ水準にまで低下しています。この間、食事から摂取するエネルギー量は減少し続けているにもかかわらず肥満者は増え続けているのです。理由のひとつは、便利で体を動かさない近代的な生活による「エネルギー消費量の減少」が「エネルギー摂取量の減少」を上回り、相対的なエネルギー過剰」となっていることです。まさに運動不足なのです。

肥満のメカニズムは複雑で、単に遺伝だけで決まるわけではありません。ある報告では、父親よりも母親が太っているほうが、子供の肥満がおおく、母親の毎日の食生活や生活習慣が子供に大きく影響を与え、（遺伝）するのかもしれない。ペットブームのなかで、その家族の食生活や運動習慣が愛すべきペットにまで影響し、まっ

たく遺伝が関係しないペットにも、肥満が蔓延しはじめてきた今日この頃です。この飽食と運動不足の社会では、誰にでも太る可能性があるので。

肥満の解消にもっともよく行われるのが「ダイエット」であることは、誰も疑う人はいません。確かに猫も杓子も「ダイエット」「ダイエット」とお念仏のように唱えて、日本中いたるところで流行っています。これだけの努力があり、ダイエットが成功していれば、スリムな人たちが街は溢れかえるはずですが。

食事制限をはじめれば、脳に必要な血糖を補うために筋肉や肝臓のグリコーゲンが分解されることになり、このグリコーゲンは実は三〜四倍の水と結合して体内に貯蔵されています。特に脳の唯一のエネルギーである糖質をカットしたり、制限するダイエットでは、グリコーゲンがどんどん分解されるので、水がからだから抜けていくことになり、目に見えて（実際よりも三〜四倍近い速さで）体重は減って行きます。脂肪はほとんど減ってはいないのです。つ



森谷敏夫（もりたに としお）
一九五〇年、兵庫県生まれ。一九八〇年、南カリフォルニア大学大学院スポーツ医学研究科博士課程修了（Ph.D.）。テキサス大学、テキサス農工大学、京都大学教養部等を経て一九九二年、京都大学大学院人間・環境学研究科助教授、二〇〇〇年から同科教授。専門は応用生理学とスポーツ医学。主な一般向け著書に『メタボにならない脳の作り方』（扶桑社）、『メタボリアン改造計画』（共著、NHK出版）、『からだど心の健康づくり』（中央労働災害防止協会）がある。

まり、体重が減ることと脂肪が減ることとは同じではないのです。一キログラムの脂肪のエネルギーは約四日分の食事全部の量にあたります。良く覚えておいてください。減量をはじめてからしばらくすると体重の減り具合がどんどん鈍くなってきます。これは減量にもなっていないために必要



図1 肥満の原因に運動不足が大きく関与している。

(1) Kreitzman S.N., Coxon A.Y., Szaz K.F.: Glycogen storage: illusions of easy weight loss, excessive weight regain, and distortions in estimates of body composition. *Am J Clin Nutr* 1992; 59:292S-293S.

なエネルギー消費量である基礎代謝が少しづつ低下するからです。長い間、我々の祖先が飢餓との戦いに耐え忍んで生き延びるために身につけた、いわば生きるための本能なのです。食べ物が少ないと、からだは省エネモードに入り、基礎代謝や活動量を自動的に低くして、飢餓に備えるのです。

ダイエットが続けば、当然からだにも害が出てきます。食事制限では十分な脳の栄養である血糖やからだを作るタンパク質を確保することが難しくなってきました。筋肉と肝臓のグリコーゲンは脳の栄養である血糖の非常食ですが、ダイエットの期間が長くなってくれば、この非常食も食いつくされてしまいます。このために脳細胞は自分が死なないようにありとあらゆる手段を打ちます。必要であれば、自分のからだの筋肉も食べるのです。筋肉のタンパク質を分解して肝臓に運び、足りなくなった脳の栄養であるブドウ糖を新たに合成（これを糖新生といいます）して血糖値を維持しようとするのです。

そして、ついには自分の筋肉をも食い尽くして、痩せ細っていきませんが、脂肪が燃えてなくなっていくっていいのではなくて、むしろ大切な筋肉が減ってきた結果なのです。こうなると、ますます基礎代謝は減っていき、脂肪もそれほど落ちていないので、相対的には減量前よりも減量後のほうが体脂肪率が高くなるケースが多くなってきます。いわゆる「隠れ肥満」になっていくわけです。一見痩せて見える女子大生の約五〇%が肥満もしくは隠れ肥満なのが事実で

す。

食事制限をせずに、運動でエネルギー消費を増加させた場合、除脂肪体重（骨、筋肉組織）を減らさずに、脂肪だけを燃焼させることが可能になります。いかにすれば、〈運動ダイエット〉では大切な筋肉や骨などのからだの構成成分を減らさずに、脂肪だけを確実に減らすことが可能になるのです。

〈運動ダイエット〉は消費カロリーを確実に増やせるだけでなく、筋肉を維持し、基礎代謝を上昇させ、呼吸循環系の力もパワーアップしてくれるので、全身の血行も良くなり、お肌がイキイキして、便秘も運動で解消されるので、結果として「美しく痩せられる」のです。

このように運動の継続は食事制限では得られない効果、つまり、太りにくい代謝状態や体質を作れることになるわけです。各種の合併症を発症しやすい内臓脂肪型の肥満では、運動で皮下脂肪よりもっと効果的に内臓脂肪が燃焼させられる利点も指摘されています。さらに、運動の継続は、生活習慣病の予防医学的効果も備えているので、肥満のコントロールには運動が絶対に不可欠なのです。

糖尿病は糖質の取りすぎが原因か？

お腹がだぶついた中年男性は日増しに増

死の四重奏



図2 肥満（特に内臓脂肪）は多くの生活習慣病の温床⁽³⁾

えて、メタボ検診では恐らく四〇歳以上の男性の二人に一人はメタボリック症候群に罹患している可能性が示唆されています。メタボリック症候群は運動不足や肥満が温床になっており、だぶついた内臓脂肪から多くの病気の原因遺伝子（アディポサイトカイン）が放出されることになるのです。その一つが糖尿病です。

糖尿病はいろいろと誤解されている病気です。たとえば「糖尿病は遺伝する」という風説。これは明らかに間違っています。糖尿病が強く疑われる人（八九〇万人）や可能性を否定できない「予備群」（一三二〇

(2) 永井成美、坂根直樹、西田美奈子、森谷敏夫「若年女性の正常体重肥満を形成しやすい遺伝的、生理学的要因の検討」『肥満研究』二〇〇六年、一一二（二）、一四七—一五一頁。
(3) 森谷敏夫『メタボにならない脳のつくり方』扶桑社、二〇〇八年。

万人)、合わせて二二一〇万人と推計されることが、厚生労働省の「二〇〇七年国民健康・栄養調査」で分かっています。これは正確な記録が残っている一九五五年と比べて三〇倍以上の人数になります。糖尿病は感染する病気ではないので、罹患者が三〇倍以上になるのは遺伝だけでは到底説明が付きません。

一方、最近の流行は「糖質ゼロ」「糖質カット」を謳ったビールや飲料です。糖質は脳の唯一のエネルギーなのに、何故、「糖質ゼロ」「糖質カット」と騒ぎ立てるのでしょうか。それは、糖尿病は糖分の摂りすぎで起こる病気だと勘違いしているからです。戦後に比べお米の消費量は半分にまで激減し、砂糖の消費量も大幅に減った今、なぜ糖尿病が三〇倍以上になるのでしょうか。糖質の摂りすぎで糖尿病が起こるなら、昔の日本人は、みんな糖尿病に罹っていたはずで。

糖尿病の主な原因は運動不足なのです。運動不足と糖尿病とどうして関係しているかという、体内に摂取した糖質の七割が筋肉で消費されるからです。筋肉は大食漢で最も大量に糖質と脂肪を消費する(臓器)なのです。摂った糖質の残りの二割は脳で消費され、心臓とか腎臓とか他の臓器は摂取したすべての糖質のわずか一割を使っているにすぎないのです。Stuart et al.⁽⁴⁾のたった七日間のベッドレスト(完全休養)実験で、筋肉の糖取り込み能力やインスリン作用の低下が劇的に起こることが実験的に証明されました。世界で最も健康管理ができていたNASAの宇宙飛行士が、

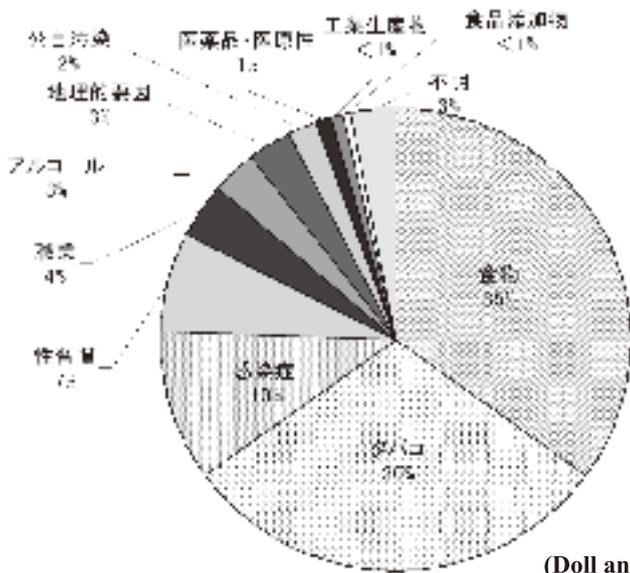
二週間の無重力飛行で超運動不足を強いられて地球に帰還すれば、糖尿病患者よりも血糖コントロールが悪くなっているのは容易に理解できるでしょう。

筋肉でしっかりエネルギーを消費していればインスリンとは独立した生理的メカニズムで糖は代謝されるのです。つまり、良く運動していれば、すい臓に負担がかからないようになっているのです。本来はとても効率のいい代謝なのですが、運動不足で筋肉がナマクラーになってくると、すい臓は一生懸命インスリンを出して、筋肉での糖代謝を促進しようとするのです。その結果、すい臓は衰弱していく一方で、坂を転がるように糖尿病へと突入していくのです。

最近の日本人は老若男女を問わず、運動不足で筋肉をあまり使わなくなり、その結果、筋肉の糖代謝に必要な運搬車(糖輸送担体(GLUT4))や脂肪燃焼に必要な脂質代謝関連酵素の働きが極端に低下し、肥満とともに糖尿病を発症するようになってきたのです。決して糖質の取りすぎで糖尿病が起こっているのではないのです。

癌は遺伝か？

ハワイに移住した日本人の癌の調査では、



(Doll and Peto, 1981)

図3 ヒトの癌の原因⁽⁵⁾

日本人に多い胃癌が少なくなり、逆にアメリカ人に多い大腸癌が増加することが明らかにされています。欧米食に舌鼓を打ちながら過食ぎみの人々が目立ってきた日本でも、やはり大腸癌が多くなっています。癌に関してもある程度、生活習慣が重要な因子になっていることが英国のドール博士らによって明らかにされています。⁽⁵⁾

彼の一連の疫学的研究によれば、「ガン」の発生の約三五%は食生活により、約三〇%はタバコによる」という調査結果が得られているのです。実に癌の六割以上が口から入るわけですね。

(4) Stuart C.A., Shangraw R.E., Prince M.J. et al: Bed-rest-induced insulin resistance occurs primarily in muscle. *Metabolism* 1988; 37:802-806.

(5) Doll R. and Peto: The causes of cancer: quantitative estimates of avoidable risks of cancer in the United States today. *The Natl Cancer Inst* 1981; 66: 1191-1308.

食生活の危険因子（アンバランスな栄養、変化のない食生活、過食、脂肪・食塩過多、ビタミン・食物繊維不足、など）を取り除き禁煙すれば、癌の六〇％近くは予防できる可能性が高いことになるわけです。

食物中の発癌物質の濃度はそれ程高くありませんが、毎日同じような食品を食べ続けずと体を癌の危険にさらすことになりません。食品群の中には、癌を引き起こす物質と抑制する物質があるので、偏食せず色々なものをバランス良く食べると栄養面だけでなく、発癌の危険を相殺してくれる事になります。これは、ビタミンA、C、Eには発癌物質の生産を妨げる働きがあることや、野菜に含まれる繊維質が腸内の発癌物質を薄め、体外に排泄する作用を持っているからです。

また過食や脂肪過多は乳癌や大腸癌、前立腺癌の原因の一つになっていますし、食塩の過多は胃癌を誘発するので注意が必要です。タバコや酒、その他の刺激の強い嗜好品を取らないモルモン教徒には癌の発生率が低いことは良く知られた事実です。

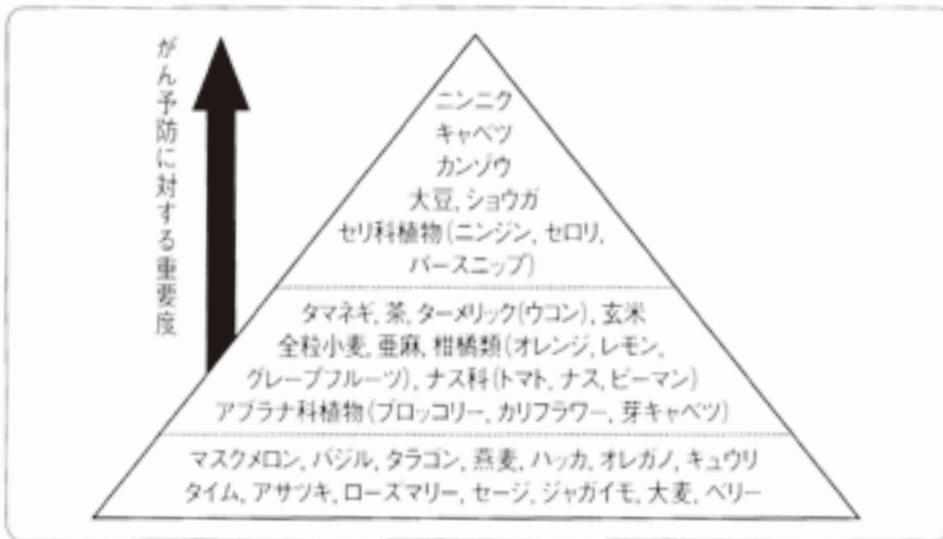
タバコの煙には多数の発癌物質や有害物質が含まれていますが、これらの物質は副煙流（タバコの火の付いている部分から立ち上がる青みを帯びた煙）のほうにより多量に含まれています。それゆえに喫煙者のそばにいと、非喫煙者もしばしば濃度の高い副煙流にさらされ、この「受動喫煙」が快適さと健康の両面から問題になって来るわけです。

まだ皆さんの記憶に真新しいと思います。フランス政府が公共の場での『禁煙条

例』を施行して、違反者には罰金を課すことになりましたが、国民の健康と福祉を考えると当然のことだと思えます。アメリカでは癌による死亡者が減ってきましたが、これは国を挙げての禁煙キャンペーンや癌を予防する可能性の高い食品の啓蒙が大きく関与しているのです。

図3に示したように癌に遺伝的な要因はほとんどないのですが、多くの人々は遺伝が関与していると勘違いしているのです。例えば、ヘビースモーカーの方と結婚された女性は、一緒に生活をする主人のタバコの副煙流で二倍近く癌に罹りやすくなります。生まれた子供の純粋無垢な肺は母親以上に長い間、タバコの害で肺が侵される羽目になるのは簡単に想像できることです。父親が愛煙家なら長男も小さいころから喫煙することにさほど抵抗感がなく、中学生になれば興味半分で家に散らばっている親父のタバコに手を出すのです。奇麗な肺は生まれた時から肺癌の脅威にさらされ、親父と同じくヘビースモーカー

に変身していくのです。歳月が流れ、親父は予想通り肺癌で死に、その後長男も肺癌で死亡。周りに住んでいる人々は口を揃えて「やっぱりあの家は肺癌の家系や」「遺伝や」と騒ぐのです。癌は遺伝ではなくて、生活習慣病なのです。親父の悪しき生活習慣が遺伝したのです。



米国デザイナーフーズ計画（1990）でがん予防に有効と評価された食素材

大東 肇「栄養とがん：第2章」2009

図4 癌の予防に有効な食素材⁽⁶⁾

(6) 大東肇「第二章 食によるがん予防」矢ヶ崎らと共著『栄養とがん』建帛社、二〇〇九年、三二―五四頁。

源平合戦をめぐる虚実

歴史学と史料批判

元木泰雄 | YASUO MOTOKI



元木泰雄（もとぎ やすお）
一九五四年、兵庫県生まれ。一九八三年京都大学大学院文学研究科指導認定退学、一九九五年博士（文学）。大手前女子大学文学部助教授、京都大学総合人間学部助教授、大学院人間・環境学研究所助教授を経て二〇〇四年より現職。中世前期の政治史を専攻する。おもな著書に『院政期政治史研究』(思文閣出版)、『平清盛の闘い』(角川書店)、『源満仲・頼朝』(ミネルヴァ書房)、『源義経』(吉川弘文館)等がある。

はじめに

「講釈師、見てきたような嘘をつき」。有名な諺である。講談で取り上げられる英雄豪傑の活躍を、講釈師はあたかも見てきたことのごとく、まことしやかに語りかける。それによって観客は歴史の場面に遭遇したかのように思い、興奮することになる。だがしかし、その大半は空想による虚構や、事実とかけ離れた誇張であったことをいう。なにも史実を虚構や誇張で歪曲するのは講釈師ばかりではない。こうしたことは、高名な合戦を描いた軍記物語や、政治権力によって編纂された歴史書などにも多く見受けられ、史実であるかのごとく定着しているものが少なくない。近年の研究では、周知の源平合戦の名場面の多くも、実は虚構の所産とみなされているのである。

ここでは、『平家物語』で有名な一ノ谷合戦と、鎌倉幕府の公式歴史書『吾妻鏡』⁽¹⁾によって作り上げられた源義経像を素材として、歴史における虚構と真実について、ふれることにしたい。

一 一ノ谷合戦の名場面

1 熊谷直実と平敦盛⁽²⁾

源平合戦の中でも数々の逸話を残すのが、一ノ谷合戦である。これは寿永三年（一一八四）二月七日、いったん都落ちしながら再度の上洛を目指した平氏を、源頼朝の弟で代官として上洛していた範頼⁽³⁾と義経が迎え撃った戦いである。合戦は源氏の圧勝となり、平氏は多くの戦死者を出して屋島に敗走する。『平家物語』に描かれた、一ノ谷合戦にまつわる逸話の真実と虚構を検討してみることにはしたい。

最初に平清盛の甥敦盛と、彼を討った東国武士熊谷直実に関する挿話を取上げる。『平家物語』によると、敦

盛は敗走の途中、源氏方の直実に呼び止められ応戦する

も、たちまちに組伏せられる。いざ首を討とうとして相手がまだうら若い美少年と知った直実は、気の毒に思っ

て逃がそうとする。しかし、すでに周囲は源氏方が取り囲む。やむを得ず首をとった直実は、「あはれ、

弓矢をとる身ほど口惜しかりけるものなし」と武者の悲しい宿命を悟り、「それよりして発心」して法然のもとで出家を遂げたとする。

情けある老練の武者直実と、美少年敦盛とをめぐる名高い逸話である。しかし、事実は異なっていた。『吾妻鏡』の建久三年（一一九二）十一月二五日条によると、直実は一族の久下権守直光⁽⁴⁾との境界をめぐる、頼朝御前の裁判で敗訴したことに激怒し、自ら鬻を切って上洛してしまったというのである。『平家物語』の描く出家の動機とは大きくかけ離れた話になってしまふ。

一方の敦盛は、『平家物語』に「年十六、七なるが、薄化粧してかね黒なり」とか、無官の大夫などと記され、少年の面影を残



敦盛塚
一ノ谷合戦で討死した平敦盛を供養するために建立されたという伝承をもつ五輪塔。中世後期の作品。

(1)『吾妻鏡』鎌倉時代末期に編み込まれた鎌倉幕府の公式歴史書。治承四年の以仁王挙兵から、文永三年の宗尊親王の掃落までを記す。幕府成立を知る基本史料だが、北条氏による曲筆などもあり、史料批判が必要である。
(2)熊谷直実（？―一一二〇）。鎌倉幕府の御家人。武蔵国熊谷郷を本拠とする。源平合戦で活躍、のちに法然のもとで出家し、蓮生を名乗った。
(3)平敦盛（一一六九？―一一八四）。平家の武将。父は清盛の弟経盛。笛の名手として知られた。
(4)久下権守直光（？―一一二〇）。鎌倉幕府の御家人。武蔵国熊谷郷を本拠とする。源平合戦で活躍、のちに法然のもとで出家し、蓮生を名乗った。



逆落しの舞台
背後の山より一ノ谷を見下ろした風景。義経はこの崖を駆け降りたとされる。

す、いかにも公家風の優雅な武将として描かれている。しかし、実は一ノ谷合戦より十年前の承安四年（一一七四）正月に若狭守に就任していたことが、権中納言藤原忠親の日記『山槐記』に記されている。公家の日記は子孫に対する政務・儀式の教科書という性格をもち、記述の信憑性は高い。六、七歳で国守になる例も皆無ではないが、平氏でも傍流に過ぎない敦盛では考え難く、一ノ谷合戦当時十六、七歳よりも上であったとみられる。また前若狭守という肩書を隠して無官としたのは、いかにも元服直後の若者であることを強調するための虚構である。

このように、『平家物語』より信憑性の高い古記録から判断すると、敦盛がうら若い美少年であったとは考え難いし、彼を討つたことで直実が出家を思い立ったということも、俄に信じることはできないので

ある。こうした史実の歪曲の背景には、源平の戦いを美化し、平氏の滅亡の哀れさを強調する『平家物語』の性格が存在していたと考えられる。

2 鴨越の逆（坂）落し

同じ一ノ谷合戦で最も名高い場面は、両軍譲らぬ合戦の帰趨を決した源義経の「鴨越の逆落とし」である。『平家物語』によると、義経は三千騎の精兵を率いて、平氏の一ノ谷の陣地を鴨越から急峻な断崖を駆け降りて奇襲し、源氏に勝利をもたらしたとされる。

しかし、この有名な逸話にも、幾つもの虚構がある。まず軍勢について、『平家物語』は大手の範頼軍五万騎、搦手の義経軍一万騎とし、その中から三千騎を率いて奇襲を行ったとする。しかし、信憑性が高い右大臣藤原（九条）兼実の日記『玉葉』の寿永三年二月六日条によると「官軍（源氏軍）僅かに二、三千騎と云々」とあって、総勢六万騎とする『平家物語』が誇張であったことがわかる。一方、義経が駆け降りたとされる鴨越は現在の神戸市兵庫区で、平氏の本拠福原の北西にあたる。これに対し、一ノ谷は神戸市須磨区で、神戸市街地の西端にあり、鴨越と一ノ谷の場所も大きくかけ離れているのである。こうしたことから、義経の活躍や逆落し自体を虚構とする説も有力になっている。

ここで注目されるのが、やはり『玉葉』の記述である。合戦の翌日にあたる二月八日条に兼実が記した合戦の報告によると、義経が一ノ谷を攻略したのに対し、範頼は

福原に攻め寄せ、最初に「山手」を陥落させたのは多田源氏の行綱であった。この山手こそが、鴨越を指すと見られるので、鴨越の攻略は行綱の功績だったことになる。では、なぜこのような虚構が生まれたのであろうか。『平家物語』では、天才義経と凡庸な兄範頼、冷静・賢明な兄平重盛と無能・臆病な弟宗盛というように、史実を離れてある人物の個性・役割を際立たせる例が多くみられる。この行綱は、後白河院や院近臣たちの平氏打倒の陰謀を清盛に密告して、鹿ヶ谷事件の発端を作ったり、次々と主君を裏切ったりする怯懦な「悪役」に位置づけられていたのである。これ

に対し義経は、平氏を滅亡に追い込む天才的な軍略家として描かれていた。このため、行綱の功績が否定されるとともに、義経に吸収されることになったと考えられる。この結果、一ノ谷を陥落させた義経が鴨越から突入したという、地理的にあり得ない挿話が創出されたのである。

以上、『平家物語』という軍記物語について、その書物の性格と信憑性の高い古記録との対比を通して、人口に膾炙する合戦譚の虚構と真実をみてきた。次に、その生涯自体が虚実皮膜の様相を呈する源義経について検討を加えることにしたい。

二 源義経の虚構と真実

1 義経像の形成

源義経といえは、演劇の世界では美男の代表とされる。こうした義経像が定着するのは室町時代の『義経記』以降のことであ

(4) 藤原忠親（一一三二—九五）。平安末期の公卿。摂関家の傍流に属す。儀式に携じ、平氏、後白河院、さらに鎌倉幕府にも重用され、内大臣にいたる。中山家の祖。『山槐記』の山は中山、槐は大匠の中国名によるもの。

(5) 藤原（九条）兼実（一一四九—一二〇七）。摂政。関白をつとめた忠通の三男。五摂家のうち、九条・二条・一条家の祖。平氏、後白河院とは距離を置き、源頼朝に接近。その支援を受けて摂政に就任。『玉葉』は源平争乱期の基本史料。

(6) 源（多田）行綱（生没年未詳）。摂津国多田荘を拠点とする武将。摂津源氏の嫡流、頼光の子孫。鹿ヶ谷事件で謀議を清盛に密告したとされる。その後、平氏が没落すると木曾義仲と、ついで義経と結ぶが、頼朝により多田荘を奪取された。

る。これに対し、『平家物語』には、「色白う、せいちいさきが、むかばのことにさし出でてしるかんなるぞ」とあつて、色白で小柄、前歯が著しく出て目立っている人物と描かれている。むしろ美男子とは言いがたい容貌である。

時代的にみて『平家物語』の方がより実像に近いと思われるが、ここにも義経を精悍で野性的な軍事の天才と描く同書の構想が影響している可能性がある。すなわち、前歯は武器にもなりうるわけで、歯が巨大であることは猛将の象徴とされた例もある（『吾妻鏡』養和元年閏二月十五日条）。したがって、前歯が顕著に出ているとするのは、異様な顔立ちとして貶めるといふわけではなく、むしろ精悍さや猛々しさを示す表現といえる。

このように『平家物語』は必ずしも義経を悲劇的武将として同情の対象としていない。とくに、古態を伝える延慶本等は、兄頼朝との対立の原因も、むしろ義経の野心や驕慢さに求めている。また、先述の一人谷合戦における逆落しのように、同書は軍事の天才としての義経像を著しく増幅している面がある。実際に平氏追討に活躍したのは、先述の多田行綱や西国の武士たちであり、義経はむしろこうした武力を組織することに才能を示した武将であった。

これに対し、同情すべき義経像を形成したのは、鎌倉幕府の公式歴史書『吾妻鏡』である。同書が引用した『腰越状』⁽⁷⁾には、義経が幼くして父を討たれて苦しい少年時代を送ったことが強調されている。さらに『吾妻鏡』は、義経が兄頼朝を助けて平氏

を滅亡に追い込みながら、後白河院から強引に官職を与えられたために頼朝との関係が悪化し、腹心梶原景時の讒言⁽⁸⁾を信じた頼朝の相次ぐ抑圧で追い詰められ、ついに挙兵・滅亡を余儀なくされたとする。

『吾妻鏡』が描く義経像には、苦難の末に兄を助けて活躍しながら、謀略や讒言、冷酷な兄の仕打ちによって滅亡に追い込まれるという、「判官鼻眞⁽⁹⁾」の素地となる要素が出そろっていたといえよう。こうした義経像はどこまでが真実なのであろうか。

2 『吾妻鏡』の義経像

『吾妻鏡』が、頼朝と義経の対立の発端とするのは、元暦元年（一一八四）八月、義経が頼朝に無断で後白河院より検非違使・左衛門尉に補任されたことである。この任官に怒った頼朝は「およそ御意に背かゝること今度に限らざるか。これにより平家追討使たるべきこと、しばらくご猶予あり」とあつて、義経を平氏追討から外し、以後両者の関係は悪化したとする。また、この出来事は、王朝勢力を代表する後白河の謀略であり、それに絡め取られる義経の政治的無能を示すとされる。

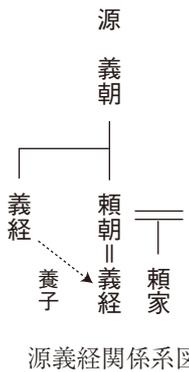
しかし、これは明らかな虚構、誤解である。最初の任官以後、義経は五位への昇進、内昇殿と再三昇進を繰り返すが、頼朝はそれらを制止してはいないばかりか、検非違使任官の祝宴に頼朝の腹心大江広元の代官が協力しているのである（『大夫尉義経畏申記』⁽¹⁰⁾）。こうしてみると、義経の任官は頼朝の推挙によるものと考えざるをえない。また、義経が平氏追討から外された

理由は、直前に伊賀や伊勢で平氏の残党が大規模な蜂起⁽¹¹⁾を行い、その首謀者の追捕を担当することになったためである。京に留まった義経は、後白河と頼朝との仲介という重大な任務を担当しているが、もし後白河による官職補任が問題となっていたら、これはあり得ないことである。

さらに、壇ノ浦合戦後、軍目付として義経に随行していた梶原景時⁽¹²⁾から、義経の行動は「自尊」（自分勝手）であり、兄頼朝を蔑ろにしているという報告があり、頼朝と義経の関係は決定的な破局を迎えたとされる（『吾妻鏡』文治元年四月二十日条）。しかし、同書の二月十四日条によると、景時は義経ではなく頼朝と行動を共にしていた事がわかり、景時の「讒言」は存在自体が疑わしいことになる。

さらに『吾妻鏡』によると、頼朝は壇ノ浦合戦後に平氏の捕虜を率いた義経を鎌倉に入れず、腰越に止めた。ここで「腰越状」を作成し、兄に嘆願したにも係わらず対面を拒否された義経は、六月はじめ、「頼朝に不満をもつ者は自分に従え」と捨てぜりふを残して帰京したという。この時点で両者の関係は破綻したことになる。しかし、『玉葉』の文治元年十月十七日条によると、頼朝に追い詰められて挙兵した義

北条時政 — 政子



源義経関係系図

(7)『腰越状』元暦二年（一一八五）五月、平氏を滅ぼし捕虜とともに鎌倉に下った義経は頼朝の怒りに触れ、鎌倉の手前の腰越で留められた。このとき頼朝の腹心大江広元に宛て窮状を訴えた書状。古来名文の見本とされるが、偽作の可能性が高い。

(8)『大夫尉源義経畏申記』。編者不明。『群書類従』所収。治承三年（一一七九）以降の検非違使に関する雑文集。その中に義経の畏申記を含むことからこの題名となった。大江広元の代官が奉仕したことについては、菱沼一憲『源義経の合戦と戦略』（角川書店、二〇〇五）参照。

(9)伊賀・伊勢の平氏残党の蜂起。元暦元年六月、両国に居住していた平氏の家人平家継、藤原忠清らが大規模な蜂起を行い、源氏側の大將軍佐々木秀能を打ち取るに至った。大内惟義らに鎮圧されたが、残党は潜伏し朝廷に大きな脅威を与えた。

(10)梶原景時（？—一二〇〇）。相模の武士。石橋山合戦の際に頼朝を救った事から腹心となり、御家人を統制する侍所の次官所司となる。御家人統制に活躍し、義経を讒言したことが『吾妻鏡』『平家物語』に見える。頼朝没後、御家人の恨みを買って滅亡した。

経は、その理由として、八月に恩賞として受領に任じられた伊予国の支配を妨害されたこと、いったん与えられた平氏没官領^{もっかんりょう}を六月に没収されたこと、そしてこの直前に刺客が派遣されたことを挙げている。すなわち、頼朝との対立は、恩賞をめぐる激化したのであり、任官問題や鎌倉での冷遇は関係していないのである。

詳細は旧稿（拙著『源義経』吉川弘文館、二〇〇七年）に譲るが、義経と頼朝との対立の根本的な原因は、壇ノ浦合戦後、義経が京において後白河院に重く用いられたために、幕府の分裂や、後継者をめぐって頼朝の幼い長男頼家を脅かす可能性が生じたことにある。そこで頼朝は、義経を在京を必要としない伊予守に任命して、後白河のもとから鎌倉に召還しようとした。これに義経と後白河が反発し強引に在京を継続したことが、最終的な破綻をもたらしたのである。したがって、任官をめぐる対立や、鎌倉入りの禁止といった頼朝のことさらな抑圧を重視せず、義経の野心を衝突の原因とした延慶本『平家物語』の方が、『吾妻鏡』より事実に近いといえよう。

『吾妻鏡』が強引な曲筆を行った背景には、二つの意図が推測される。一つは同書を編纂した北条氏が、源氏将軍が三代で断絶した遠因を、弟義経に冷淡であった頼朝の性格と結び付けようとしたこと。そして、もう一つの意図は、あくまでも推測の域に留まるものではあるが、北条氏の祖で頼家の外祖父でもあった時政が、義経追落とりに関与したことを隠蔽しようとするにであったのではないだろうか。

むすび 史料批判と歴史学

以上のように、歴史学の素材となる史料には、様々な虚構が含まれている。こうした虚構の陥穽^{かんせつ}を回避するためには、より信憑性の高い他の史料との対比が不可欠となる。一般的には、文学作品よりは編纂史料、そして編纂史料よりは同時代に記された日記が、信憑性の面で上回っていると考えられている。

このようなことから、近年は軍記物語を文学作品と考えて、史料として一切用いないといった極端な立場をとる学者も存在する。とはいえ、軍記物語には他の史料に見られない独自の記述もある。そればかりか、先述のように、軍記物語が編纂史料より、真実に近い場合もあったのである。作品の性格を分析した上で、その記述内容の真偽を検討し、史料として利用する必要があると考えられる。

『吾妻鏡』については、信憑性に問題があると考えながらも、逆に無批判に史料として用いる学者もある。むしろ先述した鎌倉における直実の裁判などは、事実と考えられている。『吾妻鏡』が幕府の公的な日記をもとに作成されていることから、鎌倉での政務は信憑性が高いと見られるためである。これに対し、鎌倉以外に関する記述は虚構・誤解を免れないし、鎌倉における事件でも明白な政治的意図による改変も見出される。したがって、『吾妻鏡』の虚実は、北条氏が幕府の実権を掌握してから作成されたという政治的性格、記事の内容な

どから総合的に判断する必要があるといえる。

こうした史料批判は、情報をめぐる分析という問題につながるものであり、歴史学の今日的な役割の一つということもできるだろう。

参考文献

上横手雅敬『平家物語の虚構と真実』上・下（塙書房、一九八五年）。
元木泰雄『源義経』（吉川弘文館、二〇〇七年）。

イマジナリーキューブ

立木 秀樹 | HIDEKI TSUKI



立木秀樹（ついき ひでき）
一九六三年、奈良県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。京都大学大学院理学研究科博士後期課程中途退学。京都大学数理解析研究所助手、慶應義塾大学環境情報学部助手、京都産業大学理学部助教、京都大学総合人間学部助教を経て現在に至る。専門は理論計算幾何学。計算と関係した数学的構造に関する研究の傍ら、イマジナリーキューブを中心に、楽しめる数学を構築中。

1 イマジナリーキューブ

次の問題を考えてみてください。

上から見ても、横から見ても、手前から見ても正方形に見える立体は何でしょうか？

立方体は一つの答えです。しかし、立方体だけが唯一の答えではありません。立方体の頂点の周りを少しだけ削ってもこの性質を満たしていることは明らかですし、四面体もこの性質を満たしています(図1)。直交した三方向から見て、立方体と同じ様に正方形に見える立体のことを、イマジナリーキューブと名付けることにします。図2に、代表的なイマジナリーキューブを

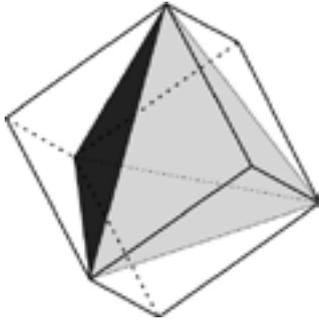


図1 正四面体は、立方体の頂点を1つおきに取り出すことができます。よって、立方体の面方向から見た時、正四面体は正方形に見えます。

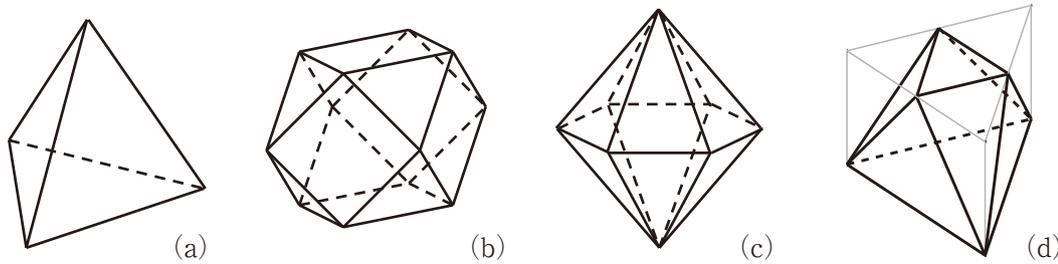


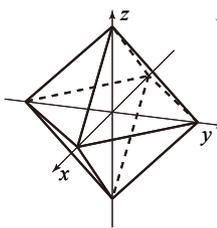
図2 イマジナリーキューブの例
(a) 正四面体。(b) 立方八面体。(c) 底辺：高さ = 2 : 3の二等辺三角形の面を12個もつ重六角錐。
(d) 辺：高さ = 4 : $\sqrt{6}$ の正三角錐の片方の底面の各頂点の周りを切ってきた反三角錐台。

あげました。正方形に見える方向は、分か
りますか？

直交した三方向から見て正方形に見える立体には、正八面体や菱形十二面体もあります。しかし、これらの場合は正方形の傾きが立方体の場合と異なります。(2)ここでは、立方体と同じ様に、直交した三方向のそれぞれから見ると、残り二方向と平行な辺を持つ正方形に見える立体だけをイマジナリーキューブと呼ぶことにします。さて、イマジナリーキューブは幾つあるでしょうか。

2 極小凸イマジナリーキューブ

もちろん、イマジナリーキューブは無数に存在します。そこで、その中で本質的なものだけを取り出して考えましょう。一つイマジナリーキューブがあれば、その一つの面を多少へこましてもイマジナリーキューブになります。よって、へこみが無い、すなわち、凸なイマジナリーキューブだけを考えることにします。また、一つイマジナリーキューブがあれば、その三つの正方形の影と同じ影をもつ立方体が存在しますが、その立方体からはみ出ない程度に立方体をふくらませてもイマジナリーキューブになります。よって、他の凸イマジナ



(1) 総合人間学部四回生の寺山慧君の命名です。
(2)

正八面体は、三つの座標軸上で原点から同じ距離の六点を頂点にすることによって得られ、頂点の方向から正方形を見えます。これらの正方形を底面とする三つの角柱の交わりをとると、菱形十二面体と呼ばれる立体になります。

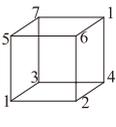
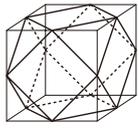
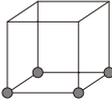
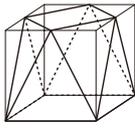
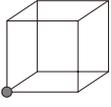
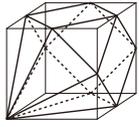
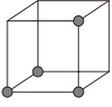
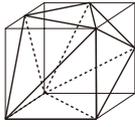
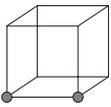
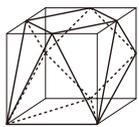
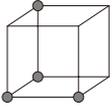
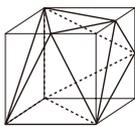
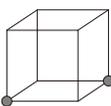
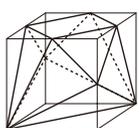
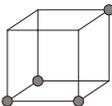
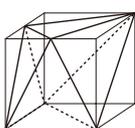
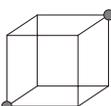
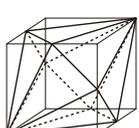
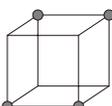
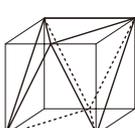
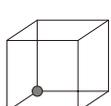
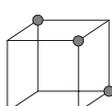
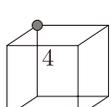
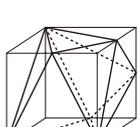
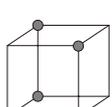
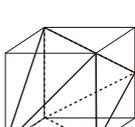
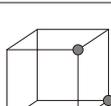
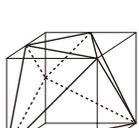
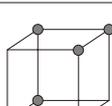
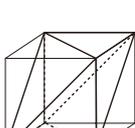
No. (面の数, 頂点の数)	立方体の 頂点集合	イマジナリー キューブ			
1 (14,12) 立方八面体	 {}		9 (10,8) 反四角錐台	 {1, 2, 3, 4}	
2 (13,10)	 {1}		10(L) (10,7)	 {1, 2, 3, 6}	
3 (12,9)	 {1, 2}		10(R) (10,7)	 {1, 2, 3, 7}	
4 (11,8)	 {1, 4}		11 (8,6)	 {1, 2, 3, 8}	
5 (12,8) 重六角錐	 {1, 8}		12 (8,6)	 {1, 2, 7, 8}	
6 (11,8)	 {1, 2, 3}		13 (4,4) 正四面体	 {1, 4, 6, 7}	
7 (10,7)	 {1, 2, 7}		14 (8,6)	 {1, 2, 3, 6, 7}	
8 (8,6) 反三角錐台	 {1, 4, 6}		15 (8,6) 反三角柱	 {1, 2, 3, 6, 7, 8}	

表1 16種類の極小凸イマジナリーキューブ

リーキューブをふくらませてきた立体ではないものだけ、すなわち、与えられた立方体と同じ影をもつ凸イマジナリーキューブの中で、極小なものだけを考えることにします。極小凸イマジナリーキューブは、

立方体を平らな刃物で削っていった、これ以上削いたらイマジナリーキューブでなくなってしまうというぎりぎりの立体と言いつ換えることもできます。

極小凸イマジナリーキューブは多面体に

なることが分かります。よって、正方形に見える時には、正方形を多角形の集まりに分割した図形に見えます。そこで、六方向どちらからもこの分割が同様である(つまり、何枚の何角形がどうつながっているか

という状態が同じである)ものは、同種と見なすことにしましょう。さて、そのようにした時、極小凸イマジナリーキューブは何種類あるでしょうか？

極小凸イマジナリーキューブは表1の五種類存在します。その中の一つ (No.10) は、面対称でないので、鏡像を区別すると、一六種類ということになります。

このことの証明は、比較的簡単です。頂点を決めたら多面体は決まるので、頂点の配置だけを考えます。また、イマジナリーキューブを囲む立方体Cを固定して考えます。すると、ある凸多面体がCのイマジナリーキューブであることと、Cの一二個の辺全ての上に頂点が存在することとは同じことです。また、ある辺上に二個頂点があつて、片方がCの頂点でない時には、その頂点を除いてもCの全ての辺上に頂点があるので、極小ではありません。よつて、Cの辺の両端以外に頂点がある時には、それ以外にその辺上に頂点がないことが分かります。つまり、Cの八つの頂点の中で、どの頂点がイマジナリーキューブの頂点になるかを決めれば、そこで選ばれた頂点を含まないCの辺の両端以外に一つ頂点をとることに、凸イマジナリーキューブができ、それは、Cの辺上のどこに頂点をとるかによらず同じ種類に属することになります。ただし、Cの頂点の集まりの中に、ある頂点とその隣の三つの頂点が全て含まれていれば、真ん中の頂点を除いたものも凸イマジナリーキューブになってしまい、極小性に反します。一方、そのような組み合わせを含まない集まりに対応して、異なる

種類の極小凸イマジナリーキューブができることが分かります。これにより、極小凸イマジナリーキューブの代わりに、この条件を満たす立方体の頂点の選び方を考えればよいことになり、それを数え上げたのが表1です。この表では、各種類のイマジナリーキューブは、Cの辺の midpoint を辺上の頂点として採用しています³⁾。

立体という具体的な形のあるもの(実)に関する性質が、頂点の組み合わせという抽象概念(虚)を通して分かることに注意して下さい。これは、数学の本質です。

3 イマジナリーキューブを用いた教育

これまで、表1の一六個のイマジナリーキューブを用いたワークショップを、出前授業やジュニアキャンパスなどで行ってきました。小学生から大学生までの対象に合わせて、イマジナリーキューブを題材に、工作の面白さ、オイラーの定理、図形の対称性と美しさの関係、組み合わせ的な数え上げ、フラクタル、さらには、立体の対称群まで、いろいろな話をしてきました。面白いことに、イマジナリーキューブが目前に置かれても、普通の人は、それが三方向から見て正方形に見えるということに気がつきません。一六個を目の前にして、それらに共通する性質を見つけてみようと言われても、まず無理です。しかし、透明な立方体の箱を作ってそれに入れると、そのことが一目瞭然になります。この箱に入れること自体が、意外と難しいパズルになります。三年前から、京都大学総合博物館の口

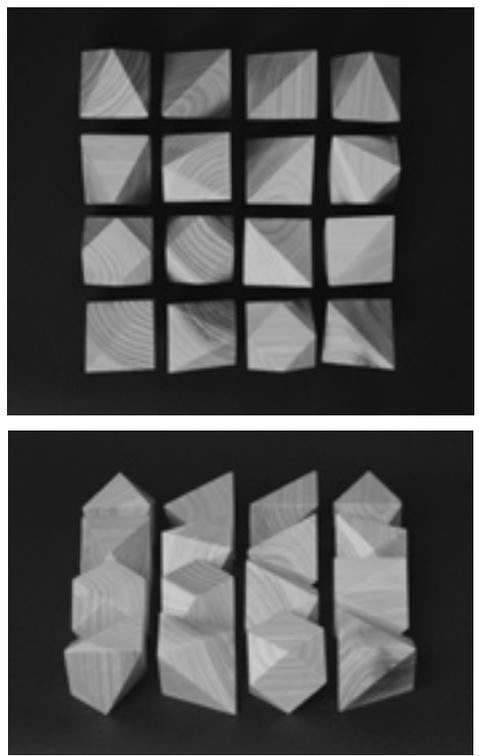


図3 木工による16種類のイマジナリーキューブ

ビーで、イマジナリーキューブを透明な箱に入れるパズル展示を行っています⁴⁾。また、多面体木工の専門家である、中川宏氏(積み木インテリアギャラリー「たち丸」)に、これら一六個の立体を木工で作ってもらいました。木の重みと質感があり、正確に作られていて、形の美しさが際立ちます。数学者としての仕事は表1の分類で終わりですが、実際に物を作り人々に触ってもらうことで、新たな価値が出てきます。

4 重六角錐と反三角錐台

この一六種類の中で、特に面白い立体を二つ紹介します。

図2(c)と表1 (No.5) は同じ立体で、六角錐を二つ底面で貼り合わせた十二面体(重六角錐)です。この立体は、一二個のどの面の方から見ても正方形に見えます。角柱、角錐以外に、反対方向も含めて一二個もの方向から正方形に見える立体がある



(3) 私のホームページ「3」で、一六種類全てのイマジナリーキューブの型紙を公開しています。
 (4) ある時、目の不自由な人が、論理的に考えながら、正四面体をいとも簡単に箱に入れたのに驚きました。目が見えると、視覚に頼ってしまいかえって形がとらえにくくなる気がします。
 (5) この形を八一個つなげた形を用いたオブジェ「フラクタル数独立体」を製作しました「1」。

ことに驚きませんか？

図2 (d) と表1 (No.8) も同じ形で
す。これは、図2が示すように、正三角柱
の三つの頂点を切り落としてできた立体で
す(反三角錐台)。この立体の相対する頂
点を結ぶ三つの線は一点で交わり、お互い
に直交しています。三つの座標軸の原点か
ら等距離の六点を選ぶと正八面体ができま
したが、この反三角錐台は、座標軸の正の
ところでは負の所の二倍の距離の所を選ん
でできた八面体でもあるのです。このこと
が、次章の造形に役立ちます。
実は、この二種類の立体で三次元空間の
充填が可能であるなど、この二種類の立体
の間に面白い関係があります[1]。

5 イマジナリーキューブ造形

表1の一六個のイマジナリーキューブを
上手につなげて、全体を一つのイマジナ
リーキューブにできないでしょうか。つま
り、直交する三方向から見た時に、それぞ
れの立体が正方形に見えますが、それら一
六個が四×四に並んで全体も正方形に見え
るようにできないでしょうか。

そう考えて作ったのが、図4のオブジェ
です。二年前、学生に手伝ってもらいな
がら紙で制作し、今年になってから、中川氏
の協力を得て、木工で制作しました。この
オブジェでは、立体の間にできた五つの空
間が、正八面体一つと反三角錐台四つに
なっています。詳細は述べませんが、こ
のことは、前章でのべた反三角錐台の性質
と深く関わっています。一般に、頂点だけ

でつながった立体の制作は容易ではありま
せん。しかし、この穴の形状が、この立体
の木工での制作を容易にしています。まず、
正八面体一個と反三角錐台四個の、辺だけ
からなるフレーム立体を用意します。そし
て、十六個のイマジナリーキューブをそれ
らに貼り付けていくだけでこの立体は完成
します。

このイマジナリーキューブを組み合わせ
たオブジェを大きな彫刻作品として制作し、
公園などの公的な場所に置ければ、新しい
価値を生み出せるのではないかと考えてい
ます。この立体は、全体的な配置に対称性
がありながら、一つ一つの構成要素の形が
異なり、どこかアンバランスなところに、
同じ形の繰り返しでは得られない深みが感
じられます。これを何度も見ているうちに、
ある方向から見て全体が正方形に見えるこ
とに気がつく人も出てくるでしょう。そう
して興味を持って見ると、正四面体や立方

八面体などの綺麗な形が含まれていること
が分かり、一つ一つの形をよく観察するよ
うになれば、それぞれの個性が分かってき
ます。この一六個の多面体に特別な意味が
あること、穴の形もきれいだであることなど
分かったと、自然に数学に対する興味も湧く
のではないのでしょうか。

本年七月に、数学と芸術に関する国際会
議(Bridges 2010)がハンガリーのピーチ
であり、イマジナリーキューブについて展
示、発表をしてみました[4]。二〇〇人
を超える参加者があり、様々な催しが並行
して行われる、盛大なものでした。

私は、数学には美しさで人の心を揺り動
かす力があると信じています。それは、形
を通して実物になった時、我々の感覚に直
接訴えてきます。このオブジェの展示場所
を私のホームページ[3]に載せておきま
すので、一度、ご覧いただければと思いま
す。

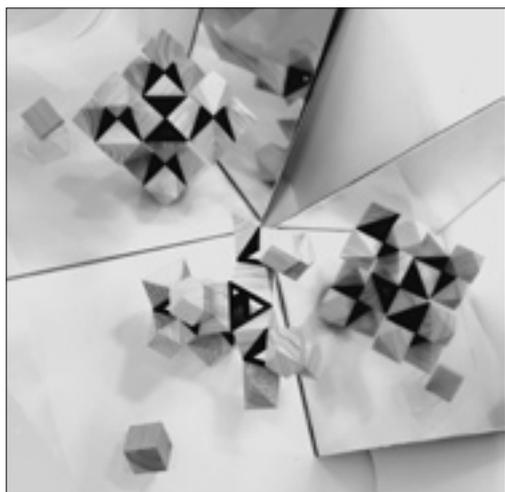
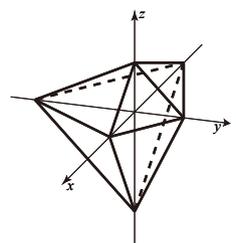


図4 Imaginary Cube Sculpture
後者は、2つの鏡を通して、正
方形の姿が見えている。

(6) 反三角錐台の頂点の配
置。



(7) 当時M1の名田元君と
学部一回生の寺山慧君。寺山
君には、一六個のイマジナ
リーキューブの型紙の制作も
手伝ってもらいました。
(8) この二種類の立体が、
座標軸上に頂点を持つ八面
体であること(注(2))と
(6) (参照)と深い関わりが
あります。

参考文献

[1] H. Tsuiki, Does it
Look Square? Hexagonal
Bipyramids, Triangular Anti-
prisms, and their Fractals,
Proceedings of Conference
Bridges Donostia,
Mathematical Connections in
Art, Music, and Science, pp.
277-286, 2007.
[2] H. Tsuiki, Imaginary
Cubes, Proceedings of
Conference Bridges, 2010.
[3] <http://www.ihkyoto-u.ac.jp/~tsuiki>
[4] <http://gallery.bridgesmathart.org/>

レトリックと虚・実の世界 ——言葉の創造性と主観性

山梨正明

MASAKI YAMANASHI



山梨正明（やまなし・まさあき）
一九四八年静岡県生まれ。一九七五年ミシガン大学大学院博士課程修了、Ph.D.（言語学）。京都大学大学院人間・環境学研究科（言語科学講座）教授。主要著書は『発話行為』（大修館書店、一九八六）、『比喩と理解』（東京大学出版会、一九八八）『推論と照応』くろしお出版、一九九二、『認知文法論（ひつじ書房、一九九五）』『認知言語学原理』くろしお出版、二〇〇〇、『ことはの認知空間』開拓社、二〇〇四、『認知構文論』大修館書店、二〇〇九）ほか。

1. はじめに

日常言語は、慣習に従って使われることにより、恒常的で安定した伝達を可能としている。しかし、その反面、日常言語の伝達は、私たちをきわめて常識的で固定した現実世界に安住させてしまう。日常的な感覚を越え、新たな真理を発見していくためには、言葉の慣習を越えるレトリックの視点が重要な役割を担う。

レトリックは、虚・実の問題を背景にして、現実世界を新たな視点から捉え直し、創造的な世界を構築していくための重要な認識の手段であり、科学の世界、学問の世界における知の探究の手段としても注目される。また、人間の思考活動、認知活動の巧妙さと複雑さを理解していくためにも、レトリックの問題は無視できない。

本稿では、レトリックの言葉の綾の中でも、特に虚・実の命題に基づくメタファー、アイロニー、ジョーク、嘘、等の発話行為にかかわる言語現象を具体的に分析しながら、真偽の発話のからくり、真偽の言葉の綾と真理の発見のメカニズムの関係を考察していく。

2. 日常言語のレトリックと真偽の判断

日常言語には、言葉の綾ないしは思考の綾としてのレトリックに基づく言語表現が広範に存在する。レトリックにかかわる言語表現の典型例としては、メタファー、メトニミー、アイロニー、トートロジー、等が考えられる。この種の表現は、日常言語の伝達における虚と実（あるいは真偽）の問題と言葉の創造性の問題を考えていく際に重要な知見を提供する。ここではまず前者の問題、すなわち日常言語の伝達における虚と実（あるいは真偽）の問題にかかわるメタファー、アイロニー、嘘の発話の例を考えてみよう。

1 a (メタファー)

P「君は水泳界のトビウオだ」

b (アイロニー)

P「彼は実にいい友達だ」

c (嘘の発話)

P「俺は絶対浮気はしていない」

表層レベルにおけるこれらの発話（P）の真偽の判断だけを問題にするならば、いずれの発話も偽である。まず、嘘の発話が

偽である点と言うまでもない。また、1 a のメタファーの場合、人間は魚ではない以上、カテゴリーミステイクを犯しており明らかに偽である。1 b のアイロニーの場合、話し手は、表層レベルの文字通りの意味と反対（ないしは対極）の意味（すなわち、彼は実にひどい友達だ）を意図しており、やはり偽である。

しかし、レトリックの観点（すなわち修辭的な機能の観点）からみた場合、メタファー、アイロニー、嘘の発話の修辭的な機能は2の発話意図に関して異なる。

2 (発話意図)

a (Pが偽であることを相手から隠す)

b (Pが偽であることを相手にも了解させる)

まず、嘘の発話（P）の場合には、2 a に示されるように、Pが偽であることを相手から隠すことを意図している。これに対し、メタファーとアイロニーの発話の場合には、Pが偽であることを相手に理解させることが意図されている。メタファーの場合には、Pの発話があえてカテゴリーミステイクを犯した偽の発話であることを背景

にして、喩えとしての比喩的な叙述の意味（*as if* 「君は水中を飛ぶように泳ぐ」）が推測されることになる。また、アイロニーの場合には、表面的には真であるように見える問題の発話Pが偽であることの了解を紹介して、皮肉の意味（Pの反対ないしは対極の意味「彼は実にひどい友達だ」）が推測されることになる。

では、一見したところアイロニーの発話と同じ機能を示すようにみえる（*as if* すり）の発話はどうか。一例として、ある人物がおしゃれな服を着て現れたのを見て、友人が次のような発話をした状況を考えてみよう。

3 (あてこすり)

P 「いやにいい服着てるね」

この発話は、一見したところアイロニーの発話のようにみえるが、実際には、Pの真偽に関して異なる。ここで問題にしている状況では、Pは文字通り真である。もし、問題の人物が、みすばらしい服を着て現れた場合に3の発話をするならば明らかにアイロニーの発話となるが、この状況では、ある人物が明らかにおしゃれな服を着て現れたのを文字通りに叙述している以上真である。この種の発話の修辭的な機能は、むしろ話し手がこのPが真である事実は認めが、この事実を素直に認めたくないために茶化している点にあると言える。

3. 偽の発話の修辭的複合性と推論

以上にみた修辭的な発話は、真偽に関する発話意図は本質的に異なるが、いずれの発話の命題（P）も真ないしは偽のいずれかに解釈される発話である。しかし、日常言語の修辭的な発話のなかには、その発話意図がさらに複雑で、真偽の解釈の複合的な変換のプロセスを計算しないかぎり、意図されている意味が解釈できない表現が存在する。その典型例は、次の発話にみられる（山梨 2004: 94）。

1 君は我が社の宝物だ！

この発話は、一見したところ、2のbに示されるようなメタファーとして解釈することができるとができる。

2 a 君は我が社の宝物だ！

b 君は我が社にとって貴重な存在だ！

しかし、1の発話は、文脈によっては、2のbのメタファーの意味に解釈がとどまるのではなく、3に示されるように、このメタファーの意味を介し、さらにアイロニーの意味を伝える発話として解釈することも可能である（Yamanashi 1998: 272）。

3 a 君は我が社の宝物だ！

b 君は我が社にとって貴重な存在だ！

c 君は我が社には不要な存在だ！

すなわち、文脈によっては、1の発話はメタファーの発話と解釈されるだけでなく、さらにこのメタファーの意味を偽の発話と

して理解し、メタファーの意味の反対の意味（すなわちアイロニーの意味）を伝える発話として解釈することも可能である。このメタファーとアイロニーがかかわる二段構えの意味の複合的な関係は、表1のAに示される。

表1のAは、1の発話の文字通りの意味からメタファーの意味が起動され、メタファーの意味から、さらにアイロニーの意味が起動されるプロセスを示している。意味の依存関係からみるならば、まずメタファーの意味の解釈は文字通りの意味に依存して起動され、アイロニーの意味はメタファーの意味に依存して起動されることを示している。この種の依存関係が存在するならば、表1のBの意味の依存関係も論理的には可能なはずである。すなわち、表1のAの順序とは逆に、まずアイロニーの意味の解釈が文字通りの意味によって起動され、次にこのアイロニーの意味によりメタファーの意味が起動されることも論理的には可能なはずである。しかし、日常言語の実際の用法をみるかぎり、表1のBの意味の複合的な展開のプロセスがかかわる修辭的な発話は存在しない。何故、この後者の意味の複合的な展開のプロセスがかかわる発話が存在しないかの説明は、今後の課題として残される。

4. 客観主義的な言語観の限界と真偽の問題

客観主義的な言語観では、一般に言語は外部世界の対象や事態を客観的に指示するものと考えられている。この言語観は、日

(表1)

(メタファーとアイロニーの意味の依存関係)

- A. (i) 文字通りの意味 --> (ii) メタファーの意味 --> (iii) アイロニーの意味
- B. (i) 文字通りの意味 --> (ii) アイロニーの意味 --> (iii) メタファーの意味

常生活の伝達の手段である言語は、客観的に構築された世界と対応するという前提に立っている。この客観主義の言語観は、さらに外部世界と対応する言語記号が、言葉の意味を客観的に指示することを前提としている。この言語観にしたがうならば、外部世界を叙述する次のような文の真理値は、真か偽かのいずれかに対応することになる。

- 1 a 富士山の山頂に雪が積もっている。
- b あのプロレスラーは禿げている。
- c 彼は新型インフルエンザにかかっている。

1の文は、いずれもある世界における事態を叙述する文であるが、これらの文は、もし問題の事態を正しく指示している場合には真であり、そうでない場合には偽であることになる。この場合、問題の文をPとするならば、表2に示されるように、Pが問題の事態を正しく指示している場合には真(T)であり、そうでない場合には偽(F)であることになる。また、逆に、Pが偽である場合には、Pの否定(¬P)が真(T)であることになる。(表2の「は、(否定) (not)」を意味する。)

この種の判断を前提とする客観主義の言語観は、文の真理値が真偽のいずれかであることを前提とする二値論理(two-valued logic)の言語観である。しかし、日常言語のなかには、二値論理の客観主義的な言語観では説明できない表現が広範に存在する。2の例をみてみよう。

- 2 a 現在の日本の大統領は禿げている。
- b 彼女は、今朝、一角獣とキスをした。

二値論理の客観主義的な言語観にしたがうならば、2のタイプの文に関しても真か偽の判断を下すことが可能はずである。しかし、この種の文を真ないしは偽と判断するためには、3に示される前提が成立していなければならない。換言するならば、2のタイプの文が真か偽かを判断するためには、3の前提が成立していなければならない。

- 3 a 前提「日本には大統領制が存在している」
- b 前提「現実世界には一角獣が存在する」

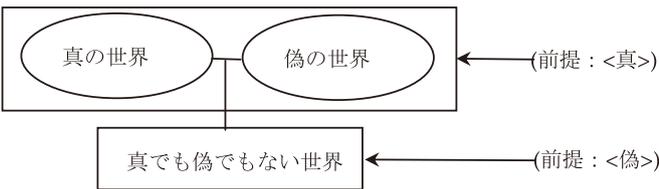
しかし、われわれが生活しているこの現実世界においては、3の前提は成立していない。現在の日本には、大統領制はしかれていない。また、一角獣は想像上の存在でありこの現実世界には存在していない。すなわち、この現実世界においては、3の前提は偽である。3の前提が偽である以上、2の文は、真であるとも偽であるとも判断することは不可能である。換言するならば、2の文に対し、真ないしは偽の判断を下すためには、3の前提が真でなければならぬ。基本的に、文の真理値と前提の真偽の関係は、図1に示される。

2のタイプの文は、二値論理の本質的な問題を示している。この種の文の論理性を適切に判断していくためには、表3に示さ

れる三値論理が必要となる。

表3のTは真(True)の値、Fは偽(False)の値、そして#は真でも偽でもない真理欠如値(φ)という第三の値を示すものとする。この三値論理の観点からみるならば、上記の2のタイプの文に対しては、真(T)でも偽(F)でもなく真理欠如値としてのφの値が与えられることになる。日常言語の世界には、さらに以上にみた二値論理や三値論理では律しきれない言葉の使用がみられる。次の例を考えてみよう。

- 4 a スズメは鳥である。
- b ニワトリは鳥である。
- c ペンギンは鳥である。



(図1)

一般に、4の例のスズメ、ニワトリ、ペンギンは、いずれも生物学的には鳥類のカテゴリーに入る存在である。したがって、この生物学の専門的な知識から判断するならば、4のa、cの文はいずれも真(T)であると言える。しかし、〈鳥らしさ〉の判断(例えば、羽が生えているか、空を飛ぶか、等の判断)からするならば、スズメは典型的な鳥として理解

(表3)

(i) T: (True)	(ii) F: (False)
(iii) #: (φ)	(注: #=[φ: 真(T)でも偽(F)でもない!])

(表4)

True/(1) : . . . T/(0.7) . . . T/(0.4) . . . T/(0.2) . . . : False/(0)
--

(表2)

P	~P
T	F
F	T

されるが、ニワトリからペンギンにいくにしたがって、〈鳥らしさ〉の真実性は低くなる。

ここで、文の判断が真である場合を数値の1とし、偽である場合を0とし、この真(1)と偽(0)の両極の間に相対的に表4のような1と0の間のフuzzyな値が付与されるとしてみよう(表4)。

このような相対的な真偽の規定からみるならば、表5に示されるように、4のa(「スズメは鳥である」)は1・0、b(「ニワトリは鳥である」)は例えば0・4、c(「ペンギンは鳥である」)は例えば0・2、というように、鳥の帰属性に関する文の真理値の判断が相対的に決められることになる。

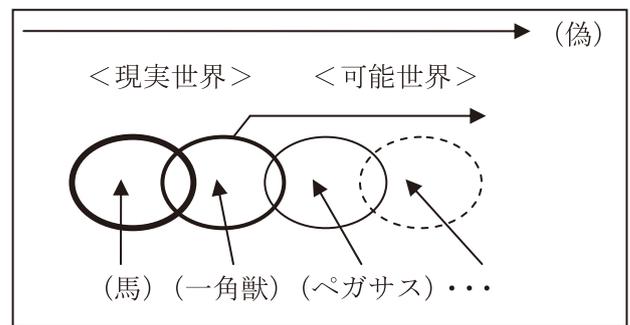
ここでは、とりあえず「ニワトリは鳥である」という文の真理値を0・4、「ペンギン」は0・2としているが、この種の値は便宜上の値であり絶対的な真理値の判断をしている訳ではない。この種の値は、〈鳥らしさ〉に関する4のa・cの文の真理値の相対的な違いを示すために便宜上与えられた値であり、人によりこの種の値の判断には当然ゆれが認められる。いずれにせよ、4のタイプの事例は、日常言語にける人間の真偽に関する判断は単純に真か偽かという二分法によって絶対的に決められるのではなく、相対的に決められることを意味する。この種の事実は、日常言語の論理の一部は、フuzzy論理(fuzzy logic)によって特徴づけられていることを示している。4の文は、いずれも現実世界の真偽の判断にかかわっている。しかし、日常言語に

は、現実世界だけでなく、可能世界(ないしは架空の世界)にかかわる表現も広範に存在する。次の例を考えてみよう。

- 5a 馬が野原で寝ている。
- b 一角獣が野原で寝ている。
- c ペガサスが野原で寝ている。

5の例の馬は現実世界に存在する動物であるが、一角獣やペガサスは可能世界(ないしは架空の世界)における想像上の動物である。この点からみて、5のa・cの文の真偽性の判断は相対的に異なる。馬は、現実世界に存在する動物であるから、5のaの文は状況によっては真であり得る。これに対し、一角獣やペガサスは現実世界には存在しない想像上の動物である以上、5のb、cの文は、これらの動物が存在すると仮定される可能世界のある状況を考えないかぎり真であり得ない。

また厳密には、5のbとcの文の真偽性の判断にも相対的な違いがみられる。一角獣は、馬の頭に一本の角が生えている想像上の動物であるが、この点を除くかぎり、馬と一角獣の間に基本的な違いは認められない。馬も一角獣も地上を移動する動物の一種であり、空を飛ぶ動物ではない。これに対しペガサスには翼があり、空を飛ぶ動物の一種として理解される。以上の一角獣とペガサスの違いを考えた場合、いずれも可能世界における想像上の動物ではあるが、現実世界における生物の条件からの逸脱度の点から虚構性の違いをみるならば、図2に示されるように、一角獣に比べ、ペガサ



(図2)

スの方が可能世界における虚構性が相対的に高いと言える。

馬に角があるか翼があるかの違いは、一見したところ、現実世界の生物の条件を一つずつ破っており、現実世界から同等に逸脱した可能世界を作っているようにみえる。しかし、実際には、これらの虚構の生物が前提とする可能世界と現実世界との逸脱の距離には相対的な違いが認められる。馬の頭に角がある一角獣のような哺乳類は現実には存在しないが、例えばサイのように頭に角のある哺乳類はこの世界には存在している。したがって、一角獣のような存在は、現実世界には存在しないとしてもそれほど違和感はない。突然変異や遺伝子異常などにより、現在の馬が身体的に変化しサイのように角を生やした馬が出現する世界はあ

(表5)

1. スズメは鳥である : [T/(1)]	>	...	2. ニワトリは鳥である : [T/(0.4)]	...	>
...			3. ペンギンは鳥である : [T/(0.2)]	>	...

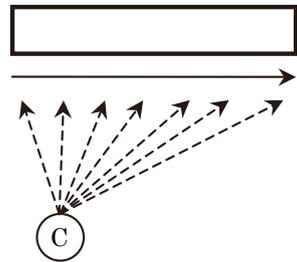
り得てもおかしくはない。これに対し、ペガサスのように翼をもった四足動物はこの世界には存在していない。鳥のように翼をもつ哺乳類の出現の可能性は、一角獣のような哺乳類の出現の可能性よりも相対的に低い。この観点からみるならば、図2に示されるように、ペガサスの存在する可能世界の方が、一角獣の存在する可能世界よりも現実世界との逸脱の距離は相対的に大きいと言える。

5. 人間の主観的認知と虚・実の世界

客観主義的な言語観に基づく論理の世界では、言語表現は、人間の主観的な認知プロセスから独立して外部世界の対象や事態に関係していると考えられている。また、問題の言語表現が真であるか偽であるかは、外部世界の対象や事態との対応関係によって客観的に決められるという前提に立っている。しかし、日常言語には、このような客観的な言語観や論理観では規定できない多様な言語表現が存在している。その典型例は、次のような表現にみられる。

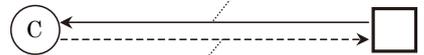
- 1 a ハイウェイが砂漠の真ん中を走っている。
- b 半島が南に延びている。
- 2 a だんだん山が迫ってきた。
- b 海が近づいてきた。
- 3 a シャツが小さくなってきた。
- b スカートが短くなってきた。

1 の場合、ハイウェイや半島が移動したり延びたりする訳ではない。したがって、



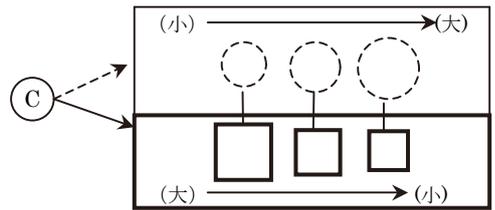
(図3)

図：(知覚対象の主観的移動)



(図4)

地：(認知主体の物理的移動)



(図5)

1 は文字通りには偽である。しかし、この種の表現は、図3に示されるように、ハイウェイないしは半島を眺めている主体の主観的な視線の移動(ないしはスキヤニング)を反映している表現である。

2 の場合にも、山や海は移動しない以上文字通りには偽の表現である。しかし、この種の表現では、山や海を知覚している主体がそこに向かって移動していくにつれて、相対的に山(ないしは海)が主体に向かって迫って来たり、近づいて来るように知覚される主観的な認知プロセスを反映している表現である(図4)。

3 の例は、文脈によっては、文字通りに理解可能な表現である。例えば、洗濯でシャツやスカートが小さくなったり短くなったりした状況では、3 の例は文字通りの表現として理解される。しかし、3 の例は、シャツやスカートを身につける主体が成長していく状況でも使用可能な表現である。この例は、図5に示されるように、シャツやスカートを身につける主体が自分

の体のサイズが大きくなるという事実を認識する代わりに、身につけているシャツやスカートのサイズが相対的に小さくなっていくと錯覚する状況を伝える表現としても理解できる。

図5のボックスの上部の破線のサークルは、シャツ(ないしはスカート)を身につけている認知主体に相当する。図5の下部のボックスと身につけている衣類の四角は太線でマークされているが、この部分は、衣類のサイズが次第に小さくなっていると錯覚する認知プロセスが図として前景化していることを示している。また、上部の破線でマークされているサークルを含むボックスは、主体の体の成長のプロセスが、地として背景化されていることを示している。

参考文献
 Langacker, R. W. 1993. "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
 Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
 Rubin, E. 1958. "Figure and Ground." In: D. C. Beardslee and M. Wertheimer (ed.) *Readings in Perception*, 194-203. Princeton, N.J.: D. van Nostrand.
 山梨正明 1986 『発語行為』大修館書店
 山梨正明 1988 『比喩と理解』東京大学出版会
 山梨正明 1992 『推論と照応』大修館書店
 Yamanashi, M. 1998. "Some Issues in the Treatment of Irony and Related Tropes." In: R. Carston et al. (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*, 271-281. Amsterdam: John Benjamins.
 Yamanashi, M. 2000. "Negative Inference, Space Construal, and Grammaticalization." In: L. R. Horn et al. (eds.) *Studies on Negation and Polarity*, 243-254. Oxford: Oxford University Press.
 山梨正明 2000 『認知言語学原理』大修館書店
 Yamanashi, M. 2001. "Speech-Act Constructions, Illocutionary Forces, and Conventionality." In: D. Vanderveken et al. (eds.) *Essays on Speech Act Theory*, 225-238. Amsterdam: John Benjamins.
 山梨正明 2004 『「文法」の認知空間』開拓社
 山梨正明 2009 『認知構文論—文法の「メタ」性』大修館書店
 Yamanashi, Masa-aki 2010. "Metaphorical Modes of

主観的な認知のプロセスを反映する言語観としては、さらに次のような表現が考えられる。

4 a ほら、鍋が煮えているよ。

b 彼はドンブリを食べ終えた。

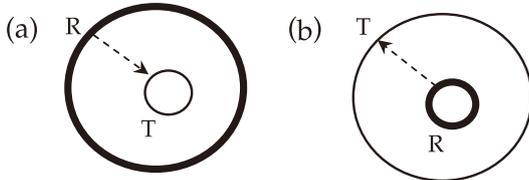
5 a 禿頭が通りを歩いている。

b セーラー服がこっちへやって来る。

4の場合、鍋が煮えるわけではない。また、ドンブリそれ自体を食べるわけではない。5の場合にも、禿頭やセーラー服が移動するわけではない。したがって、この種の表現は、文字通りには非論理的な表現である。しかし、日常言語では4、5のいずれの表現も、慣用的なメトニミー表現（なしいしは換喩表現）として使われ、その意味は自然に理解できる。（4の鍋とドンブリは、食べ物を意味する。また、5の禿頭、セーラー服は、それぞれ禿頭の人物、セーラー服の女性を意味する。）

この種の表現は、日常言語に典型的にみられるメトニミーの認知プロセスに基づいて理解することができる。

メトニミーの認知プロセスには、認知ドメインにおける焦点のシフトに關し、基本的に2



(図6)

つの方向が考えられる。その一つは、図6の(a)に示されるように、ある認知のドメインの全体が参照点(R)となり、この参照点からその一部のドメインをターゲット(T)として認知していくプロセスである。もう一つの認知プロセスは、図6の(b)の図に示されるように、問題の認知のドメインの一部が参照点(R)となり、この参照点から全体のドメインをターゲット(T)として認知していくプロセスである。

上記の4の例における「鍋」と「ドンブリ」は、それぞれ「鍋ないしはドンブリの」食べ物の意味で修辭的に使われているが、この種の意味解釈は、図6の(a)の認知プロセスを介して可能になる。すなわち、4の例では、参照点(「鍋/ドンブリ」)→ターゲット(「鍋/ドンブリの」食べ物)の認知プロセスを介して可能になる。また、5の例における「禿頭」と「セーラー服」は、それぞれ「禿頭の」人物、「セーラー服の」女性の意味で修辭的に使われているが、この種の意味解釈は、図6の(b)の認知プロセスを介して可能になる。すなわち、5の例では、参照点(「禿頭/セーラー服」)→ターゲット(「禿頭/セーラー服の」人物)の認知プロセスを介して可能になる。

6. むすび

一般に、日常言語の表現の大半は文字通りの表現から成っており、ありのままの現実に関する真偽を伝える手段として考えら

れている。この考え方に従うならば、メタファー、アイロニー、メトニミーをはじめとする言語表現は主観的な表現であり、現実世界の真実を歪める伝達手段とみなされることになる。しかし、日常言語には、言葉の綾ないしは思考の綾としてのレトリックに基づく主観的な表現が広範に存在する。この種の表現は、文字通りに解釈するならば偽の表現とみなされるが、その背後には言語主体の創造的な認知プロセスが存在している。この認知プロセスの典型例としては、図・地の分化、図・地の反転、スキヤニング、メタファー的写像、メトニミー的拡張などが挙げられる。一見したところ、文字通りには偽の表現とみなされる主観的な言語表現は、この種の認知プロセスを介して現実世界のある側面の真実を効果的に伝えるように機能している。

言葉は、一定の規約や慣習に従って使われている。しかし、一定の規約や慣習に従う表現は、私たちをきわめて常識的で固定した現実世界に安住させてしまう。このように慣習にとらえていく世界は輝きを失い、新しい感動や驚きは期待できなくなる。慣習的な世界をこれまでと違った視点で理解していくためには、通常の規約や慣習による伝達をこえた新しい伝達の手段が必要となる。本稿で考察したメタファー、メトニミー、アイロニー、等の表現は、慣習的な世界を新たな視点で創造的に理解していくための重要な手段として機能している。この種の表現は、創造的な認識への第一歩であり、新たな真実を発見するための手段を提供してくれる。

失われた「感じ方」をめぐって

大倉得史 TOKUSHI OKURA



大倉 得史（おくら とくし）
一九七四年、東京都生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。臨床心理士。九州国際大学講師・准教授、京都大学大学院人間・環境学研究科講師を経て、現在同研究科准教授。専門は発達心理学。主な著書に「拡散Attention」「アイデンティティ」をめぐり、僕達は今」「ミネルヴァ書房、二〇〇二）、『語り合う質的心理学』体験に寄り添う知を求めて（ナカニシヤ出版、二〇〇八）、『大学における発達障害者支援を考える』（中川書店、二〇〇九）など。

1 アドイ

学生時代からツーリングが好きで、今でも毎年のように夏の北海道に行く。広く澄んだ青空の下、まっすぐに続く道を、清涼な空気を胸一杯に吸い込みながらひた走る快感。あるときは地平線まで広がる草原のまぶしさに目を細めつつ、あるときは北の海特有の深い碧色に吸い込まれるのを感じながら、あるときは鬱蒼と茂った深緑の山懐に抱かれて、ただ走っていく。多分そんなとき僕は、あまり何も考えていないのだろう。耳元を轟々と吹きぬける風の音や、バイクから伝わってくる振動、待ち構えるブラインドコーナー、バンクから立ち上がるときの心地よい遠心力。言葉といった不純物を介さない極めて感覚的な次元で、まさに自然と一体になれる瞬間だと、昔から思っていた。

友人の多くが会社勤めを始め、バイクを売ってしまった今では、一人キャンプ道具を積んで周ることが多いから、最後に仲間と行ったのはもう五年ほど前になるのだろうか。道東は屈斜路湖畔のさびれた、けれども何とも言えない落ち着いた風情の温泉

宿で、自らをアイヌだと称するKさん夫妻と出会った。風呂上りのうまいビールを飲んでいたとき、僕らの傍で談笑していた地元の人たちがかぶっている帽子を見て、友人が「それってアイヌの帽子ですか？」と話しかけたのがきっかけである。それから、どこらあたりを周っているのか、今日は開陽台に行つて来ました、といった会話が始まった。開陽台というのは中標津の広大な牧草地帯にある小高い丘である。登ってみると三六〇度のパノラマが開け、どこまでも広がる牧草地の果てに、天気が良いれば遠く北方領土まで望むことができる。僕にとつてはまさに北海道の大自然を象徴するような風景だったのだが、友人は少し違った感想を抱いたことをKさんに伝えた。「でも、あれって元々は森だったところを全部開拓しちゃったんですよ」。それを聞いたKさんは僕らの目を見て一瞬沈黙し、ポツリと言った。「なかなかいい感覚持つてるな」。

北海道開拓の歴史はアイヌ民族受難の歴史でもある。主に狩猟採集漁労で生計を立てていたアイヌの人々にとって、鳥獣や魚貝、木の実、材木から土地に至るまでありとあらゆる生活の糧はすべてそのときどき

に自然⇨カムイ（神）から贈られる賜り物であった。カムイに感謝しつつ、自然と共に生活していた人々にとって、森を切り開き、農耕牧畜による生産管理体制を敷き、ときに力に任せて山海の幸を根こそぎ収穫していく和人の生活様式はどう映ったのだろうか。自然に「依存」しながら生きる生活から、自然を「統治」して生きる生活へ。数々の苦難に比べそのことについての葛藤がいかにほどのものであったかはともかくとして、事実、全く異なった考え方と生活様式に同化されていく形で、アイヌの文化は抑圧されていった。現在、自らをアイヌと称する人々の多くは、そうした歴史を踏まえ、何とかアイヌの精神・文化を復興し継承していこうという強い自覚を持っている。Kさん夫妻もまた、そういう人であった。

そのKさんから、明日の晩、丸木舟という民宿兼ライブハウスでアドイ（アトウイと発音し、アイヌ語で「海」を意味する）のライブがあるから来いと誘われた。Kさんによれば、アドイはアイヌのアイデンティティを持つミュージシャンで、モシリ（大地）というバンドを組み、独自の楽曲でアイヌの精神を歌い続けている人物だという。どうせ成り行き任せの旅だと僕ら

は屈斜路湖畔での連泊を決め、次の日の夜、丸木舟を訪れた。民族衣装を着た女性に席まで案内され、十数人の客とともに公演開始を待つ。やがて真つ暗なステージに青いスポットライトが差し、モシリライブが始まった。ボーカルの女性、コーラスの女性たちに混じって、左奥で楽器を演奏する白髪の男性は、五〇〜六〇歳くらいだろうか。あの人アドイらしい。メロディは耳に優しいもの、では決してなく、重低音が響く荘厳で骨太の曲調に乗せて、ボーカルの女性の突き刺さすような高音が響き渡る。

カムイ カラ 神々がつくりし
アシリ レラ 新しい風
モシリ セツ 大地の家
カムイ ラム 神々の想い

カムイ カラ 神々がつくりし
アシリ トム 新しい光
アドイ セツ 海の家
カムイ ラム 神々の想い

カムイ カラ 神々がつくりし
アシリ ペシケ 新しい波紋
カント メム 空の湧水
カムイ ラム 神々の想い
『カムイラム』 作詞・作曲アドイ

押し寄せる波のごとく重なり合うコーラス。鳥獣の叫びを再現するかのような効果音。妖しく煌く青や赤の光線。いつしか僕らはアドイの創り出す世界に完全に圧倒されていた。そう、この辺りに元々あった

のは人間によって飼いならされた穏やかな田園風景などではなく、鮭や鱒が飛び跳ね、熊が闊歩し、鼻が鳴く深霊幽谷の森であったのだ。アイヌの人々にとつての自然とは人間にたくさん恵みを与えてくれる優しき守り神という以上に、霊的な生命力が息づく圧倒的な畏怖の対象だったのではないか。ライブが終わって引き返す道中も、そうした自然にカムイの地響きのような鼓動がずっと身体の奥で響いていた。

2 共感覚

現代に生きる我々がともすれば忘れてしまいがちな畏怖の対象たる自然。こうした自然観を支えるアイヌの人々の「感じ方」の起源はどこにあるのだろうか。もちろん、その独特の宗教的世界観から掘り起こしていくこともできるのだろうが、少し違った側面から考えてみたい。

先日、京都駅の書店でたまたま一冊の本に出会った。『音に色が見える世界』(岩崎純一著)という、共感覚についての本である。共感覚 (synaesthesia) とは、例えば文字や数字にさまざまな色が見えたり、音に色や形、匂いを感じたり、風景に音が聞こえたりというような、いわゆる「五感」の区分を超えた全感覚的な感覚のあり方である。実は著者の岩崎氏自身が類稀な男性共感覚者⁽¹⁾で、氏は言語を問わずあらゆる文字に色が見えた

り(図1は平仮名の場合)、音に色や形を感じたり(図2)するほか、人に色や音を感じる、味や匂いに色が見える、時間に色が見えるなど、さまざまな共感覚を持つているという。非共感覚者にとつてはなかなか想像しがたい体験世界だと思うので、一例としてある女性についての氏の描写を見よう。

女性Bさんの姿は、いつも頭の先から腰の辺りの高さまでの、両側の外側の空間に、紅茶に限りなく近い、かなり細かい砂状の肌色や淡香色の匂いと、綿の束を私の右手親指以外の四本の指が、少し圧力を加えるように触れたときの感触とを保っている。(中略)彼女の姿と、彼女が発するそのシャボン玉と風船のあいこのような流れの中には、様々な音があるが、とりわけFやBに近い音があるのは確かであり、無理をして言葉にするなら、彼女はもともと、

あいうえお かきくけこ さしすせそ たちつてと なにぬねの はひふへほ まみむめも やゆよ らりるる わるを

図1 岩崎氏の平仮名の見え方

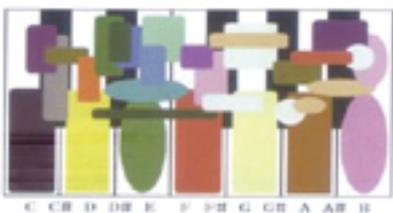


図2 岩崎氏の音の感じ方(各音階から感じる色と形を示している。上部の込み入ったさまざまな色は雅楽や民族音楽に見ることが多いという。)

(1) 岩崎氏によれば、共感覚者は女性が圧倒的に多いという。

へ音（F音）を少しだけ高めた音を核音とする陰旋法に当たる構成音を持つている女性で、私はそれをすばらしいと思っている。（『音に色が見える世界』五八―五九頁）

美しい女性についての詩的技巧を駆使した描写のようにも見えるかもしれないが、これは比喩的表現などではなく氏がこの女性から実際に感じる感覚をそのまま記述したもの（より正確に言えば、本来は五感の別なしに感じられるものを無理やり視覚的要素、聴覚的要素、触覚的要素などに分解して記述したもの）だという。しかも、こうして感じられる音や色の変化からその女性の月経・排卵期まで分かることがあるというから驚く。ただし、氏にすれば話は逆で、これほどまでにはつきりと女性の体から発せられていることについて、周りの男たちが何も感じていないということが信じられなかったそうだ⁽³⁾。共感覚者がしばしば体験するという周囲との隔絶感や、自分の感覚を表現するための適切な言葉がない違和感といったものに、氏もだいたい苦しめられたという。ところが、日本古来の大和言葉に自分の感覚の仕方と同様の表現を見出したということが一つの転機をもたらし、もしかしたら昔の日本人は自分と同じように共感的に物事を感じていたのではないかとこの着想が氏に慰めと、研究にのめり込むきっかけとを与えることとなる。

例えば日本の古語に、女性の美しい「にほひ」という言葉が出てくる。これは現在の「におい」のような嗅覚的な意味というより、むしろ「光沢があり美しい」「光る」

など視覚的な意味を持つ言葉だったというのが一般的な説である。しかし氏は、それは共感的な感じ方をしなくなった現代日本人の視点から古典を解釈する結果であって、むしろ「にほひ」や「にほふ」は視覚も嗅覚も含む語だったのではないかという。さらに、「匂」という漢字は、元々の漢語にはない和製漢字である。その由来となったとされるのは漢語の「均・韻（イン）」であるが、これは「音の響き、音の調和」を表わす言葉である。ここから、氏は「にほふ」とは本来、「女を見る」「女をおう」「女を聞く」といったすべてを含む感覚、共感的事態を表わす言葉だったのではないかと推測する。つまり、かつての日本人は、「にほふ」という共感的事態に当てる漢字をそれまでの漢語の中に見出すことができず、苦肉の策として「匂」という和製漢字を作り出し、これに視覚的要素、嗅覚的要素、聴覚的要素すべてを込めて使ったのではないかと、このように推測する。

他にも「いろ（色）」「こひ（恋）」「きく（聞く・効く・利く）」など共感的に使われていた言葉の分析をしつつ、氏は自らの説を裏付けていこうとするが、中でも特に興味深いのが色彩感覚に関する次のような調査・実験である。

色には、色相・彩度・明度という三つの成分がある。大まかに言うと、色相は普段我々が赤青黄といった言葉で表そうとする色の様相のこと、彩度は「純色にどれほど近いか」の程度（高いと原色っぽく、低いと灰色っぽくなる）、明度は色の明るさの程度（高いと白っぽく、低いと黒っぽくなる）である。ここで明度のある値に固定し、

横軸に色相、縦軸に彩度をとった図3のような色彩図を作ることができる。これを見て、例えば「青色」という色彩語が指すのはどの範囲であるかを図示してみよう。恐らく多くの読者はこの図の中心部から右側一帯に広がるいわゆる「水色」から「紫色」までの領域を線で区切るのではないだろうか。このように「青色」は純色の青ばかりを指すのではなくある幅を持って使われている。ここで被験者に図3のような三色を示し、次のような教示を与える。「今あなたが青や赤といった色彩語を一切持たずに生きてみると仮定せよ。あなたが偶然にもA色、B色、C色の三色に出会ったとき、あなたがA色、B色、C色と呼びたい範囲ないしはそれと近似色だと感じられる範囲をそれぞれ示せ」。これを（明度の値を変えながら）多数の被験者に実施し、任意の三人以上の被験者がその色の近似色として認めた点をプロットしていくと、興味深い結果が出たのである。

図4は男性九八名の結果である。A色だと感じられる範囲は下部一帯、B色は左側の垂直領域、C色は右側の垂直領域であり、恐らく多くの読者もこれと同様に色相の違いに重きを置いた範囲指定を行ったと思う。一方、岩崎氏（さらには共感覚を持つ女性一〇四名）の色の感じ方は図5のようなもので、領域が垂直になっていない。つまり、色相に加えて彩度（と明度）も重要な色判別要因となっていることが分かる（同じ色相でも彩度が異なれば違う色として感じられることがあるわけだ）。目に異常があ

(2) 岩崎氏によれば、日本の伝統音階の一つで、江戸時代以降の琴・三味線の音楽に多用されるといふ。

(3) 相手が生殖のための準備態勢に入っていることを察知する感覚は、他の動物種と比べてヒトにおいて非常に退化しているのではないかと、氏は言う。

(4) したがって、本来は色相・彩度、明度の三次元座標空間にプロットするべきであるが、岩崎氏は分かりやすくするため明度の次元を圧縮して示している。

(5) 実はこの「男性」には岩崎氏を除く共感覚者の男性一二名も含まれている。男性については、共感覚の有無を問わず個人差がほとんどなかったため、まとめて統計を取ったことである。

(6) 共感覚を持つ女性一〇四名の結果は、実際は岩崎氏の色彩感覚と「似たもの」なのだが、ここでは説明の簡便化のため氏と「同様のもの」として扱っている。

るわけでもない。非共感覚者が使う「青」や「茶」といった色区分がどこを指すのか（頭でなら）理解もできる。けれど、共感覚者にとって最も自然な色の区分とは図5のようなものだというのである。

ところで、氏は日本の古典文献に当たり、かつての日本人が「藍」や「紺」をつけて呼んでいた色（藍色、鉄紺色など）や現代の藍や紺とは異なるにも関わらず「藍」「紺」「青」「水色」「空色」などと呼んでいた色、さらにそれらの色と同様に扱っていた色（「縹色」「納戸色」など）がどんな色だったかを調べ、それらを色彩図上にプロットしてみたという。すると、驚くべきことにこれが共感覚者の指定するCの領域にはほぼ重なるのである。「青野菜」「青魚」という古くからの表現にその痕跡が見られるように、かつての「あい・あを」は今よりもずっと広い領域（緑や灰近辺まで）をカバーする色彩語だったのである。さらに、「鼠」と「茶」についても同様に調べてみたところ、やはり共感覚者のAの領域、Bの領域に重なるという。これらの色もかつては「四十八茶百鼠」と言われるほど多彩な色を含んでいた。このことは一体何を意味するのか。

結論を急ぐ前にもう少し、今とはかなり異質なこうした色彩感覚について考えておこう。例えば、かつての日本人は何をもって「あい・あを」としていたのか。

実は古来日本には「あか」「あを」「しろ」「くろ」の四つの色彩語しかなかったという（図6参照）。「あか」は「明か」「明け」などと同源で、奈良時代には単に彩度と明

度が共に高い状態を指した。すなわち、色がredだろうかyellowだろうか、ともかく「明るく光り輝く色」をすべて「あか」と呼んだのである（黄黍、黄草などの古語がある）。一方「あを」はそれと対照的に単に「淡くはつきりしない色」のことを指した。greenだろうかredだろうか、彩度や明度が低いものは全て「あを」であった。例えば、今でこそ「紅」はredの仲間とされるが、元々は「呉の藍」として「あを」の仲間であったという。

こうした彩度と明度による色区分は、何も上代の日本に特有のものではない。太古には全世界的に見られた傾向であり、今でも各地の少数民族には残っている。例えば、有名なニューギニアのダニ族はmiliとmolaという二つの色彩語しか持たないし（彩度・明度が低いのが前者、高いのが後者）、実はアイヌの色彩語も四語のみである。すなわち、アイヌ語の「フレ」は図6の「アカ」に、「シウニン」は「アヲ」に、「レタラ」は「シロ」に、「クンネ」は「クロ」にびったり対応するのだという。

さらに、もう少し時代が下って平安時代から江戸時代になってくると、緑や黄、紫苑、藤といった色彩語が生まれ、「あか」と「あを」を侵食していく（図7参照）。これらの色彩語は「赤い」「青い」「白い」「黒い」のように「い」をつけて形容詞とすることはなく（「緑い」「黄い」などとは言わない）、後代に花鳥風月から取られた言葉であることが分かる。ただし、この時代でもまだ色の区分線が斜めに傾いていることから、彩度と明度の違いで色を判別する傾

向が消え去ってはいないことが分かる。この傾向が消え、色相のみによって色を区分するようになったのはredやblueなどの西欧的色彩感覚の影響を強く受け始めた明治以降だという（図8参照）。

ともあれ、こうした実験・調査により、氏は昔の日本人やアイヌの色彩感覚が現代の共感覚者のそれと酷似していることを示していく。先の古語研究とこの色彩感覚研究を併せると、「昔の日本人は共感覚的世界に生きていた」という氏の説もあながち無茶なものとは言えないように思われる。もちろん、かつての日本人全てが今の共感覚者と同様の「体質」共感覚者特有の遺伝的素因があると仮定して一応こう言っておく）を持っていたと考える必要はない。むしろ、例えば昔は今で言う緑から灰までをも「青」と名指すような言語環境があったがゆえに、そこで育った人々の中に自然と共感覚的な色彩感覚が育ったのだろう。逆に明治以降は、「blue」や「brown」などの外来語の指す領域に「青」や「茶」が限定されていき、今や我々を取り巻くのは色相の違いに基づく色彩語となってしまった。そして、そうした言語環境に育った現代日本人は共感覚的な色彩感覚を（さらに思い切つて言えば、これと同様の原理で共感覚的な感じ方全般をも）失ってしまったのである。ある言語環境に生まれ、その言語を獲得するというのが「感じ方」に多大な影響を与えるということの実例を、ここに見ることができるのではないだろうか。

3 失われゆく「感じ方」

幼児のいかにも子どもらしい言語表現の中に、事物が何らかの表情や内的生命力を持つているかのような表現が見られることは広く知られており、発達心理学者ウエルナーはそれを相貌的知覚と呼んだ。例えば、二才の子が二つに割れたビスケットを見て、ビスケットが痛がついていると感じ、「かわいそう、ビスケット」と言った例や、コップが倒れているのを見て、「かわいそう、コップくたびれている」と言った例がある。こうした表現は無生物と生物の区別のつかない子どもらしい誤りとして片付けられがちだが、実はまさに子どもにとっては事物がそのような表情をもって迫ってきている、そのありのままの知覚だということが重要

である。子どもは生物であれ無生物であれ、すべての対象についてある種の表情や力動感を見るのであって、こうした生き物と事物の融合、主体と客体の融合、知覚するものの情態と知覚されるものの属性との混交こそが、幼児期の知覚の特徴なのである。この相貌的知覚について興味深いのは、いわゆる五感の区別を超えた次元、それら各感覚を貫く次元で、身体の中に全感覚的な「ある感じ」が生じているように見える点である。例えば、割れたビスケットという視覚情報が痛みという痛覚として感じられるのは、言うなれば両感覚を基底する「痛々しい感じ」に支えられていることに他ならない。ウエルナーはそれを「諸感覚の原初的基盤」と呼び、発生過程（系統発生、⁽⁸⁾ 個体発生、⁽⁹⁾ 微視発生の各過程）でこれが各感覚へと分化していくと考えた。⁽¹⁰⁾ 共感覚と

はまさにこの「諸感覚の原初的基盤」が分化以前の状態でそのまま感覚されることだと言って良いだろう。実際ウエルナーは、共感覚現象についても詳細に検討し、音を聞いたときに色を感じる共感覚は四〇%も幼稚園児が普通に体験しているといった例を挙げている。岩崎氏も「赤ん坊や動物は自分と同じような感覚様式を持っているように感じる」と述べている通り、恐らくかつてはかなりの人が小さな共感覚者だったのである。

ところが、大きくなるにつれ、芸術家や共感覚者など特別の「体質」を持つ人以外はこうした能力を失っていく。視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚の各感覚は独立のものとして分化し、主体と客体とを明確に切り分ける知覚様態へと移行していく。そして、実はこうした移行こそ言語獲得を可

(7) 系統発生。元々は生物学の用語で、ある生物種がたどる進化的変化の過程を指すが、人間の「進化」という観点から言えば、ウエルナーにおいてはいわゆる「未開文化」から「文明化社会」への発展過程も視野に入ってくるすなわち、「共感覚的認識の文化」から「客観的・科学的認識の文化」への「進化」（退化？）の過程で、「諸感覚の原初的基盤」が徐々に分化した形で感覚されるようになっていくと考えてもらえれば良い。

(8) 個体発生。その個体の発達。子どもから大人へと発達していく過程で、次第に「諸感覚の原初的基盤」が分化して感覚されるようになっていく。

(9) 微視発生。ウエルナー理論における重要概念。「諸感覚の原初的基盤」から「分化した諸感覚」に至るまでの発生過程は、ミクロに見ればすでにそれを達成した成人が何かを感じる際にもその身体において瞬時のうちにたどり直されているという考え方。

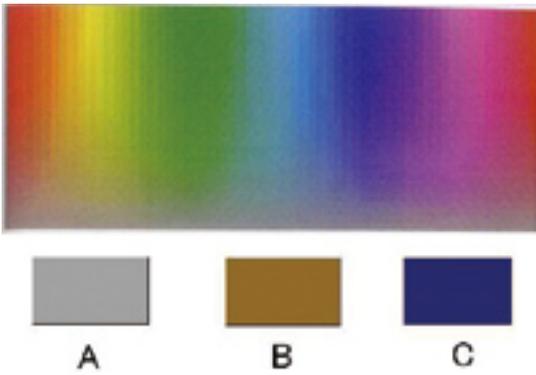


図3 色彩図、および実験で用いた三色

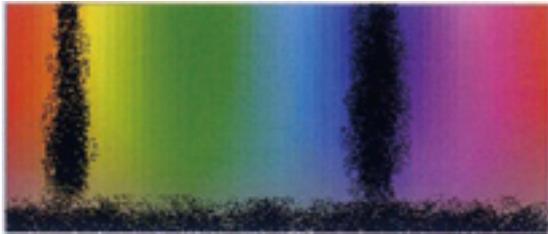


図4 男性98名の結果

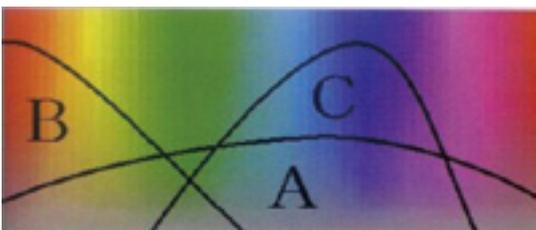


図5 岩崎氏や共感覚女性の結果



図6 奈良時代の色彩語（右の棒グラフは明度）

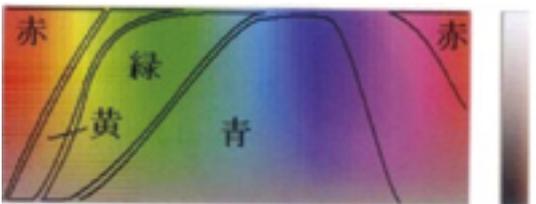


図7 平安時代から江戸時代末期の色彩語（右の棒グラフは明度）



図8 明治時代以降の色彩語（右の棒グラフは明度）

能にするものなのだ。「犬」という言葉が獲得されるためには、先ほど見た怖い犬も、この前見た愛くるしい犬も、自分にとっての犬も、母親にとつての犬もすべて同一性を持つこと、言い換えれば主体の感じたものとは無関係の客観的概念として「犬」が理解されることが必要だからである。そして、一度こうした言葉の世界に住まい始めると、言葉の意味を持つ客観性に囚われる形で主体と客体の融け合いを体験することは難しくなり、ますます相貌的知覚や共感の能力が失われていくことになる。ただし、それでもその言語体系が共感的な感じ方を要請するものであれば、幾分かはそのが残存するかもしれない。例えば昔の日本人にとって「にほふ」という語を習得することは、視覚・嗅覚・聴覚を総動員して「ある感じ」をつかむことだったのかも知れない。逆に現代の言語体系は視覚・嗅覚・聴覚などを峻別することを要請する。私見では、こうした言語体系の変化は観察主体と対象とを切り離し、数式という究極の客観的言語によって対象の変化を冷静に予測・操作しようとする自然科学的思考法の隆盛と決して無縁ではないと思う。

*

御所を歩きながら、ふと木々に目を向けてみる。普段、葉っぱは「緑」だと思っただけで、そのことを保留してもう一度この身体で感じ直してみる。すると、むしろそれら木々の葉を同じ「緑」と呼ぶことの方が不思議に思えてくる。陽光に照ら

されて黄や黄緑に輝いている葉と、ちょうど木陰になって深く沈んでいる深緑の葉では、この身体にもたらされる「感じ」が全く違う。僕はいつからこの「感じ」の違いを忘れていたのだろうか。この「感じ」の違いを軸にして前者を「あか」、後者を「あし」と呼んでも良かったではないか。しかし逆に、それらの葉を「感じる」ことを止め、ひたすら凝視してみようとしてみる。すると、やはり緑は緑にしか見えなくなってくる。色相のみを頼りに色を区分するとは、恐らく視覚のみに頼ったやり方、自らを自然と切り離し、これを対象化していくやり方なのだ。

今日の我々は、どちらかと言えば自然を「統治」という発想に立って考えることが多いように思う。環境問題などが取り沙汰されるときにも、そこで問題になるのは汚され、破壊されていく自然を人間の努力によっていかに守るかということであって、畏怖の対象としてそれを崇めるなどといった感覚はともすれば時代遅れのものだと思われてしまう。それもあ意味仕方のないことではある。現実問題として、人間の科学力と高度な文明社会は自然を根絶やしにできるほど強大なものになっているし、人間の手で自然を「保護」しなければ取り返しのつかないことになることも明らかだ。そのために必要になるのは人間の理性的な行動と科学のさらなる進歩であってアイヌの宗教ではない、と考える人もいるだろう。しかし、そうした科学万能主義的発想こそ、そもそも今日の危機的状況を招いた当のもの

ではなかったか。恐らくは共感的に自然と融け合い、刻々と移り変わる自然の表情にときに畏怖しときに感謝しつつ暮らしていただろうアイヌの人々の「感じ方」は、そうした発想そのものをどう乗り越えていくべきか、現代に生きる僕らが見失っていたものが何であったかということへのヒントを与えてくれているような気がしてならない。

参考文献

アトイ『俺は魂をデザインする』(二〇〇二年、北海道新聞社)。

岩崎純一『音に色が見える世界―「共感」とは何か』(二〇〇九年、P H P 新書)

(※本稿の図1〜8はすべて同書からの引用である)。

ウエルナー、H. (一九四八)、園原太郎監修、鯨岡峻・浜田寿美男訳『発達心理学入門』(一九七六年、ミネルヴァ書房)(Comparative Psychology of Mental Development)。

(10) 常識的には、別個に与えられる視覚刺激と痛覚刺激との間に何らかの学習によって「連合」が成立するがゆえに、ある視覚情報に「痛々しさ」を感じるようになると考えられるが、ウエルナーはこれをひっくり返し、むしろまず感じられるのは諸感覚に分化する以前の全体的感覚であると考えたわけである。

自転車を科学する

高石鉄雄

TETSUO TAKAISHI



高石鉄雄（たかいし てつお）

1960年、大阪府生まれ。神戸大学大学院教育学研究科修士。京都大学博士（人間・環境学）。現在、名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科 准教授。専門は応用生理学。「普段着で行う健康づくり」をテーマに、自転車運動、歩行運動に関わる研究を継続中。著書に『自転車で健康になる』（日経新聞出版社）、『高石式 アクティブサイクリング』（土屋書店）がある。

はじめに

ウイキペディアによれば、リヤカーのように横に並んだ「一对の車輪」を持つ荷車、あるいは「二対の車輪」を持つ馬車のような乗り物の歴史は、既に五〇〇〇年に及ぶ。しかし、「そんなものは役に立たない（走らない）」と誰もが考えたからか、二つの車輪を縦に並べた「二輪車」の歴史は比較的浅く、一八一七年にドイツに登場した足で地面を蹴って進むドライジーネ（図1）と呼ばれる乗り物がその最初とされる。その後、小児用の三輪車のように、前輪にペダルが付いたことで足で地面を蹴らなくて

も走れるようになり（前輪駆動）、一八七〇年代にはチェーンとギアを組み合わせて後ろの車輪を回して進む現在の自転車の原型（後輪駆動）が出現する。更に、駆動輪の空回りを可能にしたラチェット機構、空気入りタイヤ、軽量化のためのパイプフレームやワイヤースポーク、車軸やペダル軸のボールベアリング、ドラムブレーキ、変速機など、様々な工業技術とともに自転車は今日のように進化してきた。

筆者は現在、応用生理学の立場からこの自転車という乗り物に関わっている。近年、「エコ」だ、「健康」だと自転車が注目されている。本稿では、我々が普段から慣れ親しんでいる自転車を「科学（健康科学）」する。

自転車に働く力

自転車を走らせている時、自転車には「（タイヤの）転がり抵抗」「空気抵抗」「重力抵抗」の三つの力が働いている。これらの合計（全抵抗）と、ペダルを踏むことで生まれる推進力（後輪が地面を後方に押す力）が等しい時、自転車は一定速度で走り、そのバランスが崩れた時に加速ないし減速する。転がり抵抗は路面の状況によって変化し、空気圧が低く、タイヤの幅が広くなるほど大きくなる（転がり抵抗を減らし燃料を節約するため、営業用バンタイプ車のタイヤ幅は一般に狭い）。空気抵抗は、通常の生活走行速度の範囲（時速二二―二六キロ）では大差なく、その大きさも僅かである。但し、速度の二乗に比例するため、

無風の中を時速15キロで走れば相対的な風速は四・二m（秒）であるが、風速四・二mの向かい風を受けると、空気抵抗は一挙に四倍になる（だから風の強い日の自転車は辛い）。また、重力抵抗は平地ではゼロ、下りではマイナスすなわち推進力となるが、上り坂では極端に大きくなり、勾配一・五%（一〇〇m走る間に一・五m上がる）では、その全抵抗（＝運動強度）は平地走行時の二倍になる。空気抵抗と重力抵抗、これら二つをうまく利用することが自転車を使った「健康づくり」の鍵となる。

自転車による血管系障害の予防

運動が「健康づくり」効果を持つには、その運動が身体を良くする（強くなる）ための一連の生理的反応を引き出す刺激（きっかけ）として働く必要がある、そのような運動には適度の強さ（運動強度）と量（運動量）が求められる。運動中の酸素消費量とほぼ直線関係にある心拍数は、その測定の手軽さから運動強度の目安とされる。人がランニングや自転車運動を精一杯頑張った時の心拍数（最大心拍数）は、「二二〇マイナス年齢」ぐらいである（個人差はある）。健康づくり、たとえば心筋梗塞や脳梗塞の原因となる「動脈硬化」を予防し、呼吸循環器系の体力を維持・向上させるに



図1 自転車の始祖「ドライジーネ」

子どもに自転車の乗り方を教える際、図のように両方のペダルを取り外して足で地面を蹴ってバランスを保つことから始めるとよい。この方法を使えば一二日でそこそこ乗れるようになることを、筆者は我が子二人で実証済みである。

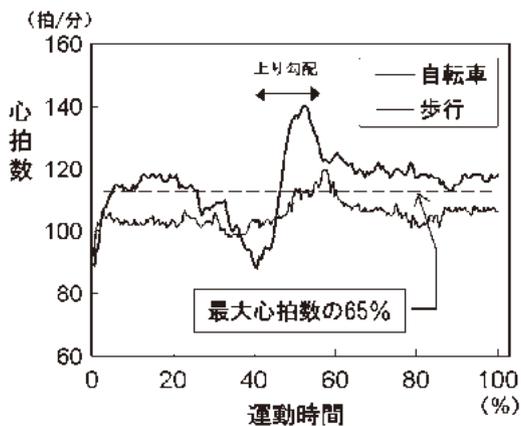


図2 運動中の心拍数の変化

は、最大心拍数の少なくとも六五%（慣れてくれば七五%）で二〇分間続けて有酸素運動を行うことが必要である。

図2は、四五歳の男性が緩い（勾配二・三%）下り坂と上り坂を含む約三キロの一般道路を、時速五・八キロで歩行（速歩相当）および二七インチの軽快車で平均時速一六・二キロで走行した時の心拍数を比較したものである（横軸は両運動時間を一〇〇%とした）。この男性の健康づくり強度は最大心拍数の六五%ならば一一三拍/分（破線）、七五%なら一三一拍/分である。歩くことは健康づくりの基本とされ実践者も多いが、これを見れば、そこそこ速く歩いても運動強度が不十分であることが分かる。一方、我々が自転車を走らせている時、平地では大抵は歩くより「楽」だと感じている。しかし、足を止めずに一分間に六〇程度のテンポで左右のペダルを踏んで走った図2の場合では、自転車の方が

楽と感じながらも、その運動強度は自転車の方が高い。

自転車を楽しめる理由は、移動速度が速いことによる冷却効果によるところが大きい（ジムでの自転車運動は、これがないので辛い）。辛さを我慢せずに運動強度が高く保てることは大きな利点であり、筆者の調査では、最大心拍数の八五%強度で三〇分以上走って自転車通勤する中高齢者は珍しくなく、一般にそういった人の血液の状態は良い。特に男性の場合、平地歩行ではなかなか健康づくり効果の得られる運動強度に至らないが、自転車なら、速度を上げたり、ちよつとした上り勾配で健康づくり強度が満たされる。ランニングやジョギングと違い、着地衝撃がないため障害の発生が少ないのも自転車の魅力である。但し、移動が速い分、移動距離あたりの運動量（エネルギー消費量）は歩行の半分以上なので、痩せることを目的とする場合には、距離ではなく運動時間で考える必要がある。

自転車による脚筋力の維持・強化

坂道を自転車で上がる場合、あるいは自転車を比較的速く走らせた場合、太ももが張った感じになる。この時、筋肉中には乳酸が多く発生している。筆者は、このような乗り方をした時に、成長ホルモンの分泌が活発になることを確認している。また、筆者は、平均年齢六八歳の高齢自転車愛好家では、MRIで測定した大腿部筋横断面積が同年代の一般人に比べて有意に大きく、立位での脚の伸展・屈曲（いわゆる

スクワット）能力が三〇歳代と大差ないことも確認している。高齢者では、脚筋力の低下は要介護あるいは寝たきりの原因となるだけでなく、歩行が辛くなると外出が減り、他人との関わり不足等から認知症が進行する。自転車による脚筋力の維持・強化は、これらの予防に有効となる。

電動アシスト自転車

人がペダルを踏み込んだ力をセンサーで瞬時に感知し、最大でその二倍の推進力をモーターで作り出す機能を持つのが「電動アシスト自転車」である。筆者は、同自転車に人を与える影響についても現在調査中である。乗ってみると、平地では自転車が「勝手に走っている」感じで、東山三六峰を巡るのなら是非欲しい機能だが、京大周辺を走る分には不要な機能で、身体のためには使用を控えた方がいい。平地での自転車走行では、脚に大きな力がかかるのは発進時のみで、その際の筋や腱の緊張あるいは神経から筋への電氣的興奮そのものが筋力維持に必要な刺激となる。安易なアシスト機能の使用によってその刺激が失われるのは、何とも残念な話である。筆者は文明（科学技術）の進歩を否定するつもりはないが「文明を正しく理解し、賢明に選択する」のが質の高い文化というものであろう。

現在、「自転車と健康」をメインテーマとする日本人研究者は筆者一人である。今後、科学的見地から自転車の長所と短所を公平に世に伝えることに努力したい。

加藤被告の手紙から 考えたこと

高橋由典

YOSHINORI TAKAHASHI



高橋由典（たかはし よしのり）

1950年、東京生まれ。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。広島女子大学文学部助教授などを経て、現在京都大学大学院人間・環境学研究科教授。専門は社会学。主な著作として『感情と行為—社会学的感情論の試み』（新曜社、1996年）、『社会学講義—感情論の視点』（世界思想社、1999年）、『行為論的思考—体験選択と社会学』（ミネルヴァ書房、2007年）、『社会学者、聖書を読む』（教文館、2009年）がある。

加藤被告の手紙

秋葉原無差別殺傷事件の加藤智大被告⁽¹⁾が事件の被害者に謝罪の手紙を送ったという記事が、昨年の全国紙各紙に載った。その記事によると、手紙の中で加藤被告は被害者や遺族の苦痛について述べていて、「私の唯一の居場所であったネット掲示板において、私が『荒らし行為』によってその存在を殺されてしまった時に感じたような我を忘れるような怒りがそれに近いのではないか」と推察しているという。

この記事を読んだとき、とても不思議な気がした。加藤被告が被害者や遺族の被

た苦痛を「推察」していると書いてあったからだ。後日手紙の原文に目を通したところ、「推察」は記者の言葉であることがわかったのだが、加藤被告が内容的に「推察」にあたることをしていることはまちがいない。被害者や遺族の苦痛は、「推察」するにふさわしい対象だろうか。推察などしなくてもふつうは即座に感じとれるものではないか。私たち自身のことを考えてみよう。この事件に限らず、殺傷事件に関する報道の中には、被害者や遺族の人生に焦点を合わせたものが結構ある。私たちはそれらを見聞きして、彼らの苦痛を「推察」したりはしない。そんなことをしなくても、すぐにピンと来てしまうからだ。「推察」などせず、ごく自然に（つまり何の努力もせずに）可哀そうにと思ったり、ときに涙を流したりもする。部外者である私たちがさえこうなのだから、謝罪の言葉を述べようという当事者なら尚更そうであるにちがいない。ところが現実の加藤被告はそうではなかった。

加藤被告が「推察」するのは、むろんピンと来ていないからだ。被害者や遺族の経験している苦痛が彼には今一つわからない。わからないからこそ、自身の経験を総動員して何とかかわかろうとしているわけだ。少なくとも手紙の文面を信じる限りはそうだ。私たちの多くが「ごく自然に」経験することを彼は意志的な努力で獲得しようとしている。だれもが何の苦もなく即座に体感しうるようなことを、営々たる努力の果てにつかみとろうとしている。記事を読んで何とも不思議と思ったのは、おそらくそのた

めである。

加藤被告のこの努力はどことなく、分解写真の一コマ一コマを真似て動きを再現しようとする試みに似ている。だれもが簡単にできる一連の動きがある。ところが彼はこの一連の動きを、一連の動きとしては再現できない。彼は生真面目だから何とか再現したいと思う。そこで動きを一コマごとに分解し、その一コマごとに再現し、そのうえでそれらをつなぎ合わせようとしている。そんな感じなのだ。いうまでもないが、そんなことをしても動きは再現されない。原理的に不可能なことをとて生真面目にやろうとしているようにみえる。

彼はピンと来ていない。そしてそのことをカバーするためにぎくしゃく動いている。それはたしかだとしても、人はふつうこのことにそれほど注意を惹かれない。だが私のアンテナにはこのことが引掛かった。彼のぎこちない動きが気になって仕方がない。以下では、この気になるといふ事実を出発点にして、加藤被告の手紙に触発されて考えたことを述べてみたい。

ただその話に入る前に、彼のぎこちなさがなぜそれほど気になるのかについて、少し語っておきたい。

息子のこと

私には二十代後半の広汎性発達障害（より限定的にいえば、アスペルガー障害）の息子がいる。彼との付き合いの歴史が、手紙に対する私の反応の背景にあることはまちがいない。そこで彼のことを少し語って

(1) 二〇一〇年三月現在。

(2) 『毎日新聞』二〇〇九年十一月七日付朝刊。

みようと思う。話は私事にわたるが、しばらくお付き合いいただきたい。

息子は生来の困難を抱えているわけだが、その困難をわかりやすい言葉で提示するのはなかなかむづかしい。最前「動き」のことを語ったので、運動を例にとろう。彼は小さい頃から運動があまり得意ではなかった。キャッチボールのような簡単な動作でも、どこかぎくしゃくしてしまふ。他人のスミーズな体の動きを見ても、それを全体としてとらえ自分の体で再現することができない。お節介な父親は、動きのポイントごとに指示を与えようとするのだが、むしろこれは逆効果で、文字通り「分解写真の1コマ1コマを真似て動きを再現しよう」というようなことになってしまふ。加藤被告が件の「推察」をしたと知ったとき、このかつての息子の姿が浮かんできた。

運動のことだけなら、ただの運動音痴ということではすんでしまふのだが、実はこれと同質のことが社会的場面でも頻繁に起こる。となるとはややシリアスになる。この場合、焦点となるのは他人の体の動きではなく、気持ちの動きの方だ。多くのアスペルガーの人と同じく、彼もまた他人の気持ちの動きとか思惑などがなかなかピンとこない。だから他人とのやりとりの最中に場ちがいにはしゃいでしまったり、相手の癪に障ることを平気で言ってしまう。あるいは周囲の状況や話の動きについていけずにボカンとってしまったりということがよくある。彼が小学生の頃、授業参観などに行くと、教師や同級生の話の盛り上がりによってまったくついていけず、土気色

をした顔の彼に出くわすことがよくあった。授業のテンションが上がれば上がるほど、つまり授業実施の観点から見ると、その授業がよい授業であればあるほど、彼の疎外感が増していったように思う。教師も同級生も彼のこうした事態にはまったく無頓着だった。この種の人間がいるということを想定すらしていないのだから、当然といえば当然なのだが、ならばせめて教師は「私は君たちみんなの味方です」みたいな顔をしないでほしい。そんなことを何度も思った。

息子はこのようにして、クラスの中の「宇宙人」のような存在として小学生時代を過ごした。実際「宇宙人」と名指されることもしばしばあった。かなりひどいストレスがかかっていたのではないかと思う。この種のストレスは一般に不登校などの反応を生み出しがちだが、彼の場合はそうはならず、逸脱的な行動の多発という方向に向かっていた。他人の所有物を盗ったり、壊したりといった行動である。この方向性は、アスペルガーに起因するというよりは、かけられたストレスの過大さと彼独特の旺盛な行動力によって形作られていたように思う。アスペルガーと逸脱の間には直接の因果関係はない。彼の場合、ともかくあちこちでトラブルを引き起こすので、親はそのたびに火消しと謝罪に走り、彼にも叱責と説教を繰り返した。だが何度それを繰り返しても少しも功を奏さない。彼には逸脱行動の問題性が今一つピンとこないようなのだ。そうしたわけで逸脱は収まることなく続き、そのことが周囲の冷たい視線をさらに強化するという悪循環が常態化した。

最初のうち「宇宙人」ですんでいた周囲の反応は次第にエスカレートし、高学年になると「死ね」「死んでこい」という言葉も飛び交うようになった。

ここまでが小学生時代の話で、この後も白眼視と逸脱の悪循環は延々と続く。年齢の上昇とともに逸脱の度合いも種類もより深刻なものになっていったのだが、ここでは詳しく述べる余裕がない。だが今から振り返ってみると、学校時代に彼が経験したトラブルは、たかが知れていたと思う。トラブルの本番は彼が学校を出て働くようになってからだった。よくいわれるように、現代の日本では、アスペルガー当事者にとって就労の困難はとて大きい。発達障害者支援法（二〇〇五年施行）によって都道府県に発達障害者支援センターの設置が義務づけられたが、きめ細かな就労支援まではほとんど手が回らないというのが実情だからだ。私の息子の場合も例外ではなく、高校を出て就労機会を探すようになってから、巻き込まれるトラブルや引き起こす事件の複雑さや困難は、学校時代のそれの比ではなくなった。親の方も、その延々と続くトラブルと事件につきあう過程で、（私の給与からすれば）多額の賠償金を支払うとか、遠隔地の警察署の留置場にいる息子に面会に行くとか、親として供述調書を取られるとかの経験をするようになった。当人は刑事罰を受けた経験はないものの、相当きわどい道を経て今日に至っており、その悪戦苦闘は今も続いている。

社会性の困難という観点

加藤被告のことに話を戻そう。彼のどこかちなさが気になるということの問題にしているのだった。ひと言でいえば、私は被害者・遺族の苦痛に対する加藤被告のどこかちなさに接して、とっさに私の息子のそれと同質のものを感じとったのだ。この人物を私の息子と同質の困難を抱えている人間として考えることもできるのではないか。そう感じとったわけである。以下では、便宜上、他人の苦痛や気持ちの動きがピンとこないといった事態を「社会性の困難」という言葉で表現することにした。

急いで付け加えなければならぬが、加藤被告の中に私の息子と同質のものを感じとるということは、加藤被告が自閉系の障害であるとかアスペルガーであるとかの診断上の主張をすることはいささかも関係がない。診断についての非専門家がそんなことを主張しうるはずがない。ここで企図しているのは、医学的な診断ではなく、加藤被告の生の条件を見定めるといったただそれだけのことである。そもそも加藤被告を社会性の困難という言葉で特徴づけること自体、客観的な証拠に基づいた議論ではない。この特徴づけを支えているのは、息子との経験を背景にもつ私の直観だけである。単なる憶測といわれても仕方ない話になっていくわけだ。ただ私としては、憶測にすぎないという非難は覚悟の上で、この直観にはこだわりたいと考えている。

いまここで行おうとしているのは、私の息子のケースを参照点にして加藤被告のこ

とを考えようという試みである。息子の社会性の困難は生来的なものだが、加藤被告の場合、それ（仮に「それ」があるとして）がどこから来ているかは、わからない。非生来的なものである可能性も十分に考えられる。その場合、息子とはまったく異なったケースということになるが、それでも加藤被告がいま現在この困難を抱えているのは、少なくとも私の目にはたしかに思えるので、そのことだけに焦点を合わせようと思う。つまり社会性の困難が生来的か非生来的かの判断とは切り離して、その困難それ自体を考える。これがここで私がとうとうとしている立場である。そしてこれが「息子のケースを参照点にする」ということの意味である。

秋葉原無差別殺傷事件あるいは加藤被告については、受験競争、家族関係、非正規雇用や「非モテ」のルサンチマン、ネット上の孤独などさまざまな角度から多くのことが語られてきた。⁽³⁾ルサンチマンということでは、たしかに加藤被告は、問題の手紙の中においても「皆様には夢があり、将来も明るく、また、温かい家族、恋人、友人、同僚などに囲まれ、人生を満喫していたところを私が全て壊してしまい、いくら悔いてもそれらが元に戻ることは無く、取り返しのつかないことをしてしまった。私にはそういうものはありませんので、それらが理不尽に奪われる苦痛を自分のこととして想像することができず歯がゆい」と書いている。自分には「そういうもの」が最初からないこと、それが苦痛を想像しえない理由だというのが彼の

自己理解である。「私にはそういうものはありません」というフレーズには、ルサンチマンの匂いがする。このフレーズからは、「初めにもっているから奪われるのであって、理不尽に奪われた者とはかつて幸せだった者の謂いにすぎない」という主張がかすかながら聞こえてくる。謝罪を目的とする手紙の中についこのような言葉が出てきてしまうわけだから、加藤被告がルサンチマンに深くとらえられている人物であることはまちがいない。

ただこれまでのところ、社会性の困難と彼のルサンチマンを結びつける議論は皆無であるように思う。問題の手紙をそのような角度から論じる議論にも出会っていない。なぜそういうことになるのか。ひと言でいえば、他人の苦痛がピンとこない人物の存在を想定することがむづかしいからではないか。ふつうの感覚からいうと、「社会性の困難」はたしかに相当に無理な想定だ。データを十分にもつ専門家でなければ、そのような断定など到底できない。それゆえ至極当然のことながら、多くの論者はその部分は素通りして、派遣労働、ネット社会、受験競争、孤独といったテーマを取り上げることになる。ところが、これも当然のことだが、これらの議論は、社会性の困難を素通りすることによって、社会性の困難についての一定の見解、すなわち「他人の苦痛を体感しえない人間などいない」という常識的な見解を表現してしまう。論者の意図とは無関係に議論自体はそのような効果をもってしまうのだ。このようにして常識は再生産されていく。そうである以上、加

(3) それらについては、たとえば、大澤真幸編『アキハバラ発—(〇〇年代)への問い—(岩波書店、二〇〇八年)などによって知ることができ

(4) 『週刊朝日』二〇一〇年二月六日号。

藤被告の社会性の困難に光をあてる議論にはそれなりの意味があることになる。

加藤被告のケースとそこから学ぶこと

社会性の困難という角度から加藤被告の人生を想像してみよう。それが相当に厳しいことの連続だっただろうことは容易に想像できる。彼はかなり知的能力が高いので、学校生活においては社会性の困難の大幅な露呈は未然に防がれていた可能性がある。学力価値に高い比重のおかれる学校生活は、知的能力に恵まれた人間にとって、住みやすい環境である。社会性に困難があっても、学力さえあれば、困難の目立ち方はそれだけ少なくなる。ところが一歩世間に出ればそうはいかない。労働の現場には、阿吽の呼吸、あいまいな指示、言外のニュアンス、場の雰囲気といった事象があふれている。これらのいづれもが、社会性に困難を抱える人間にとっては苦手な項目である。自身が元々もっている困難が一切の保護膜を奪われたかたちで露出してしまふ。加えて周囲の人間たちは、この種の項目がピンとこない人間が存在するなどという想像すらしていない。それゆえちよつとした行き違いは日常茶飯事だろうし、より深刻なトラブルが発生する可能性も高い。個々の状況における微細な軋轢の記憶は蓄積され、ついには人格そのものを問題にする視線が出てくる。そのようなプロセスの中で、「宇宙人」を見るような目で彼を見る人が出てきたとしても不思議ではない。

こうした経験は特定の職場での特定の人間関係を前提としたものではない。どこに行っても、だれと付き合っても、どんな仕事をしても、ほぼ確実に同質の経験が出来るしてしまう。この困難を抱える人にとって、世間それ自体が本質的に疎遠なものでありつづけるだろう。

社会性の困難という観点から加藤被告の経験をラフに想像してみた。もしこの想像が多少ともあたっているとすると、世間の総体に向けられた加藤被告のルサンチマンにも若干の根拠はあるということになる。世間の全体が彼を「員数外」とみなすことと、彼の世間へのルサンチマンは正確に対応している。もちろん、世間一般に対してルサンチマンを抱くことと、無差別殺傷事件との間には依然としてとても大きな隔たりがある。いくつもの偶然や加藤被告固有のさまざまな条件が重なって火花が飛び、隔たりは一気に超えられたのだろう。だがその詳細については今の段階ではわからないというしかない。ここで確認されたことは、社会性の困難の観点から加藤被告をながめると、彼の負のエネルギーの充填にはそれなりの理由があるようにみえるということである。

加藤被告のことを以上のように考えたうえで、私たちが今後留意しておくべき点を簡単に指摘しておきたい。社会性の困難を抱える人の特異性は、その人がどんな環境におかれるかに無関係に（どこに行っても、だれと付き合っても、どんな仕事をしても）発現すると先に述べた。この言い方は、現代日本の現実についての記述として

は疑いもなく正しい。だが普遍的に妥当する真理とどういうかどうか。社会性の困難を抱えた人がいたとして、その人が生きていない時代だったとしたら、と考えるみよう。今日のようにコミュニケーション能力などをうるさくいわない時代だとしたら、その人の特異性はさほど顕在化しないのではないか。あるいはその人の周囲にいる人々が、人間の特異性にとっても寛容だったらどうだろう。特異性にまゆをひそめるのではなく、特異性をむしろ評価するような人々だとしたら。少なくともトラブルは極小化するのではないか。トラブルがなければ、特異性は問題性としては顕在化しないことになりしたがって「社会性の困難」も少なくとも社会的には存在しないことになる。

いま述べたような仮定はたしかにやや空想的かもしれない。私たちが形づくっている世間なるものの現実には、右に仮定されたものとはあまりにかけ離れている。社会性の困難にまゆをひそめない人などどこにもいないようにみえる。だが現実が仮にそうであったとしても、世間の一員としての私たちにはそのような現実から一歩引いてみるくらいのことではできないのではないか。「他人の苦痛を体感しえない人間などいない」といった素朴な想定をカッコに入れてみる、「人間なら当然」とか「人間である以上あたりまえ」といった言明から距離をおく、といったようなことだ。そのようなスタンスをとる人が少しでも増えれば、「宇宙人」とみなされがちな人も多少は生きやすくなるのではないか。⁵⁾

(5) 池谷孝司編著、真下周著『死刑でいいです——孤立が生んだ二つの殺人』共同通信社、二〇〇九年）は、この稿でいう「社会性の困難」の観点から元死刑囚山田悠紀夫（十六歳で母親を殺害し、少年院を出た後、再び大阪で女性二人を刺殺）の生い立ちから犯行に至るまでの経緯を丹念に追った力作である。「社会性の困難」を抱えた山田が、学校時代やゴト師の世界で稼ぐゴト師の世界で生きていた）でどのような困難に遭遇し、どのような人的サポートを獲得・喪失してきたのかが、徹底しつたりサーチによって詳細に明らかにされている。なぜ犯罪に至る道が現実化し、その可能性つまり犯罪に向かわぬ道が現実化しなかったのかを問う著者たちの姿勢が、著作のすみずみにまで貫かれています。追力があふれています。

フロンティア ■ 高齢者はなぜフルマラソンを完走できるのか？ その秘密に筋肉から迫る ■ 増田慎也

SHINYA MASUDA

人間誰しも歳をとると筋肉の機能が衰え、運動能力が低下する…これは一般に固く信じられている「常識」である。

一般市民が参加するマラソン大会では、多くの高齢者が参加しているのみならず、途中リタイアする若者を尻目に見事完走している。高齢者のフルマラソンのタイムは決して速いものではない。しかし、長時間休まずに、延々と運動を続ける能力を高齢者は持っているのである。私はこの現象に非常に興味を持った。もちろん、フルマラソンの完走は日ごろのトレーニングの成果に他ならない。高齢でありながらフルマラソンに挑戦する人たちは、並みの若者よりもストイックに自己管理をしているに違いない。しかし、高齢者には、それだけではない何らかの秘密が隠されているはずだ。

そこで、高齢者の筋肉に関する論文を調べてみたところ、マラソンのように持続的な筋力発揮を行うような運動においては、高齢者のほうが若齢者よりも高い筋持久力を示すという論文を多数発見した。つまり、高齢者の筋肉は疲れにくいということである。さらに、興味深いことに、持続的な運動では、骨格筋内に蓄積される乳酸は、若年者よりも高齢者のほうが少ないことがわかった。乳酸は、糖質が筋肉で代謝（分解）されて運動エネルギーとなる過程で発生する中間生成物である。乳酸の蓄積は、糖質からエネルギーを得る代謝の流れの停滞、つまり、長時間の運動に必要なエネルギーが供給されていないことを意味している。また、乳酸の蓄積は（現在では否

定的な考えも示されているが）筋肉内を酸性化して筋収縮を妨げる作用を持っている。このようなことから、私は、加齢によって筋肉の性質が乳酸を蓄積させないように変化していくのではないかと、そして、そのために、長時間の運動が可能となるのではないかと考えた。

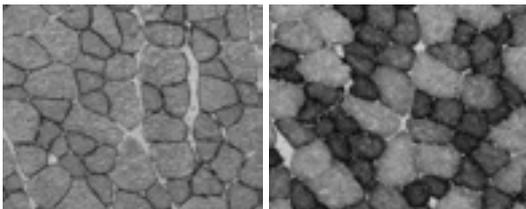
このことを確かめるべく、骨格筋の糖質代謝に関わる代謝酵素活性、および乳酸の輸送にかかわる乳酸トランスポーター（MCT）の発現量を、老齡ラットと若齡ラットの骨格筋を用いて比較した。その結果、老齡ラットの速筋において、代謝酵素パランスが、運動中の乳酸蓄積を抑制する方向に変化していることが確認された。速筋は収縮速度が速く瞬発力に富む一方乳酸代謝能力が低く、生成した乳酸の多くはMCT4を介して遅筋（収縮速度は遅いが持久力に富み、乳酸代謝能力は高い）へと輸送される。そして、老齡ラットの速筋では、MCT4の発現量が減少していることも確認された。これらの結果が示唆するところは、本来的には乳酸を細胞外に放出する性質を持つ速筋が、加齢によって、乳酸を自己処理する方向に変化してゆくということである。こうして、速筋から遅筋への乳酸輸送が減少すると、遅筋で大量の乳酸を代謝する必要がなくなり、結果的に遅筋でも乳酸の蓄積が抑制されると推察できる。

ここでタイトルの疑問に戻る。高齢者はなぜフルマラソンを完走できるのか？ 私が、実験結果から得た結論は次のとおりである。たとえば、ここに若者と高齢者がい

増田慎也（ますだしんや）一九七一年、大阪府生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程単位認定退学。京都大学博士（人間・環境学）。専門分野は筋生理学。



ラット長指伸筋横断面の乳酸トランスポーターであるMCT4（左）、および乳酸代謝に関わるコハク酸脱水素酵素（右）の染色。



る。どちらも自分の最大の六〇％の運動強度で走り続けたとしよう（もちろん、若者のほうが最大の運動能力は高いため、絶対的なスピードは若者のほうが速い）。普通の若者は、同じ六〇％強度で走ったとしても、高齢者に比べて筋肉に乳酸をより多く蓄積させてしまい、走り続けられなくなってしまう。一方、高齢者は乳酸をあまり蓄積させず、同じペースで走り続けられるため、時間はかかるが完走することができ。それでは若者はどうすればフルマラソンを完走できるのだろうか？ 当然、トレーニングすることによって、六〇％の強度でも無理なく走り続けることができるようになるのだが、五〇％あるいは四〇％強度と、乳酸を蓄積させない程度にまで走るペースを落とすのも一つの方法である。

つい最近、大阪府内の某幼稚園の園児達がフルマラソンに参加して完走しているという事実を知った。幼児は大人よりも運動能力が低い。そんな「常識」を覆す事実に驚くばかりである。もしかすると人間は生まれながらにフルマラソン程度なら楽に完走できるくらいの運動能力を持っているのかもしれない。幼稚園児はなぜフルマラソンを完走できるのか？ いずれはその秘密に筋肉から迫ってみようと思う。

参考文献

Shinya Masuda, Tatsuya Hayashi, Tatsuro Egawa, Sadyoshi Taguchi. Evidence for differential regulation of lactate metabolic properties in aged and unloaded rat skeletal muscle. *Experimental Gerontology*. 44:280-8, 2009.

筆者は、現在まで永井荷風をはじめとする明治三〇年代の日本人作家におけるエミール・ゾラの影響を考察することを主な研究課題としてきた。だが日本人作家を研究するのになぜフランス人作家の影響に注目する必要があるのか疑問に思われても不思議はない。

この疑問に答えるヒントは、荷風の『帰朝者の日記』に登場する宇田流水の次のような発言の中にある。「純粹の日本人から生れた純粹の日本文学は明治三十年頃までに全く滅びて了つた。其の以後の文学は日本の文学ではない。形式だけ日本語によつて書かれた西洋文学である」。そして流水は、みづからが「了解し得られぬ」とする「所謂若い書生によつて称道される自然主義の文藝」がその典型であると続けている。アメリカ・フランス外遊から帰国後、江戸文芸に傾倒していく荷風が江戸文学の研究者である流水にみづからの文学的位置を代弁させたところを言え、外遊に旅立つ前の荷風は、流水が嫌悪する「自然主義の文藝」を「称道」する「若い書生」に近かった。その初期作品において荷風はフランス自然主義の理論的支柱であったゾラから強い影響を受けた。当時まだフランス語を十分に読解することができなかった荷風は、ゾラの作品を英訳で読み、その理論や文学的实践に関して高度な理解を示し、その理解を自身の創作に応用した。

一例をあげてみよう。ゾラの文学において遺伝の法則は、共通の先祖を持つ集団の

成員が入れ替わり立ち替わり登場するという『ルーゴン・マッカール叢書』にとつて欠かすことのできない作中人物量産のためのシステムとして機能していた。それと同時に、その遺伝の法則は、「退化」や「隔世遺伝」といった今日では否定されている進化論的人類学（人間は「隔世遺伝」によつて人類より下等な動物へと「退化」という学説）と混じり合い、人間の野蛮な動物性や遺伝的宿命というテーマをゾラの作品にもたらした。それらの作品を読んだ荷風は、「遺伝」を作中人物量産のためのシステムとしては受容せず、人類に凶暴な動物性をもたらしものとして単純化する一方で、遺伝的宿命に関しては、当時の日本社会の中で重要な問題であった「家」の宿命性へと変奏して作品に取り込んだ。

ところで流水の発言の一部——「形式だけ日本語によつて書かれた」——が意味するものは必ずしも明白ではない。ある言語を選択すると必然的に物語の形式が決定されるならば、この部分を「日本語に特有の形式を備えた文学」と解釈することができなくもない。だが、「地の文」と「会話文」との関係や描写の技法などの物語の形式的特徴は、作家の用いる言語によつて自動的に決定されるものではない。事実、その初期作品において荷風は、空間描写やストーリー展開の技法など広い意味で物語の形式の特徴とみなすことができるものを大いに取り込んでいるし、より厳密な意味においても、ゾラの原文にみられる自由間接文体——「直接話法」と「間接話法」の中間の

林 信蔵（はやししんぞう）
一九七九年京都市生まれ。
二〇〇九年京都大学人間・環境学研究所博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。現在京都大学非常勤講師。専門は日仏比較文学・比較文化史。主な著作は『永井荷風・ゾライズムの射程』初期作品をめぐって（春風社、二〇一〇年）。



荷風が読んだゾラのL'Euvreの英訳書 E. A. Vezetelly訳 His Masterpiece (Chatto and Windus, 1902) の扉ページ



ような文体——を用いた語り（英訳で）理解し、自身の日本語の語りのなかに組み入れている。そのうえ荷風は外遊後もこれらゾラから得た物語の形式的特徴をより洗練させながら自身の創作に用い続けた。

このように見てくると「形式だけ日本語によつて書かれた」文学とは（「言語」形式だけ日本語で、あるいは「日本語」によつて書かれた文学」と解釈するのが最も自然となり、それゆえにまた、流水は明治三〇年代以降の日本文学は「日本語で書かれているが内容も形式も西欧風の文学」と主張しているのだと理解できる。しかもゾラから得た物語形式を帰国後も利用し続けた荷風自身は流水の批判から完全に逃れていないことにもなる。

むろん、流水の主張は荷風の意見の一面を誇張したものである可能性が高いし、明治三〇年代を機に日本近代文学から日本的なものがすべて失われたとは考えにくい。しかしながら、日本が明治以降、西欧を憧憬しながら近代化を進めていた経緯を考えると日本の文学作品には西欧的要素が多く含まれているのもまた事実である。この意味において日本近代文学の日本近代文学性を解明するためのひとつのアプローチとしては決して無益ではなく、とりわけ明治二〇年代から三〇年代において日本の文壇に大きなインパクトを与えたゾラの影響を考察することは、日本近代文学の総合的理解のために無視することのできない課題なのである。

陰翳の地、陰翳の学 ——ドイツ、ダルムシュタットより

久山雄甫

YUHO HISAYAMA



1982年、京都生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究所およびダルムシュタット工科大学哲学科博士課程在籍中。ダルムシュタット実践哲学研究所共同研究員。主要論文に「ゲーテとフィッチーノのスピリトゥス論」『モルフォロギア』30号(2008)、「Verwandlungen des Lebendigen. Metamorphose im Wandel」, in: blaue reiter 29 (2010) など。

「形象ゆたかなイタリアから、姿かたちを感じづらいドイツへと、私は帰ってきていた。晴れ渡った天は、陰鬱な空に取って代わられてしまった⁽¹⁾。憧れの南国から戻った感想をゲーテはこう表現したけれど、自分の体験を振り返っても、たしかにこちらの天気は、陽というよりは陰の雰囲気に満ちている。いや、思い起こせば晴天の日も少なくないのだが、重苦しい灰色の雲の印象がどうも強い。それでも私が住んでいる南ヘッセンの気候は、他の地域と比べれば恵まれているとのこと。北方や山間の気象が一体どれほどのものか、推して知るべし、である。

ただ、陰翳をはらむ北の大地に戻ってこ

なければ、ゲーテが『色彩論』——どの文学作品よりも彼自身が誇りとした著作——を完成させることはなかったかもしれない。というのも彼は、イタリアで目にしたような原色の純粹な輝きではなく、「くもり」を通じて生まれる光と影の戯れにこそ色彩現象を見て取ったからだ。光と影を対立する二つの原理ととらえ、そのあわいに生ずる明暗を無視するようなやり方では、色の世界を単純化することはできても、その真の姿を捉えることはできない。こう考えるゲーテは、光の波長ではなく陰翳の深みに「彩」を見出したのである。

どんよりとした曇り空の下で自然の現われを捉えた先人に思いを馳せつつ、哲学の世界に目を向けると、茫洋として捉えがたい「雰囲気」現象に注目する思想潮流がドイツを中心に展開してきたことも、この地の風土との関わりから考えたい。雰囲気についての哲学的考察は、フーベルトウス・テレンバッツハ、ヘルマン・シュミッツ、ゲルノート・ベームらの研究によって一六〇年代から少しずつ展開し続けており、根強い批判も含めてドイツ哲学界では一定の広がりを見せてきた。

こうやって話を広げるのも、ここダルムシュタット工科大学での私の研究テーマが、「雰囲気の現象学」を土台として日本語の「気」が指し示す現象を捉えることにあるからだ。実際、先に名前を挙げたベームら雰囲気論者たちによっても、日本語の「気」は少なからず注目されてきた。ここで問題になるのは、東洋医学や武術における「気」だけでなく、この語の身近で

日常的な用法が指し示す雰囲気の経験である。たとえば、「気が合う」仲間とのあいだに親密な雰囲気が広がる——こう言うとき、語られているのは自分の感情だけではなく、気がひとつのリズムのなかで共鳴し合う、極端になれば自分と相手のあいだの境界線すら曖昧になる経験である。ひとつの気圏の中での一休感と忘我、そこには恍惚の至福も熱狂の危険も潜んでいる。あるいは、ふと会話が续かなくなると「場の空気が凍り付いてしまうとき、何とも「気詰まり」な感覚を持ったことは誰にでもあるにちがいない。相手と自分とのあいだに流れる気脈が途絶えてしまつて、なぜか通じない。物理的にはすぐ隣にいる人かたまた遠く、どんな言葉も届かないところについてしまう。そんな時、雰囲気は重く動かしがたいものとしてその場を凍てつかせる。これらの現象は、客観化したり数値化したりできるものではない。しかし、か



曇り空の下にやすらうダルムシュタットの街並み

(1) Goethe: *Schicksal der Handschrift*, in: *Die Schriften zur Naturwissenschaft (Leopoldina Ausgabe)*, Abt. I Bd. 9, Weimar 1954, S. 62.
 (2) 一七四九—一八三二年。ドイツ語圏を代表する詩人、作家であることはもちろん、形態学と色彩論を中心とする自然研究でも知られ、さらには政治家、建築家、画家という顔ももつ万人。一七八六年から翌年にかけて行われたイタリア旅行(第一次)の様子は、彼自身が三〇年ばかり後に回想して紡いだ名文『イタリア紀行』によって知られる。
 (3) 一九一四—一九四年。ハイデルベルク大学を中心に活躍した精神科医。大著『メラソコリー』で広く知られる。小著『味と雰囲気』で雰囲気概念を学術用語として取り上げ、ここでテレンバッツハは、ハイデルベルク大学の同僚であった木村敏の影響の下、すでに日本語の「気」に言及している(邦訳『味と雰囲気』みすず書房、一九八〇年六五頁)。
 (4) 一九二八年生まれ。キール大学で長く哲学主任教授をつとめた。一九六四年から書き続けられた『哲学体系』によって「新現象学」の立場を鮮明に打ち出し、今日のドイツ哲学界において新しい潮流を形成するに至っている。
 (5) 一九三七年生まれ。ダルムシュタット工科大学で哲学主任教授をつとめた。一九九一年の著作『雰囲気』においてシュミッツの雰囲気概念を批判的に受容し、のちの議論の足場をつくる。日本文化にも多大な関心を持っており、京都大学人間・環境学研究所にも客員教授として在籍したことがある。
 (6) この点について、「気」は実体と属性を基本とするアリストテレス的存在論では捉えられないが、シュミッツが



マチルダの丘に並び立つユーゲント・シュティルの建築物群

とってこれらは私の個人的で主観的な内面感情にすぎないわけでもない。自分がその気分と一体化していなくとも、私はその場の気分を感じすることはできるので、だから「空気」は私の内面世界にあるわけではない。あたかも明暗のスペクトルの中で戯れる色彩のように、内界と外界のあいだで揺れ動く現象の経験を掬い上げようとするとき、「気」という伝統的語彙にこめられた現象のカテゴリ化についての洞察は、一つの有力な手がかりになる⁽⁶⁾。

ドイツ語に「気」に対応する語彙はない。しかしこの言葉で語られる経験そのものは、文化の違いを越えて理解可能なものではないか。私は現在、ダルムシュタット実践哲学研究所で一般向けの哲学ゼミを開講しているが、ここでのワークショップの成果からも、いま例を挙げたような日常的な「気」の経験をドイツ語で伝えることが、ある程度までは可能であることを確信できるよう

になった。もちろんドイツ語で「気」について語るとき、それは日本語とは違った文脈の枠内で受け止められる。それは仕方ない、どころかむしろ、このような文化的変容はあつてしかるべきで、純粋文化の存在を求める極端な姿勢こそが逆に危険を孕みうることは、すでに幾度も歴史が証明しているように。ただその一方で、既知の思考の枠組みから自由でありうる精神が、根底的な異文化理解には必要であるにちがいない。「気」でも何でもよい、ある言葉を目の前にしたとき、なじみの思考シエーマに収監してしまうか、あるいはそのシエーマに合わないからといって直ちに理解をあきらめてしまうか、という二分法に陥ってしまえば、他者との出会いは貧しくなる一方だ。一昔前に喧伝されたような「文明の衝突」を避けようとするならば、政治や経済における安全保障はもろんながら、思想の面においても、ゲートが提唱した「世界文学」の理念にも見られるような、文化の個性性を保持したままに昇華させる異文化交流が必要になる。

ここでふと思いつくのは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてダルムシュタットに花ひらいた芸術運動のことだ。今日と状況は違うけれども、ここにもまた、異文化交流の明暗が象徴的に垣間見られる。せっかくの機会なので、最後に我が街一番の見所を紹介して当コラムを閉じることにしたい。

街の中心であるリーゼン広場から東の方向へとしばし歩くと、見慣れない建造物がそびえる一角が見えてくる。マチルダ

の丘である。一八九九年、ヘッセン・ダルムシュタット大公エルンスト・ルードヴィヒの肝煎りでこの丘に建設されたのが、ダルムシュタット芸術家コロニーだ。ペーレンスやオルブリヒなど、ユーゲント・シュティルを代表する芸術家たちがかつてここに住み、互いに切磋琢磨しあつた。ルードヴィヒの母アリスはイギリス王家出身、かのヴィクトリア女王の娘である。このことも手伝つてか、ルードヴィヒはブリテンに花ひらいたアーツ・アンド・クラフト運動に啓発され、芸術の力によって自国の生の質を高めようとした。その理念を宿したマチルダの丘では、二〇世紀初頭に四度の展覧会が開かれ、結婚記念塔を筆頭とする華々しい建築計画も実現した。しかし第一次大戦の勃発によってコロニーは解体し、ドイツにおけるデザインの潮流はバウハウスへと移っていく。わずか一五年ほどの、儂いきらめきであった。

ものづくりに秀でたダルムシュタットは第二次世界大戦で格好の標的となり、皮肉にもイギリス空軍の空襲によって壊滅的な打撃を受けた。しかし、工科大学や重イオン科学研究所、ヨーロッパ宇宙管制センターなどの学術機関をはじめ、ダルムシュタット夏季現代音楽講習会の実施、第二次芸術家コロニーの企画、アドルノ、ハイデッカー、オルテガらも参加したダルムシュタット話会の開催など、芸術と学問の都市としての息吹はいまも絶えていない。立ち止まって、その雰囲気に耳をすましてみ。

街は今日も曇り空である。

提唱する「準物体」概念を援用することでその理解がすむこと、また「気」のあらわれは五感による知覚よりもむしろ共感覚によって感知され、さらには身体感覚における収縮と膨張の動きのなかで感じ取られることなどを現在では検討している。

(7) <http://www.ripdh-darmstadt.de/index.php?content=main> (ドイツ語ホームページ)。

(8) 一九世紀末から二〇世紀初頭、いわゆる世紀転換期にドイツやオーストリアで花ひらいた美術様式。フランスにおける「アール・ヌーヴォー」やスペインにおける「モデルニスモ」と同義的に捉えることができる。ペーレンスはミュンヘン分離派オルブリヒはウィーン分離派の出身で、両人とも後年、産業と芸術の一致を目指したドイツ工作連盟のメンバーとなった。

(9) ジョン・ラスキンの社会改革思想に影響を受けた「モダンデザイン之父」ウィリアム・モリスが主導した芸術運動。ヴィクトリア様式と産業革命に対する批判から、中世的な手工芸の復興、生活の芸術化などを主張し、近代デザインの先駆けとなる。イギリスに於いてヨーロッパはもろん北米やオーストラリアの芸術家たちにも多岐にわたる影響を及ぼした。

(10) 一九一九年、ヴァイマルに設立された造形芸術のための学校を祖とするデザイン運動。グロピウス、カンディンスキー、クレー、モホリナギ、ミース・ファン・デル・ローエらが綺羅星のごとく所属し、近代デザイン運動を画するマイルストーンとなる。学校は政治的理由から一九二五年にデッサウに移転、後年さらにベルリンに移ったのち、三三年にナチスによって閉鎖された。

歴史学が人類学と出会うとき

エレナ・グラヴァツカヤ

ELENA GRAVATSKAYA



エレナ・グラヴァツカヤ (Elena Gravatskaya)
ロシア連邦、エカテリンブルグ市 (旧スヴェルドロフスク市) 生まれ。ウラル国立大学にて、1992年、準博士号 (歴史学)、2007年、博士号 (歴史学) 取得。ウラル国立大学歴史学
科教授。2009年10月から3ヶ月間京都大学人間・環境学研究所招聘教授。専門は歴史学、
歴史人類学、宗教学 (とくにハンティ・マンシ研究)。著書に、Religioznye traditsii Khantov
v XVII-XX vv. (RA-Artmedia, 2005), Mansi religious landscape in long historical perspective
(Sacred Landscape of Siberia, University College of London, 2007), Khanty Society and
Gender Relations (Circumpolar Lives and Livelihood, University of Nebraska Press, 2005.)

京都大学大学院人間・環境学研究所にお
招きいただいたこと、本当に嬉しく、また
感謝しております。まえにも国際会議やセ
ミナーで日本に来る機会がありました。今
回はまた違ったかたちで日本の文化と習
慣により深く浸ることができました。

ソビエトの教育制度

私は一九八三年にソビエトの作家マクシ
ム・ゴーリキイの名を冠するウラル国立大
学歴史学学科を卒業しました。主専攻が歴
史、副専攻は医学、というのは変わった組

み合わせですが、これは冷戦下のソビエト
の教育制度によるもので、学生はどんな分
野でも専攻できましたが、だれもが非常時
に役立つ科目の訓練を受けることを義務づ
けられていました。歴史学科の男子学生は
軍事科目が必修で、歴史の教職資格と尉官
の資格をとって卒業し、女子学生は医学を
学んで看護婦の資格をとらなければならま
せんでした。男子学生は軍事科目を嫌っ
て優秀な教育将校をからかったのですが、
女子学生のほうは将来の家庭生活に役立つ
医学と看護学から恩恵を得ました。

規格化されていたのは他のカリキュラム
も同じです。歴史の講義はすべて歴史の発
展過程にそって行われ、考古学からはじ
まって(原始社会)、古代史、東洋史、民
族誌、中世史、近・現代史へと至ります。
大学にはいると、学生は自分の研究分野と
専攻を選び、それから実習を受けます。考
古学の発掘作業にひと月(いまでも、ウラ
ル、ノヴゴロド、シベリア、クリミアに発
掘旅行を行っています)、博物館での実習
にひと月、文書館での実習にひと月、そし
てひと月が学校での教育実習です。このよ
うな実習を通じて、将来歴史家として生き
ていくための幅広い視野を身につけるわけ
です。このような伝統は今もつづいていて、
ウラル国立大学の学生は入学すると、考古
学の発掘作業に参加しなければなりません。
卒論、たとえば国際連合の歴史に関する卒
論を準備している学生が、ウラル地方にあ
るタイガの石器時代の遺跡をスコップで掘
り起こすことから最初の学問的インパクト
をうけたということも珍しいことではない

のです。同級生と森のキャンプで過ごすひ
と月のスリリングで、ロマンチックなこと
といったら! 友と過ごす夜のテント。焚
火を囲む歌声。経験豊かな先輩や教授たち
との語らい。炊事は屋外でしなければなり
ません、雨にも降られます。野生の動物た
ちや何百万もの蚊の大群。でも、こうした
過酷な条件でさえ、わたしたちの時間を忘
れ難いものにしてくれました。

民族誌学者の「十戒」

考古学者には、夏が終わる八月一五日
を考古学者デーとして祝う習慣がありま
す。この日は太平洋からバルト海まで、国
中でお祝いをします。当日は公式プログラ
ムのほか、上級生や教師による専門技能の
コンテストや演劇も催されるのがふつうで
す。祭は、新入生が考古学者となるイニシ
エーションの儀式、祝いの宴、ギターの演
奏、焚火のまわりの合唱へとつづいて最高



ウラル国立大学



シベリアで発掘調査中の学生たち (2008年)

※ 訳文の作成にあたっては、
国立民族学博物館機関研究員
の藤本透子さんにお問い合わせし
ました。

潮に達します。

学生時代、私は主に民族と宗教の問題に関心をもっていました。ソ連邦では民族誌学や人類学は独立の学科としては認められていなかったので、この分野の研究を志す者は一番近い「革命前のロシア史」の講座に登録するのが常でした。民族誌学がこのような扱いをうけたのは、二〇世紀の民族誌的現象がいわゆる「暗黒の過去」の遺物にはかならず、革命前史として学ぶべきものとする共産主義思想のためでした。そういうわけで民族研究は同時代の観察よりはむしろ歴史的史料に依拠して行われました。

皮肉なことに帝政期ロシアとソビエト時代初期にはフィールド調査に多くの関心ははらわれていました。「北方民族誌学」は一九二〇年代の学生のあいだでとても人気があり、民族誌学者になるために競い合ったほどです。どの学生もシベリア先住民の間で一年間フィールド調査を体験し、先住民語についての知識をもっていました。民族誌学者は調査するだけでなく、研究対象とする民族の生活条件を改善しようともしました。レオ・シュテルンベルクはもっとも高名かつ敬愛された学者の一人で、民族誌学の重要性と民族誌学者固有のアイデンティティの必要性を強調するためにいわゆる「民族誌学者の十戒」なるものを作っています。学生はイシニシエーションの儀式でこの戒律に敬意を表して宣誓しなければなりません。戒律は有名な聖書の十戒にならって作られました。

シュテルンベルクの民族誌学者の十戒

- 一 民族誌学は人文学の王者である。というのとは過去と現在のあらゆる民族あらゆる人類を研究するからである。
- 二 民族、宗教、文化を問わず自分自身を偶像化してはならない。ギリシア人とユダヤ人、白人と有色人とのあいだにはいかなる根本的相違も存在せず、民族はすべて平等であると心得よ。一つの民族しか知らない者はどの民族も知らず、一つの宗教しか知らない者はどの宗教も知らないのと同じである。
- 三 民族誌学を出世主義によって汚してはならない。民族誌学者になれるのは、人類とあらゆる民族集団の研究にためまぬ愛を示す者だけである。
- 四 六日間働いてあらゆる作業を行い、七日目にそれをまとめよ。
- 五 先人と師を敬え。そうすればあなたの功績も敬われよう。
- 六 事実に反する誤った証言をしてはならない。表面的で不正確な概括あるいは未熟な結論によって科学を殺してはならない。
- 七 あなたの専門である民族誌学を裏切つてはならない。民族誌学の道を選んだ者はその道からそれてはならない。
- 八 剽窃してはならない。
- 九 あなたの隣人である他の民族、彼らの習慣や儀礼、慣習、伝統などについて誤った報告をしてはならない。隣人を自分以上に愛せよ。
- 十 研究している民族に自分の文化を押し

付けてはならない。彼らの文化がいかなるものであるかと、慎重に注意深く、愛と配慮をもってそれにとり組め。そうすれば彼らは自分の文化をいっそう高めることになろう。

このような戒めのいくつかはあまりにもナイーブで、今日からみて差別的な点があると思われるかもしれませんが、しかしこの戒律が、シベリア先住民民族の研究に生涯をささげ命さえ落としたソビエトの民族誌学者を数世代にわたって鼓舞してきたのです。

「科学的無神論」と宗教研究

宗教研究についていえば、ソビエトではどの大学でも「科学的無神論」が必修科目になっていました。ウラル国立大学ではウラル地方の宗教弾圧で出世したKGB（国家保安委員会）の大佐がこのコースを担当していました。このKGB

B版でさえとても魅力的な科目に思えました。当然ながら無神論イデオロギーを標榜するソビエト連邦では学生が宗教の問題に興味をもつ機会はそう多いとはいえ、公式的には、宗教はやがて死滅すべきもの、宗教性は田舎の僻地に住む無教育な「遅れた」人々のものとされてきました。宗教問題の研究は大学教授には概して支持されませんでした。



「旧信徒」の書籍（ウラル国立大学考古学調査隊の収集品）

た。宗教的なテーマでは、宗教批判や反宗教宣伝が主要目的でなければ、簡単に学位が取れないと考えられたのでしょうか。

それでも例外はありました。そのひとつが分離派信徒の歴史です。彼らは国家による教会改革ののち、一七世紀にロシア正教会から分かれた東方キリスト教の一派で、この改革を反キリスト教的と考えて認めず、旧来のやり方をまもろうとしたので「旧信徒（Old Believer）」と呼ばれました。ロシア政府や公認教会とその聖職者に終始敵対しつづけたために支配者から激しい弾圧をうけました。「旧信徒」たちは逃げて遠い僻地に隠れることを選びました。ウラルはそういう地域のひとつであり、そこに住みついて来たるべき終末を迎える心の準備をしながら、彼らは自分たちの信仰や伝統、一七世紀の生活様式や衣服やことばや書籍やアイコンをまもってきたのです。

「旧信徒」が反政府運動を主張したために、ソビエトの歴史家はこれを研究にふさわしいテーマだと考えました。しかしそのばあいでも研究対象の選択には一定のルールがありました。フィールド調査で私たちは「旧信徒」と「旧信徒」の書籍印刷の歴史を調べました。その結果、ウラル国立大学の考古学調査隊は一六世紀から二〇世紀までの古い活版印刷本と写本を五千点以上収集し、現在それは歴史学科で保管され研究されています。彩り豊かな挿絵で飾られた逸品があるかと思えば、大きくてずっしりした本もあり、マッチ箱より小さな本もありました。実り豊かな成果を上げたあの調査から戻ってテレビのニュースで取材

をうけたとき、宗教用語は一切使ってはならないと注意されました。そこで私たちは、収集した書籍についてしゃべり、それらがいかに貴重で古く、美しい装丁が施されていたかは言いましたが、それらが聖書や福音書や聖歌のコレクションだったことは黙っていました。

ソビエト体制のなかで育ち教育されれば、こうしたこととどうつきあい、また扱うべきかを学ばなければなりませんでした。「旧信徒」に興味をもった学生時代の同僚の何人かは、仕方なく研究テーマを活版印刷の伝統に切り替え、その分野で著名な研究者になりました。私はアメリカ・インディアンに夢中だったので、研究テーマをそれに近いシベリア先住民にしました。フィールド調査はやるうにもやれなかったので、妥協して歴史研究にしました。大学院では「一七世紀シベリア先住民に対するロシアの国家政策」という論文を書いて学位をとりました。行政、課税、キリスト教化政策などを扱ったものですが、もともとこころひかれたのは先住民とキリスト教との出会いでした。

新時代における先住民のフィールド調査と国際共同研究の開始

時あたかも激動の一九九二年。私は自分が生まれたその場所、その家に住んでいたのですが、そこでそのまま新しい市民権を獲得しました。かつてのソビエト連邦が解体してロシア連邦となり、生まれたスヴェルドロフスク市はもとのエカテリンブルグ市になりました。スヴェルドロフスクは戦

略的軍需産業のために外国人の訪問は禁じられていたのですが、いまは開かれ、私たちははじめて国外の研究者と交流できるようになりました。こうした変化のおかげで、シベリア先住民についてフィールド調査をはじめますチャンスが与えられたのです。トナカイの牧夫や漁師や猟師―古文書館に保存されていた史料を使って数年来研究してきた民族の子孫である彼らに会ったときは、たいへんなカルチャーショックでした。「旧信徒」との交わりから得た経験がシベリア先住民ハンティの宗教的伝統の研究に役立ちました。一七世紀から二〇世紀に至るハンティの宗教的变化をテーマとして二つの学位論文（ロシアで教授になるには二つの論文審査にとおらなければなりません）を書き、資料の分析、宗教的伝統の復元、国家政策、長大な歴史的視野に立ったハンティの宗教的变化の分析を行いました。

ロシア内外の新たな政治状況は国際的専門家集団との共同研究を可能にする利点をもたらしました。一九九八―一九九九年のノルウェー科学アカデミー高等学術研究センターが主催する国際共同研究プロジェクト「シャマニズム―危機に瀕する宗教言語」に参加する幸運に恵まれ、そこで初めて京都大学から来られた山田孝子教授とお会いしました。その後二〇〇〇年に



ハンティにおけるフィールド調査（1995年）

は共同でハンティのフィールド調査を行い、宗教の現代的状況についてお互いの関心が高まっていったことから、私は「シベリア先住民族における民族的・宗教的再活性化に関する比較研究」プロジェクト、とくに、「オビ川流域とウラル地方における民族的・宗教的復興——伝統の再発見か、持続か、変化か」というテーマを分担するため、招聘教授として京都大学に来ることになったわけです。

私は、アメリカ先住民出自の研究者リチャード・ホワイトが提唱した「中間領域(Middle Ground)」概念や、「宗教的環境(Landscape)」および「歴史民族的マップ(Ping)」といった新しい調査法を利用して、過去と現在の北西シベリアおよびウラル地方の異なった先住民にみられる宗教的現象の主要形態について調査するという計画をたてました。現代社会における伝統文化の持続と共存という観点から、日本の人類学的・歴史民族的伝統を研究したいと考えたのです。

京都での体験

京都滞在中、文献や歴史史料を分析し、シベリア先住民とウラル地方諸民族の民族的・宗教的再活性化の様態を細かく調べるとともに、ヨーロッパとアジアで進行中の類似のプロセスを調べ、民族的・宗教的アイデンティティが表出されるさいの類似性を見出そうとしました。このような研究は世界的規模で生じている民族的動向についての新たな知見をもたらしてくれました。

宗教的覚醒のプロセスは宗教の再活性化をうながし、時には「伝統の再創造」がもめられることもあれば、宗教の持続性が強調される場合もありました。宗教的持続性のもつとも顕著な例が現代日本の宗教的状況であり、こうした現象についての理解を深めようとして、私は参与観察と映像人類学の手法にもとづくフィールド調査を一月から二月まで行いました。京都大学の院生とでかけた鞍馬の火祭や御陵の秋祭り、京都の社寺巡り、山田孝子教授と行った二日間の高野山での調査などがそうです。

京都滞在中にとりくんだもう一つのテーマは現代的アプローチによるシベリアその他の先住民の宗教的伝統の研究です。例えば、さまざまな方法論、とりわけ「先住民の視点に立った方法論」、「中間領域」、「文化的環境」といった方法論を検討し、それらを、シベリアにおける宗教的出会いの歴史に適用してみることに。現在、私はウラルとシベリアのマンシ、ハンティ、ネネツの歴史的・宗教的環境復元の過程と方法について論文を書いています。

プロジェクトの主要課題にしたがって、社会人類学と民族史という現代的方法もいちいたアーカイブ資料の分析、なかでも一九二六―二七年の極地統計というユニークな資料の分析を通じてマンシの宗教的環境の諸要素を復元する仕事にとり組んでいます。過去と現在のウラルおよび北西シベリアの宗教的環境のコンピュータマップを数枚つくったのはその一環です。

招聘教授として滞在中、大学で開催された「人類学の未来と民族学博物館」、「映像

人類学の最前線」といった国際シンポジウムにも参加できました。また院生ゼミにも参加しましたし、日本文化への理解を深めようとして日本語の授業にも出席しました。どれも本当に楽しい体験でした。

その成果は人間・環境学研究科の国際交流セミナーや院生ゼミなどで発表しています。またポスト・ソビエト時代のロシアや、旧ソ連から独立した各共和国における、先住民の宗教に関する研究プロジェクトについて院生から相談をうけることもありました。

プロジェクトの成果は、ハンティ、ネネツ、マンシ、マリの宗教的環境について二〇一〇年に論文で発表し、また二〇一〇年八月のハンガリーにおける第一一回フィン・ウゴル国際会議や二〇一〇年一〇月のハンティ・マンシスクにおける第三回国際北方考古学会議でも発表することになっています。

世界的規模で生じている宗教復興の動きをよりよく理解するためのユニークな機会を与えて下さったことに対し、この場を借りて京都大学と人間・環境学研究科にお礼を申し上げます。この大学で私が学生の皆さまの役に立っていればよいのですが、それからまた京都大学の伝統もウラル大学で紹介したいと考えております。ロシアの学生は歴史学についてはしっかりした専門的技能をもっていますが、人類学については残念ながらそうではありません。歴史学なくして人類学はありえず、人類学なくして歴史学はありえません。私たちはバランスを保たなければなりません。

ファッションと芸術

蘆田裕史

HIROSHI ASHIDA



近年、ヨーロッパで、公立学校においてイスラム教の女性が身に付けるスカーフを禁止する、いわゆる「スカーフ禁止法」を制定する国や自治体が増えてきている（実際には大きな十字架なども禁止している）で、話はそう単純ではないのだが。もちろんこの法案には大きな反発が生じたが、このことは宗教のみならず、衣服とそれ自身に付けるもののアイデンティティの問題でもある。このような政治的・宗教的な問題までいかずとも、わたしたちの生を規定するもののひとつとして衣服があることは否定しえない事実である。わたしたちは自らの意志のみで衣服を選択するわけではない。学校や特定の職業における制服、サラリーマンのスーツなどがそのいい例である。あるいはジェンダー／セクシュアリティの問題とかかわる男性服／女性服という概念など、衣服はさまざまな問題をはらんでおり、しかもその多くが複合的なものである。イスラム教のスカーフは民族衣装のものとして宗教的・政治的な問題にとどまるかといえは、そうではない。現代のムスリムの女性がファスト・ファッションとよばれるブランドで衣服やスカーフを購入していることからわかるように、現代のファッションとも切り離すことができない。こうした問題について、たとえばオランダ

のアート・プロジェクトが『mslm』(図1)というまさにムスリムの女性ファッションをテーマとした雑誌を出版し、問いを投げかけているように、美術関係者がファッションの問題に取り組むことがしばしばある。

よく知られているように、ファッションが学術的な研究の対象となったのはごく最近、おおまかに言えばロラン・バルトが『モードの体系』を著した頃からだといえよう。確かに、それまでもゲオルク・ジンメルのような社会学者が「流行」という現象を論じたような例はいくらかあるものの、それは多様な側面を持つファッションの一部でしかない。現代のファッションの基礎が成立した一九世紀後半以降、より広い視野を持ってファッションの問題に取り組んできたのは実は芸術家なのである。

おおよそ十九世紀の中頃までは、画家にとって衣服は貴族の奢侈、あるいは階級や富の顕示のためのものであった。その一方で、画家にとつて衣服は単なる風景としてしか表されないのであったといっても過言ではないだろう。つまり、絵画に衣服が描かれていたとしても、それはその人物の階級や地位、職業、あるいは季節や当時の流行を示すもの、つまり衣服を身にまとった人間の外的な要素の表象でしかなかった。

蘆田裕史（あしだ ひろし）
一九七八年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程研究指導認定退学。現在、日本学術振興会特別研究員P.D。専門は服飾史・美術史。著書に篠原資明編著「現代芸術の交通論」（共著、丸善、二〇〇五年）など。

しかしながら、状況は少しずつ変わってくる。それはアーツ・アンド・クラフツのように近代デザインの誕生に関わった芸術家たちが日常着を改良しようと、自ら衣服を制作し始めたことに起因する。そして二十世紀に入ると、その動きはいっそう活発になる。とりわけイタリヤの芸術運動である未来派は衣服にさまざまな視点をもちこみ、きわめて興味深い発言を少なからず残している。

フランスの新聞『フィガロ』紙に「未来派宣言」を発表することにより運動の開始を告げた未来派は、その活動の中で数多くの宣言を発表し続けたことで知られるが(図2)、そこには衣服や流行についての宣言も少なからず含まれていた。未来派の画家、ジャコモ・バッツラ(一八七一〜一九五



図1 mslm, Rotterdam, Veenman Publishers, 2007

(1) Giacomo Balla,
"Le Vêtement Masculin
Futuriste," Milan, 1914.
(2) プランツが新作を登
表する場



図2 Filippo Tommaso Marinetti,
"Le Futurisme," Le Figaro, Paris, 20
Feb 1909



図3 Giacomo Balla, "Le Vêtement Masculin
Futuriste," Milan, 1914

八)が一九一四年に発表した「未来派男性服宣言」(図3)で提案された未来派衣服は次のような一一の特徴をもつものとされている。

「ダイナミック」、「アシンメトリー」、
「軽快」、「単純で着やすい」、「衛生的」、
「陽気」、「光り輝く」、「意志の強い」、
「飛べる」、「耐久性のない」、「可変的」

意味をつかみにくいことばもあるが、ここから読み取れることのひとつには、未来派にとって衣服の機能が重視されていたことが挙げられよう。それは「軽快」「単純で着やすい」「衛生的」といった語句から窺える。運動としての未来派が目指したのは、伝統的な芸術を唾棄すべきものとして否定しつつ、新しい芸術によって社会変革を行うことであった。そのことを鑑みれば、それまでの非活動的な衣服を否定し、機能的な衣服を求めたことは容易に理解される。しかしながら、彼らが機能的な衣服を求め

たことには、より重要な意味がある。未来派は社会変革を目的としており、芸術はそのためのツールと捉えられていた。そう考えるならば、飾ることしかできない絵画や彫刻といった造形芸術よりも、日常的に使用可能な、生活に密着した衣服やインテリアといった応用芸術の方が高い有用性をもつと判断されたことは想像に難くない。そのなかでも衣服は身につけて街中に出ることができると、未来派にとってははうってつけのメディアだったといえよう。そのために、「機能的」という特性が不可欠のものとなったのだ。

上記の未来派的衣服の特徴として「耐久性のない」という項目があることにも注意しよう。これは一見、「機能的」と相反するように思われるかもしれない。しかしながら、バッラ自身が「男性服宣言」のなかで、衣服に耐久性がなければテキスタイル産業を促進することもできると主張しているように、未来派はより大きな視座で衣服の問題を考えているのだ。実際、衣服は産

業と密接な関連をもつ。当時、イタリアはファッションの中心地である隣国フランスに従属していた(つまりいわゆるパリ・モードを流行として取り入れていた)が、ことテキスタイル産業に関してはその品質と職人技術においては秀でていた。そこで、ファッションとも同調する未来派は、他国に対するイタリアの優位を喧伝する手段のひとつとしてテキスタイル産業の振興を目論んでいたのだ。

さらに興味深いことは、バッラが衣服に対して「陽気」や「意志の強い」といった心理的なニュアンスをもつ形容詞を適用している点である。今でこそ、自分の好きな装いに身を包むことが気分に影響するのは当然のことだが、王族や貴族は別にすると、そもそも衣服は気分によって選ぶものではなかった。そのため、一般に衣服を精神に作用するものだと考えられていなかったが、バッラは衣服の色彩やデザインが精神に訴えかけうることを認識していたのである。

現代のファッションに目をやってみれば、産業面に關しては、日本でも数年前から年二回のコレクションに国(経済産業省など)が積極的に関わってきたり、衣服の精神的な作用に關しては、ファッション・セラピーなるものが提唱されたりしている。美術史と服飾史とのあいだにあるために看過されてきた芸術家によるファッション論は、十分に理論的とは言えないまでも、そのアイディアからは多くのことを引き出せるであろう。

月経前に訪れる心とからだの不協和音

松本珠希

TAMAKI MATSUMOTO



健康のバロメーターの代表的なものとして、体重、体温、血圧等が挙げられる。最近では、メタボの象徴、お腹のつばり（腹囲）もその一つだろうか。これらの指標は、男女に共通するものだが、とりわけ性成熟期の女性の健康を語る際、「月経周期」というもう一つの重要な健康指標があることを忘れてはならない。

月経前の不思議な現象

月経は、成熟にもなつて思春期の第二次性徴の一つとして、女性のみが発現する「生殖を目的とした生理的機能」である。一人の女性が生涯にわたつて経験する月経回数は四八一回、二度の出産を経験した場合でも四五九回に達すると推定されている⁽¹⁾。約一ヶ月間隔で起こる月経リズムの規則性は、女性の心身の健全な発育・発達と生殖能力の指標となるのだが、月経周期に関連して、女性はかなり高い確率をもつて、心身違和感を経験する。特に月経が訪れる前になると、腹痛、腰痛、頭痛に加え、イライラする、怒りっぽくなる、涙もろくなる等の感情の変化を経験し、集中力の欠如、学習及び作業効率の低下、人間関係の悪化等、社会的な問題にまで発展することもある。だが、不思議なことに、月経が始

まると、種々の心身不調は、やがてすーつと消えていくのである。この周期性をもつた女性特有の現象を「月経前症候群 (premenstrual syndrome: PMS)」と云う。

PMSは、東洋では紀元前から認識されていたらしく、紀元三世紀に張仲景により編纂された世界最古の臨床医学書とされる「傷寒論」にその症状の特徴と適用漢方薬が記載されている(図1)⁽²⁾。一方、西洋医学においては、一九三一年、米国の神経科医Robert Frankが月経前緊張症 (premenstrual tension) という一つの疾患として発表したことに始まる⁽³⁾。以来、約八〇年に亘り、世界中で研究が行われてはいるが、その全貌は今日なお完全には明らかにはされていない。ほぼ毎月のように月経前になると訪れる「心とからだの不協和音」は、なぜ生じるのだろうか？ 私は、人間の体の中に潜む「ゆらぎ」を用いて、未だベールに包まれたPMSの謎解きに挑戦している。

心拍のゆらぎ

成人の安静時の心拍数は、約六〇〜七〇拍/分では安定しているが、心臓の拍動リズムは必ずしも一定ではなく、その一拍ごとの間隔には絶えざる微妙なゆらぎ

太陽病不解、熱結膀胱、其人如狂、血自下。血自下者瘥。

帳仲景著
『傷寒論』
〔太陽病篇・中篇第六十一条〕

図1 月経前症候群の特徴
「…其の人には狂の如き症状があるが、血が自ら下ったものは癒える。」⁽²⁾

が認められる。実際、心臓の電氣的活動を体表面から記録する心電図を用いて、安静時の心臓拍動間隔(R波と呼ばれる最も大きなピーク波の間隔)を一〇〇分の一秒(ms)単位で測定してみると、例えば一〇五ms↓八一三ms↓九三〇msなどのように変化し、健康な若年者では、一〇〇msを超える変動を示すことが多い(図2)。一方、身体的・精神的ストレス下では、心拍のゆらぎが減少し、重度の心疾患及び糖尿病患者、重症うつ病患者では、心拍はほとんど揺らぎが、メトロノームが時を刻むような正確なリズムになる。病気になるほど正確なリズムになる？ 逆ではないか？ と思われるかもしれない。しかし、これも体に潜む不思議な現象の一つだろう。つまり、健康な生体では、安静時に積極的に心拍のゆらぎを作っており、それが健康の証なのである。

心電図R波とR波の間隔(R-R間隔)

松本珠希(まつもと たまき)
一九六五年、大阪府生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究所博士後期課程修了。京都大学博士(人間・環境学)。現在、四天王寺大学教育学部教授。専門分野は女性心身医学、健康科学。Niles Newton Award(第一五回国際女性心身医学会二〇〇七年)及び第六回池見賞(第四九回日本心身医学会二〇〇八年)受賞。主な業績「Premenstrual Disorder: An Enigmatic Condition」(In: Mira Lal (ed), Biopsychosocial Obstetrics & Gynecology: Psychosomatic Dimensions to Pathophysiology and Clinical Practice, Research Signpost, in press) *5, 5a。

- (1) Michell DR Jr. *Am J Manag Care J* (16 Suppl) : 5473-9, 2005.
 (2) 松本珠希他『女性心身医学』12:433-43, 2007.
 (3) Frank RT, Arch *Neural Psychiatry*. 26: 1053-7, 1931.
 (4) 松本珠希他『心身医学』48:1011-24, 2008.
 (5) 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金 18590623(基盤研究C)

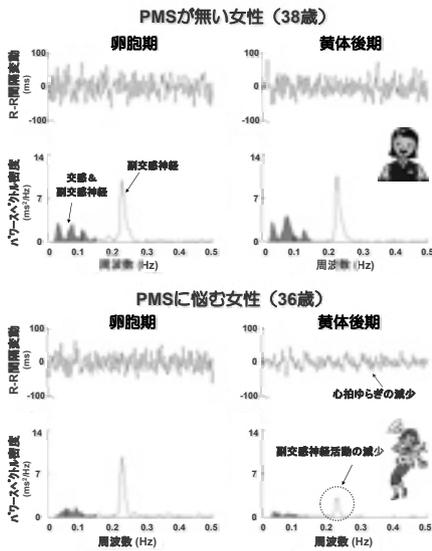


図2 自律神経活動から読み解くPMS

を四分間プロットしたグラフは、一見複雑な波のように見えるが、周波数解析を行うと、主に二つの山が認められる(図2)。動物やヒトを対象とした薬理学研究から、低周波領域(黒い部分)は交感(一部副交感)神経活動を、高周波領域(白い部分)は副交感神経活動を反映していることが明らかになっている。すなわち、心拍が一拍ごとに速くなったり遅くなったりするゆらぎ現象は、交感神経と副交感神経の二つの神経系からなる自律神経系により調節されているのである。

自律神経系は、呼吸、血液循環、消化吸収、排泄、生殖など、生命を保つために不可欠な身体の機能を自動的に調節し、体内環境を整える働きをする。また、身体に生じるもろもろの変化を精神活動の座である脳に伝達するため、心にも絶えず影響を与える。これこそ、自律神経系が「心とからだをつなぐルート」と喻えられる所以であり、交感・副交感神経の機能の低下やバラ

ンスの乱れが、多種多様な心身不快症状を招いてしまう。

ゆらぎから読み解く心身の不協和音

PMSという名の月経前の心身不調。その症状の発症に自律神経系は関与するのだろうか? この素朴な疑問を解くために、二〇〇四〇代の女性を対象に、卵泡期(月経開始日を第一日とし五〜一〇日目)と黄体後期(次の月経が始まる前一週間)に安静時の心電図を測定、心拍のゆらぎを検出することにした。同時にアンケート調査により心身不調の程度も尋ねてみた。「PMSって何? 月経前の不快症状なんてないわ!」とおっしゃる方もいれば、「私を苦しめるこの倦怠感、このイライラ…PMSっていうのね!」と納得し、誰よりも意欲的に研究に参加してくださった方もいた。驚くことに症状の種類と程度は多岐に亘っていた。得られたデータの一部を紹介すると、PMSとは無縁の女性では、月経周期に応じて自律神経活動は変化しなかった(図2上)。しかし、その女性と同年代で体格もほぼ同じであっても、月経前に心身不快症状が二〇%以上増加する女性では心拍のゆらぎが減少し、副交感神経活動が明らかに低下していた。だが、月経が始まり症状が消える頃(卵泡期)、低下した自律神経は回復していた(図2下)。これらの症例から見ても明らかのように、PMSの背景には、心とからだをつなぐルートが何らかの変調をきたしていることが考えられる⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

現代女性の新たな生活習慣病

二〇〇一年四月に始まったPMS研究。研究費が底をつき、実験を中断せざるを得ない時期もあったが、これまでに三〇〇名以上の女性が私の研究室を訪れてくれた。個人カルテのお名前を見れば、どのような症状で、心拍のゆらぎはどのくらいだったか、不思議とすべて思い出す。

PMSは心拍のゆらぎからすべて説明できるわけではない。月経周期に応じて現れるのだから、女性(卵巣)ホルモンが影響していることは否めない。最近では、うつ病の原因のひとつであるセロトニンという神経伝達物質がPMSの発症に関わっていることも報告されている。生物学的な要因だけでなく、その女性の性格傾向や身体症状に発展しやすい心理反応、偏った食生活や運動不足、喫煙等の不適切な生活習慣、家庭環境や職場におけるストレス等、女性を取り巻く社会環境の変化もPMSの発現と悪化に影響する。その意味で、PMSは現代女性の新たな生活習慣病といえるのかもしれない。

私の今後の研究課題として、PMSと自律神経活動との関係を明らかにすることはもちろんのこと、思春期、性成熟期、更年期、老年期等、各ライフステージにおける女性特有の心身不調のメカニズムを探りつつ、Bio(身体・脳—Psycho(心)—Socio(社会・環境)—Ethical(倫理・生き方)の観点から、平均寿命が八六歳を超えた女性の長い一生を、心身ともに健康で輝麗(キレイ)に過ごす秘訣を模索したいと考える。

岡田敬司 著 評者・佐藤公治（北海道大学大学院教育学研究院教授）

「人間形成にとって共同とは何か」

ミネルヴァ書房

二〇〇九年二月 二四四頁

定価二八〇〇円



岡田が本書、そしてこれまでに上梓された複数の著書の中で一貫して追究している問題は「自律性」の形成はいかに可能か、そして「自律性」を伸長させる「共同体」の営みとはどのようなものかということである。この「問い」は、教育を考える上でも、さらには人間に関心を持つ者にとっては本質的、かつ答えを出すことに難渋する「問題」でもある。評者のような人間の発達を心理学的な視点から考えていこうとする者にとっては、「自律性」をとすると個人の知識獲得や社会的知識の問題にすり替え・矮小化してしまいがちだが、筆者の言う「自律性」はそのようなものではなく、端的に

言えば、自己が他者、そして共同体の中で生まれる相互啓発ないしは相互触発を生みだしていく共存関係のことであり、その形成可能性のことである。このような筆者の言う「自律性」の形成にはどのような「共同体」と「共同体」における実践、あるいは相互的関わりが必要となるのだろうか。ここで筆者は二つの「方向」からこれらの「難問」に解答を出そうとする。何故、「難問」なのか。共同体は、集団的圧力と強制を個人にもたらすという宿命、あるいは全体と個人を調和させることの困難を抱えてきたという歴史的経緯があるからである。そのことを本書第一部の前半で

は跡付ける。第一部のこれらの章の内容は先行研究を筆者なりの視点から丁寧に読み解いているために、読む者には幾分かの努力を必要とする。しかし、これらに続く第三章、第四章は評者にも強く惹かれる内容である。この二つの章で、筆者は「自律性」を育むことを可能にするための第一の「方向」を提示する。それはチャールズ・テイラーに代表される多元的価値を受容し、内包するコミュニティの可能性である。特に岡田が強調するのは中間的な共同体の役割であり、この共同体における活動を調整する役割を果たし得る者の存在である。フランス革命前後の中で創造的な集団活動の役割を担ったサロンもそこに調停装置としての主人公が存在していたことは大きい。学校や学級における教師が果たすべき役割とは何であるかを再考しなければならぬ。

さらに、学校というコミュニティの再創造の手かがりを筆者は「フランス制度主義教育論」に求める。これについては既に筆者は複数の論考の中で詳しい論を展開してきたが、本書においても学校教育の中に「制度主義運動」の発想を持ち込むことの必要性を問う。集団の中の諸個人間の交流と共同管理を中心にした「制度主義精神療法」の思想や、「制度主義教育論」に基づいた「アニマシオン」の実践は自律性を持った学校ないしは学級という中間的な共同体のあるべき方向性を示してくれている。学習者の関わりの方、交流することによって生まれることの可能性を高めるためのファシリテーターとしての「アニマトゥール」の機能を学校教師が持つことの必要性が改めて確認することが出来る。学校は知識形成の場だけでなく、社会的人格の形成の場であることはいくら強調して

も強調し過ぎることはないだろう。共同体や集団が創造的であるために何が必要であるかという議論は、かつて、三木清の「構想力の論理」や中井正一の「委員会の論理」の中でも追究されてきたことである。筆者はこの大きな「難問」、特に学校教育の抱えている問題に対する「解答」の模索を続ける。

第二部の複数の章では、筆者はもう一つの共同体の組み直しのための「方法」として、情感的、個人的な意味世界をも包み込んだ共同の言葉による他者との交流による共同体的絆の形成可能性を提示する。若くして夭折した発達心理学者・ヴィゴツキーは、他者との言語的交流の中で自己の思惟や意識が形を成していくことを強調する。人間は自分の思想に気付き、また自分の意識を自覚化していくこと、そしてさらには他者と思想を交流していくためには共同の言葉が必要である。この外部に存在するものを自分の思惟と思想のために、自分の言葉として自分の中に取り込み、自分のものにしていく。外部に存在し、他者と分け持たれている共同の言葉がなければ個人の言葉も、そして思想も作られない。筆者が述べる蓄積・圧縮という文化的道具は自律のためには不可欠であるということと同義である。これら自律のための援助があつてはじめて自律は可能になる。個人と共同、個と集団との二項対立的な議論は既に無効である。筆者は自律を促す他律、創造的な共同体のあるべき姿を追い求め続ける。それは教育学の本質論議でもある。本書を読み進めていくにつれて筆者が模索を続けている問題がいかに大きく、重要なものであるかを評者にじわじわと迫ってくる感覚にとらわれた。

宮崎理枝他Ⅱ著

評者・松本勝明（国立社会保障・人口問題研究所政策研究調整官）

「現代イタリアの社会保障——ユニバーサルイズムを越えて」

旬報社

二〇〇九年二月 三七三頁

定価四五—五円



研究論文の発表、学会での報告なども行われているが、いずれも単発的なものにとどまっている。

このような状況は、イタリア社会保障研究の重要性に決して相応したものとはいえない。いわゆる「福祉国家レジーム論」においては、スウェーデンなどの社会民主主義レジーム、ドイツなどの保守主義レジーム、米国などの自由主義レジームのほか、イタリアなどの家族主義レジームがひとつの類型として位置づけられる。この家族主義レジームの重要な要素のひとつは、家族の役割が重視されることであり、この点においてイタリアは我が国とも一定の類似性を有しているということができる。女性就労率の低さ、出生率の低さ、高齢化率の高さなど、社会保障に重要な影響を及ぼすその他の諸要因においても、両国の間には共通点がみられる。

家族の役割に関連して、本書において最も興味深い論述のひとつは、高齢者福祉施策、特に高齢者の介護に関するものである。我が国では、介護保険が導入され、要介護高齢者は介護保険の負担により在宅介護サービス事業や入所介護施設から提供される介護サービスを受けることが可能となっている。しかし、介護保険が導入される時点から、介護保険は、このような介護サービスを提供することにとどまらず、家族が要介護高齢者の介護を引き受ける場合には現金（介護手当）を支給すべきであるとの議論がある。

これに対して、イタリアでは、現金支給が要介護高齢者に対する施策の中心となっている。一方、介護サービスの供給体制には、イタリアの特徴である大きな地域格差がみられる。このため、要介護者は必ずしも適切な介護サービスが受け

られる状況にはない。このような状況を反映して、要介護者に支給される現金を基に自治体や介護事業者により提供される介護サービスを利用することができず、また、家族だけでは介護しきれないために、専門知識や経験を持たない低賃金の移民介護労働者を雇用することが急速に広がっている。

要介護者に対する現金支給を支持する立場からは、無償で介護を行う家族に報いることができることや要介護者自身による選択・決定が尊重されることがそのメリットとして強調される。これに対して、イタリアの状況は、現金支給がもたらすデメリットを現実を示す点において、要介護者に対する現金支給の是非を巡る議論にとって重要な参考事例のひとつとなるものである。

著者たちが指摘するように、本書は、イタリア社会保障のための基本資料の整理・提供を主眼としたものである。しかし、これを契機に、我が国でイタリア社会保障研究が活発化し、我が国社会保障に関する検討に有意義な成果が得られることを期待してやまない。そのことは、評者のようにイタリア以外の外国の社会保障について研究する者にとっても、より幅広い観点からの比較研究を可能にすることにつながるものである。

最後に、これまで、イタリア社会保障研究に取り組んでこられた著者の方々がその発展のために本書の発行に一致協力して努力されたことに対して、社会保障に関する国際比較研究に取り組む一員として敬意を表したい。

本書は、題名のとおりイタリアの社会保障を対象として、その理念と特徴、年金、医療、福祉などの各制度の概要を論じたものである。本書は、イタリアの社会保障全般について論じたものとしては、我が国で発行された初めての単行本である。

我が国における社会保障の国際比較研究の対象は、これまで、ヨーロッパの国々では、スウェーデン、イギリス、ドイツ、フランスなどが中心となってきた。例えば、社会保障の国際比較に関する代表的な著作のひとつである『先進諸

国の社会保障（全七巻）』（東京大学出版会、一九九〇—二〇〇〇年）でも、ヨーロッパ諸国ではこの四カ国が取り上げられているだけで、イタリアはその対象とされていない。また、諸外国の社会保障制度に関する理論的・実証的研究の成果などを収録することを目的とする学術誌である『海外社会保障研究』（国立社会保障・人口問題研究所から年四回発行）においても、毎号企画される特集のテーマとしてこの一〇年間はイタリアの社会保障が取り上げられたことはない。もちろん、イタリアの社会保障に関する個別の

篠原資明Ⅱ著 評者・松井茂(詩人・東京藝術大学大学院映像研究科特任講師)

「空うみのあいだ」

思潮社

二〇〇九年一〇月 一四一頁

定価二七三〇円



〈風雅モダンイズム〉の詩的実践

〈効く〉哲学

タイトル過剰な詩集である。篠原哲学のキーワード「空海」と、キーワード「あいだ」が織りこまれていく。「自分にはハードすぎる書評だ」と泣きことを言っても後の祭り……。

しばしときを遡って、一九九九年。私が篠原研究室を初めて訪ねて話し込んだ際、類に含羞の色を浮かべながら「哲学者は自分の哲学を持たなくてはいけない」という趣旨のことを言われた。程なく出版された『まぶさび記 空海と生きる』(弘文堂、二〇〇二年)の読後、この言葉を反復することになる。それまでボ

る」という、〈効く〉哲学の創造的進化は始まっていた。

宗教と個人

トマス・アクイナスが「無からの創造」説を主張し、神にのみ創造を認め、人間にそれをゆるさず、制作能力だけを与えた。これに対して、「あいだ哲学」の出発点にいるベルグソンが「無を前提とする思考そのものを否定し」、「無からの創造をつかさどる神を否定しただけでなく、旧来の存在論の前提そのものをも、つきくずした」(篠原資明『ベルグソン——「あいだ」の哲学の視点から』岩波新書、二〇〇六年)。篠原は、こうした美学史を継いだ位置で「まぶさび」を展開している。

私は、「まぶさび」の実践に関して、次の二点を注目している。

まず、人間の芸術創造を中核に、宗教性を生成している点だ。

日本の古代歌謡の有り様を顧みると、詩歌は宗教的世界観の表象だった。世界観が詩歌によって表明されることもあれば、詩歌の表現形式に則ることで世界が見出されることもあった。古代社会においては、詩歌が世界の創造と生成に関わっていたといっても過言ではないだろう。ここには芸術と世界が不即不離な対応関係を持ち、循環する文化モデルがあった。神無き時代から換言すれば、人間の生活の側にある文化に対して、外部にある自然を擬人化(キャラクター化)し、他者を受け容れるように対話を幻想するシステムをつくったわけだが、トマス・アクイナス同様、詩歌の形式は神授のものだった。私は、「まぶさび」が、神無き時代に、人工の詩の形式を基点に、世界を受容するシステムを模索し、シ

ミュレーションとして実践している点に注目したいのだ。

次に、「まぶさび」に関わる創造や生成が、過剰な起源(歴史性)や偶像を設定せずに、極めて個人的な営みとして行われているという点だ。

先に古代歌謡を例示したが、そういった共同幻想的な忘我の熱狂ではなく、個別現実的な自省の沈思を求める。方法詩という秘教を廃した、表現の自由に基づくシステムが、静かに遍く開示されていることに注目したいと思う。

「あいだ」という問奏

——ポストモダンイズム以後

西垣通「ネットとリアルのあいだ 生きるための情報学」(ちくまプリマー新書、二〇〇九年)を詩集と並行して読んだ。

本書は、二一世紀のアイデンティティ・クライシスの原因を、二〇世紀の古典的な情報科学に基づく技術によってもたらされた、「言語的自己」と「身体的自己」の急速な分裂と指摘する。これに対する処方箋は「身体性の回復」無意識の重視「コミュニティの見直し」だと挙げつつ、西垣は回想する。この処方箋は、二〇世紀末にポストモダンイズムの言説として多く語られたことである、と。西垣はポストモダンイズムが、ギリシアから始まる西洋哲学をベースにした議論であることを理由に限界があると指摘し、ノイマン型コンピュータによってきた電子機械的な情報学のあり方だけではなく、サイバネティックス的な、生命体と電子機械とを統一した観点からの情報学の再検討を促している。

具体的には、「人工知能や脳科学の研究をふまえた「生物としての人間」に立ち返った設計思想に基づく「有機機械」

の研究をひとつの解答としていて、動物の生命情報をITによって可視化した芸術作品による展覧会にひとつの可能性をみている（東京のICCで二〇〇七年に開催された「サイレント・ダイアローグ 見えないコミュニケーション」展）。

「まぶさび」も「生物としての人間」を積極的に捉え直し、現在なりに記号接（サイン）地を促している哲学なのではないだろうか？

篠原によれば、いわゆるモダニズムとは（形のモダニズム）であり、「過去を克服し、極端な場合には、さげすむ」とするもので、ポストモダニズムは（引用のモダニズム）であり、過去を友として「新しきつなつかしむ」ものとして、後者に好意を示している（「あいだ哲学論考」、講座哲学第一巻『いま（哲学する）ことへ』所収、岩波書店、二〇〇八年）。

神なき時代の社会機構に疎外される個人という、近代自明な状況に対して、西垣は飽くなき右肩上がりを志向するモダニズムのパラダイムシフト（西垣はこれを情報学的転回という）を求めている。私は、これに同調するいっぽうで、右肩上がりの幻想が、社会の動因であることも積極的に認める必要がある。

「まぶさび」は、徒な共同幻想の回復や、ポストヒューマンに陥らず、モダニズムを切断せずに接続したうえで、別様のモダニズムも生成してみせる。（引用のモダニズム）に続いて篠原が提案するのは（風雅モダニズム）である（『現代芸術の交通論』丸善、二〇〇五年）。

（風雅モダニズム）は、新しさを追求しながら、自然を友とする——自然を友とするとは、自然と自分の無常の共有だと篠原はいう。「人と自然のあいだに二

重生成を生起させることで（中略）、自然の感受の仕方も、芸術の感受の仕方も変質する」。ここには空海や慈円からの展開がある。空海の「山に遊んで仙を慕う詩」は、

一身一人生致す
電影は無常なり
遮那阿誰が号ぞ
本是れ我が心王なり

というものであり、（風雅モダニズム）のコンセプトそのものだ。また（風雅モダニズム）の例として、ヴォルフガンク・ライプの花粉による作品や、ウォルター・デ・マリアの「雷原」が挙げられている。

モダニズムを切断するのか接続するのか？ これは実際のところ大問題過ぎて筆者には深入りできない。ただ、ポストモダニズムの次の転回点が、「人と自然のあいだ」にあることは、情報技術と哲学分野において——その手法が大きく異なるとしても——重ね描かれる状況が見受けられることは指摘できる。

詩的实践としての方法詩

篠原の代表的な方法詩である超絶短詩のルールは、一語を二語に割る——単語に（あいだ）を挿入する。例えば「嵐」を「あら」と「詩」に分割し、記述的な名詞と、口述的な間投詞や前記号的要素に分解する。過剰な解釈かもしれないが、私は、言葉の底辺にある、喜怒哀楽をあらわす前記号的な音声を導き出すこの方法詩に、言語における「身体性の回復」を感じている（これも契機のひとつとなつて、私は、二〇〇九年から「音韻と感覚イメージによる触覚デザインの研究」を行っていたりする）。二〇世紀初頭にあった記号言語学的な「意味の切断」（シニフィエとシニフィアンの分割）から、認知言語学的な「身体との接続」（記号接地）が、ここに示されていると指摘したい。超絶短詩は、人間の身体上で、文化と自然と情動の生成に関わる詩だといえる。

まぶさび詩に関しては、先述したように、情動を拡張する表現効果ではなく、むしろ鎮静効果が期待されている。ささやかな人間の、うちなる自然の復権が、ささやかな創造行為と繋がって、ささやかな宗教的思考を促す。宗教的思考とは、現代においては自己言及を促すことだろう。それが結果的には沈静作用を導く。つまり、いまさら具体的な神との出会いを目的としているわけではない。百人一様に陥りがちな日常から外れることで、自然治癒的な可能性を確保しようというサブバイバル術なのだ。

ちなみに西垣によれば、ノイマン型コンピュータにとっては、自己言及は誤作動となるという。自己言及という自然の側にしかない思考ループと、「まぶさび」が現在において（効く）哲学である所以は接続しているだろう。ポストモダニズム的であるにもかかわらず、豈囃らんや現実的なのだ。

『空うみのあいだ』から（別様に）の生成

本詩集は、複数の方法詩をもとに、ゆるやかな自身の引用から作られている（自己言及的なのだ）。さらに各篇では他者——生者、死者、著名人から親族まで——が招かれその話題は、まぶさび詩によって、滝見立てとなつて現れる。その生と死の（あいだ）、つまりは、他者の人生＝時間をシミュレーションし、自然

を友としつつ、新しきつなつかしまれともいえる。

赤瀬川原平が「超芸術」（一九七二年）の先駆者として千利休を名指していることに關して、篠原はこれを「（別様に）の生成」と呼んでいる（『現代芸術の交通論』）。

それは、「現在に生じた新たな見方が、過去の見方をも新たに変質させるというあり方（中略）現在を（別様に）見る立場が、過去を（別様に）見る立場を生成させる」ということを意味する。こうしたあり方がこの詩集の方法論であると指摘することもできよう。

『空うみのあいだ』の最初の詩「電影」、

「無常なる、身の奥へ、神鳴りぬ／空と海のあいだを稲妻が走った／この命もあつという間だ／神仏はどこに探すのか／心の奥にしかないというのに」。

これは先に引いた「山に遊んで仙を慕う詩」の（別様に）の生成だ。詩集全体のコンセプトと共に、篠原から空海へ、空海から篠原へという超歴史的な立場を引き出し、ウォルター・デ・マリアと関連する可能性をも生成する。

「電影」は、詩集全体の題辞みたいな作品である。ここから展開される世界には読者にとつての「（別様に）の生成」と、筆者・篠原資明にとつての「（別様に）の生成」が混在している。芸術史への提案と共に、個人の鎮魂や呵責の慰撫がある。

だからタイトル通り、実は、過剰な内容を持つ詩集だと思う。忘却と歴史と記憶とトラウマを（別様に）やり過ごすところに、私は詩的实践を感じている。一冊の詩集に留まらない「まぶさび」という哲学の实践と効力を考えてみてもらいたい。

中森譽之 著

評者・佐野正之（横浜国立大学名誉教授）

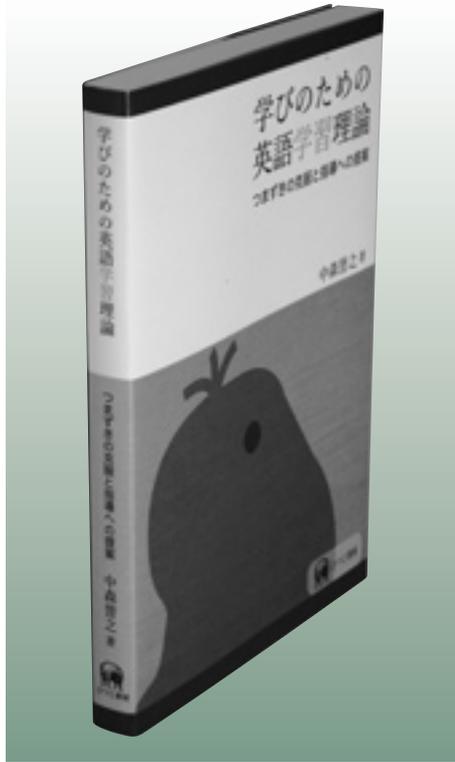
「学びのための英語学習理論」

——つまずきの克服と指導への提案——

ひつじ書房

二〇〇九年十二月 二八四頁

定価二五二〇円



「なぜ生徒は英語学習につまずいてしまふのか。つまずきは、どこで、なぜ生じ、どうしたら克服できるのだろうか」と悩む教師は多い。生徒もまた、「英語の成績は良かったのに、なぜ文章が書けない、話すこともできないのか」と疑問を抱く。こうした悩みや疑問に言語習得と言語処理の理論を援用しながら克服のヒントを与え、実践と学問的知見との対話によって新たな英語学習理論の構築を意図したのが本書である。

本書は七つの章から構成されている。第一章「英語学習理論の背景」ではこれまでの英語教育学が「教える」ことを優先し、「学ぶ」側、特に日本人学習者の英語能力獲得過程への配慮が十分に

な学習方略を提示している点が興味深い。第3章は「文字とつづり」で、文字習得の負担は大きいので、音声の習得後に指導すべきだとし、小学校では英語の基本を音声で定着させ、フォニックスの指導は中学校で行うよう提案している。

第4章「語彙」では、ピアジェやヴィゴツキーの説を引用して習得の段階性 (readiness) に注目し、日本の英語教育でも段階に応じた語彙指導がなされるべきだとしている。具体的には、中学では受容語彙を重視し、高校では受容語彙の伸長を図ると同時に、場面設定をして発表語彙を伸ばし、上級段階ではタスクを用いて獲得した語彙を活性化し、また、チャートを活用した語彙の定着や、構造や時制やアスペクトなどにも注意を払った動詞の指導、個々の処理型に合致した学習法の推進など、現場の「つまずき」を克服する有効な手段を提案している。

第5章は「構造」である。構造的習得過程に関する諸理論を解説した後、Lexical Approach に基づく受動態や関係代名詞の指導手順の具体例を示し、「語彙」と「構造」の指導理論の再構築を促している。

第6章の「運用」では、コミュニケーション能力の定義や習得過程に関する諸理論から得られる示唆をもとに、統合技能の育成を提案している。さらに「英文和訳」と「英文英訳」の段階別利用、すなわち、初級段階では日本語と英語を一対一で結びつける習慣をつけるので避け、一方、中級・上級では正確に構文をつかみ、理解・表出する技術の指導に利用すべきだとしている。新学習指導要領では、「高校の英語授業は原則英語で行う」としているので、「英文和訳と英文英訳」の授業中での位置づけが今後の課題にな

るだろう。

第7章は「教育への提案」である。これまで述べた指導上のポイントが音声・文字・語彙・構造・運用に分けて一覧表で示されているので、振り返りのチェックポイントとして有効である。更に「一貫性を持った英語教育に向けて」で音声を中心にした指導と文字中心の指導が中学校から比重が逆転し、同じく語彙中心の指導と文法中心の指導も中学・高校で比重を文法に移すシラバス作りが提案されている。小学校から大学までも見通したカリキュラムの理論的な提案は従来なされてこなかったもので、非常に魅力的である。また、今後の運用能力を育成するための指導には、以下のような転換が必要だとしている。

1. 文字言語中心から音声中心の指導へ。
2. 文法規則中心から、語彙を中心として、目標文法が使われる自然な状況や文脈に基づく指導へ。
3. 説明、練習、確認型から活動中心型の指導形態へ。
4. 翻訳中心型から構文処理技術定着型へ。
5. 知識暗記型から運用能力育成型へ。
6. 結果重視の教育から過程重視の教育へ。
7. 初級段階は理解技術中心、中級段階以降、表出技術の育成へ。
8. ことばの力を育てる国語科との連携を図る。

結論からすれば、こうした視点の欠如が「つまずき」を生んできたのであり、それを膨大な理論研究と、学習者の視点に立った教育実践との対話によって克服しようとする著者の志は高く、新しい英語教育学の誕生を予感させる。

加藤幹郎 著

評者・山本佳樹 (大阪大学大学院言語文化研究科准教授)

「表象と批評——映画・アニメーション・漫画」

岩波書店

二〇一〇年四月 二五〇頁

定価 二九四〇円



本書は、著者が主に二〇〇四年以降に学術誌等に発表してきた、大衆表象をめぐる八編の論考にもとづく批評的エッセイ集である(一編のみ一九八七年初出)。その内容はもとより体系的なものを志向していないが、それでも、配列の妙と周到な加筆とによって、またテキストに對峙するスタンスの一貫性によって、ゆるやかな統一感が生みだされている。

とヒロインとの鏡像関係という主題と連携していること、主人公たちが見るホーム・ムービーにおいて観客が想像上の映画メディアの表象能力を再認識させられるような斬新な指摘が続くが、それはいずれも、まずはテキストに虚心に身を任せることから導きだされたものである。著者は作品への愛を隠さない(『レベッカ』はわたしの好きな映画テキストのひとつ)。既成の理論をあてはめてテキストを還元論的に読み解こうとするような態度は、それゆえ容赦なく批判される。テキスト分析は、個々のテキストの肌理

にしたがって、その偶有性を掬いとりとうとする作業でなければならぬのである。

この後、本書は三部にわかれる。第一部には、実写映画を対象とした三つの章が収められており、序章で示されたテキスト分析の方法が複数のテキスト間で実践され、映画史論、映画作家論、ジャンル論へと批評の射程が拡大していくことになる。第一章では、ゴダールとその三〇年後のスピルバーグがホークス作品を引用していることを端緒に、映画におけるスペクタクルの位置というリユミエール以来の問題に光が当てられる。ここで強調されるのは、「映画史」とは規範的な年代記ではなく、映画テキスト間の参照・引用によって常に編纂され続けるものだという点である。第二章では、さまざまなジャンル形式と軽やかに戯れることで亡命地での映画人生を生きぬいた「B級映画作家」アルマーのフィルムモグラフィを追いながら、スタジオ・システム時代のアメリカでの映画製作の一面が活写される。第三章では、保安官の権威主義がアウトローによって糾弾されるイーストウッドの西部劇が、善悪二元論に基盤をおくアメリカ建国神話と結託したこのジャンルの終焉を意味するものであることが示唆される。

第二部を構成するのは、新海誠のアニメーション映画をめぐる論文一編のみであるが、これが本書中最長の章であり、新海の『秒速五センチメートル』のクラウドスケイプ(白雲の景観)が本書の表紙を飾っていることから、また、アニメがその表象媒体としての性格上、実写映画と漫画をつなぐ存在であることから、全編を束ねる役割を担っていることが窺える。この第四章で議論されるのは映画における風景表象という主題であり、人

間と風景とが共振する新海アニメが、実写映画において見られなかったような風景の実存を達成していることが、みずみずしい筆致で例証されていく。

第三部は漫画論である。第五章では、斜めに切りとられた齧のなかで身をかがめる登場人物たちが画面に充滿する荒木飛呂彦の『ジョジョの奇妙な冒険』が、現実模倣を目指す古典漫画から逸脱したマニエリスムの傾向の到来を告げた作品として称揚される。第六章では、漫画という媒体がそれ自体としてはらむ豊かな時間の可能性をそれぞれの仕方打ち開いた石森章太郎、ちばてつや、はるき悦巳の独自性が紹介される。第七章では、公共圏での月刊誌中心の読書から勉強部屋での週刊誌中心の読書へという漫画受容形態の変遷と関連させて、一九六〇年代の模図かすおの恐怖漫画の流行とのその恐怖の質が吟味される。

各章の批評に通底する特質をあげるならば、ひとつには、テキスト内の、またテキスト間の反復とその都度の差異を見逃さない抜群のセンスであり、いまひとつには、表象媒体に内在する力が旧弊を破って顔をのぞかせる具体的な瞬間に払われる細心の注意だといえよう。そして、それが著者自身とテキストとのあいだの官能的なまでに幸福な無数の体験に支えられていることが、読者にはわかる。身近な大衆文化に向けられた細やかな観察は、今日の芸術論を賑わすきわめて多様なアスペクトを横断していき、翻って「芸術」とはなにかという問いを喚起することにもなる。自分が批評家なら、こんなふうに語ってみたいと思うだろう。自分がテキストなら、こんなふうに語られてみたいと思うだろう。そんな一冊である。

人環図書

— 本研究科教員・出身者の新著より —

ホロコーストからガザへ パレスチナの政治経済学

サラ・ロイ著、岡真理+小田切拓+
早尾貴紀編訳
青土社 二〇〇九年十一月

二〇〇八年暮れ、イスラエルは完全封鎖されたガザ地区に対して爆撃を開始、一方的な殺戮と破壊は二二日間に及び、ガザ住民の死者は一四〇〇名に達した。攻撃から一年半たつ今なお、封鎖により物資の搬入が極度に制限されたガザでは、破壊された家を建て直す資材すらない。住民たちの多くが、国際社会の人道支援でかろうじて命をつないでいる。

サラ・ロイは占領下パレスチナの政治経済の専門家であり、ガザ研究の世界的第一人者である。ガザ攻撃の余韻さめやらぬ二〇〇九年二月末、来日した著者は、東京大学ならびに、京都では本学本研究科で講演、本書はそれらの講演の記録を中心に編纂された。本学での講演録からは、国際社会と共謀しながら継続するイスラエルによる占領の実態と、まぎれもない人権問題、政治問題がいつの間にか人道問題にすりかえられ、人道支援の対象に矮小化されることで、占領下の住民たちから政治的主体性が剥奪されてゆくようすが緻密なデータによって明らかにされる。

さらに、ホロコースト生還者を両親にもつユダヤ人である著者と在日の作家、徐京植氏との対談も収録され、ホロコースト後を生きる人間の普遍的倫理という観点からパレスチナ問題が思想的にも考察されている。現代世界における倫理を根拠から問う一冊である。

〔A5判 一八二頁〕
定価 二七三〇円

二ころの病理学

新宮一成・片田珠美・芝伸太郎・
西口芳伯著
丸善出版事業部 二〇一〇年五月

本書は、京都大学大学院人間・環境学研究科や京都大学の出身者によって執筆された、精神障害をめぐる書物である。京大で行われている、精神保健学基礎論、行動病理学基礎論、精神病理学入門などに教養科目を中心とした講義における教材として、精神医学の臨床の世界の中で展開されるさまざまな精神疾患の歴史や現状を詳述している。読者が精神疾患についての客観的な知識を修得し、精神障害について偏りのない見識を涵養することを願って執筆されたものである。

内容を紹介すると、まず精神障害が社会における人間の主体性をめぐる深い問いを投げかけてきた歴史が語られ、そうした広い社会的文脈のもとで、統合失調症や躁鬱病（気分障害）などの、病の実際の姿が提示される。

具体的な症状や経過の記述を通して、精神疾患の体験世界の特徴、たとえば統合失調症における、世界の大きな変容の経験や、気分障害における自己価値の動揺、さらにはパーソナリティ障害や依存症の心的問題を、統いてこれらの疾患の治療の現状を、学ぶことができる。これらの理解をもとに、精神障害と一般社会の関係、とりわけどのようにしてわれわれが病との共生の論理を探ってゆくべきかを、法制度との関わりを視野に入れながら、掘り下げて考えてゆく。

〔A5判 一九六+x頁〕
定価 二一〇〇円

「人環フォーラム」編集委員会からのお願い

「人環フォーラム」誌は「書評」「人環図書」「瓦版」の記事を掲載する欄を設けています。「書評」と「人環図書」では、本研究科の出身者の方々の新著もご紹介しております。「瓦版」は、研究科の活動を内外の方々に伝達するものです。

紹介したい記事がありましたら、原稿を平成二二年二月末日までに編集委員会宛にお寄せください。委員会では検討のうえ、二八号（平成二三年三月刊行予定）または二九号（平成二三年九月刊行予定）に掲載させていただきます。

1. 「書評」については、ご著書を一冊、ご寄贈ください。
なお評者についてはご自身でお考えのうえ、お願いしてください。
2. 「人環図書」は、ご著書の内容を五〇〇字程度でおまとめいただき、表紙と奥付のコピーを添えてお届けください。なお、これは「紹介」であつて「宣伝」ではありません。
3. 教官・院生の表彰、顕賞、受賞についてお知らせ下さい。

なお、掲載の採否は編集委員会にご一任くださいますよう、お願いいたします。

資料の送付先 〒六〇六八五〇一 京都市左京区吉田二本松町
京都大学大学院人間・環境学研究科
「人環フォーラム」編集委員会
問い合わせ先 編集委員会事務局 ○七五七五三二二九八四（T/F）

瓦「かわらばん」版

◆「じんかん」人環とは？

本雑誌の表題「人環フォーラム」の「人環」とは、平成三年四月に新たに開設された「京都大学大学院人間・環境学研究所」の略称です。

◆催し物のご報告とお知らせ

◇「コモンズシンポジウム いまつくられているコモンズ(科学研究費補助金・特定研究)グローバル時代のローカル・コモンズの管理」主催

人間・環境学研究所間宮陽介研究室共催

●テーマ コモンズと現代

●日 時 二〇〇九年三月二十六日(金) 一三時～一七時

●場 所 人間・環境学研究所棟地下大会議室

開会挨拶 間宮陽介(人間・環境学研究所教授)

報告 現代社会でコモンズ理論はどのように使うべきか

——ローカル・コモンズという原点回帰／菅豊(東京大学東洋文化研究所教授)

土地利用のガバナンスにおけるコモンズの意義——法的視点から／鈴木龍也(龍谷大学法学部教授)

コモンズと都市再生——法社会学からのアプローチ／高村学人(立命館大学政策科学部准教授)

話題提供 株式会社を利用した新たなコモンズ空間の創出／廣川祐司(人間・環境学研究所博士課程)

コメント 泉留維(専修大学経済学部准教授)／三保学(兵庫県立大学経済学部准教授)／間宮陽介(人間・環境学研究所教授)

総合討論 菅豊／鈴木龍也／高村学人／三保学／泉留維

(コーディネーター 間宮陽介)

開会挨拶 三室守(人間・環境学研究所教授)

◇「第四回総人環同窓会フォーラム 総合人間学部・人間・環境学研究所同窓会主催」

●テーマ 東アジア共同体の可能性

●日 時 二〇一〇年六月二日(土) 一四時～一六時

●場 所 人間・環境学研究所棟地下大講義室

開会挨拶 安部浩(総合人間学部・人間・環境学研究所同窓会会長)

講演 東アジアの中の日本——東アジア共同体をめぐる／上田正昭(京都大学名誉教授)

むしろ東アジア共異体をめざそう／小倉紀蔵(人間・環境学研究所准教授)

司 会 木下富雄(京都大学名誉教授)

◇特別シンポジウム

パレスチナにおける共生の未来を考える（人間・環境学研究科岡真理研究室主催）

人間・環境学研究科国際教育研究部／京都大学イスラーム地域研究センター／Days Japan／広河隆一事務所共催

●テーマ パレスチナ問題とユダヤ人の起源―神話の歴史化に抗して―

●日 時 二〇一〇年六月一三日（日）一三時三〇分～一七時

●場 所 人間・環境学研究科棟地下大講義室

基調講演1 考え方の組み換えを争う場としてのパレスチナ問題／板垣雄三（東京大学名誉教授）

基調講演2 ザ・ヒストリアン―記憶から神話へ―／シユロモ―・サンド（テルアビブ大学教授）

パネル・ディスカッション 板垣雄三&シユロモ―・サンド & 広河隆一

司 会 岡真理（人間・環境学研究科教授）

◇夏休み特別企画

真夏の夜の映画会 All Night Live + Movie Festa（真夏の夜の映画会実行委員会）

●日 時 二〇一〇年八月二七日（金）一八時三〇分～

●場 所 総合人間学部・人間・環境学研究科図書館前広場／地下大講義室

ライヴ Desafinoによるボサノヴァ・ライヴ 一八時三〇分～

映画上映 『男と女』& 『明日に向かって撃て』& 『ディープ・ブルー』& 『パッチギ！』二〇時～